
とある論理の掌握演算 grasp - formula

柊千終

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある論理の掌握演算 g r a s p - f o r m u l a

【コード】

N O 3 3 7 P

【作者名】

柊 千終

【あらすじ】

正体不明の能力を持つ少年が姿を表す時新たな物語の幕が開く。

『誰も理「ルール」からは逃れられない。』

最強ではあるが両刃の剣でもあるその力を手に彼が挑むは運命、世界の影、自身の闇

基本原作沿いで話が進むので、つまらないかと思いますが、オリジ

ナルストーリーも入れていきます。

とある論理の開幕宣言（前書き）

新作です。相変わらず読みづらいですね。

とある論理の開幕宣言

「うおおおお〜!」

夜の道を1人の少年が全力で走っている。

まだそんなに遅い時間では無いため道行く人たちは何事かと目線を向けている。

見た目15〜6歳ぐらいで顔立ちは普通よりも少し上、身長も平均より少し上で

何の変哲もない一般少年である。

何故走っているのか

どうみても健康のための運動では無く寧ろ何か得体の知れない物から生き延びる為の逃避行に見える。

「何でこうなった?何でこうなった?」

半涙目でそうもらす。自分の行動を思い返しながら、後ろを見て逃避行の元凶である少女を確かめる。

その時一瞬前に足があつた場所に稲妻がおちる。当たった部分が黒く焦げて煙を出している所から食らえば洒落ではすまないだろう。

「待ちなさいよ!」

「何故俺を追いかけるんだ!!感謝こそあつても怨みを買つ覚えはない!!」

そう、少年、嫌、矢桐言波は単にこの少女を絡まれている不良達から助けようとしただけである。

あくまでしようとしたただけだが。未遂で終わったのはその時のやりとりが気に食わなかったらしく、その少女が一気に電撃で不良達を気絶させたからだ。

本来なら、言波も電撃を食らって気絶するはずだったのだがなまじ能力があるので回避したのがまずかった。そのせいで本格的にキレた少女から追いかけられる羽目になったのだ。

「大体待ったらどうなるんだよ！」

「私と勝負してもらおうわ！」

「ふざけるな！そんな電撃使って勝負になんかなるか。あるとしたら殺し合いだろうが！！」

「うるさいわね。いいから止まれ！！」

ひととき大きな稲妻が少女から放たれる。だが、命中すると思われた次の瞬間唐突に稲妻がかき消えた。

「さつきといい、今といい、あんたそれどうやってるのよ！」

「秘密だ。あまり使わせるなよ。疲れるんだから。」

「舐めんじゃないわよ〜！」

その少女は怒りに吞まれているが、もし正常な判断力があつたら気

付いただろう。何故言波との距離が一向に縮まらないのか。寧ろ離されていくのは何故か？言波は決して速いわけではない。それなのに縮まらない距離は何なのだろうか？

この少女がその異常に気付いたのはそれから約1時間後、言波を完全に見失ってからだった。

辺りをキョロキョロ見回すその少女を言波は近くビルの屋上から眺めていた。

（残念でした。誰も理「ルール」には逆らえないよ。）そしてニヤリと笑う。

とある論理の開幕宣言（後書き）

次回は未定です。

とある論理の能力解明（前書き）

未定とか言っておきながら案外話が出来たんで投稿しました。

とある論理の能力解明

「お前さえ生まれてこなければ」

声が響く・・・

(止める!!--)

「この化け物が。」

(止めてくれ!!--)

「死んでしまえ。」

(止める~~~~!!--)

絶叫と共に目を覚ます。汗をびっしょりかいている。呼吸を整え、見渡せば見慣れた部屋。見慣れた天井、見慣れた壁。

そして隣の部屋から聞こえる「不幸だ~~~~!!--」という聞き慣れた叫び声。

平凡で退屈。されど平和な日々、間違いなく愛すべき日常だった。

「夢か・・・」

そう呟く少年、言波

「またあの夢か、最近見なかったんだけどな。」

言いながら脇の時計を見る。時間を確かめると

「……………ハイ？」

午前8時、見間違えではない。このまま行くと確実に遅刻だろう。

「ヤバイヤバイヤバイヤバイ」

もはや呪詛のように呟きながら、急いで身支度を整える。外に出て、鍵を閉めている時、いきなり隣のドアが勢いよく開き、中からツンツンの髪少年が出てくる。

「おはよう当麻。」

「あれ、言波今日は遅いな。」

「ふっ、いろいろあってね。」

因みにのんびり雑談しているようだが、現在猛ダッシュ中である。その速さはこれオリンピック出れるんじゃない？的な速さだ。人間ギリギリになると何でも出来るらしい。

「いろいろって？」

「言っても信じまいよ。電撃を発する女の子から逃げ惑っていたなんてな。」

すると急に当麻の動きが止まった。

「おわ！急に止まるなよ。」

ギギギギと油の切れたロボットのような動きでこちらを見る。

「いいですか言波さん。今後一切そいつに関わってはいけません。上条さんみたいに不幸になりますよ。」

「うおおう。なんだ知っているのか？」

「まあいろいろあつたんだよ。」

と言って乾いた笑いをもらす。

それから10分後。

当然のごとく2人は遅刻した。

教室に入ると見た目小学生の担任教師

小萌先生が膨れっ面でこちらを見ていた。

「上条ちゃんに矢桐ちゃん、特に上条ちゃんの方はこう何度も遅刻だとそろそろ何か考えないといけませんね。まあ矢桐ちゃんはこれが初めてですので大目に見ましよう。」

「ありがとうございます。先生。」

「ちょっと小萌先生、私上条当麻にもれっきとした理由があるんですが」

「ほう。言って置きますが時計が壊れていたとか言うのは却下ですよ。」

「うっ。」

ぐうの音もせず「不幸だ。」と呟きながら席に座る当麻。言波も自分の席に座る。

そんな言波に

「どうしたぜよ。上やんはともかく言やんまで遅刻とは珍しいにや
」
と奇妙な口調で話しかける者がいる。
金髪にサングラスで少なくとも真面目君には見えない。

「ああ、土御門か、いや何、昨日女の子から追いかけて回されてな。
くたびれてつい寝過ぎしたんだよ。」
すると「なんやて。そんな素敵イベントがあつたんか。うらやまし
いわく言やん。」

こちらも土御角に負けず劣らず奇妙な風体。青く染めた髪にピアス
が目立つ大男だ。

「うるせーぞ変態青ピ。お前が思ってるような素敵な事じゃなかつ
たぞ。想像できるか？当たったら即この世からおさらばしそうな凶
悪な電撃を放つ奴から1時間追い回されたんだぞ。」

「僕ならA I I , O k やけどな。」

「黙れ変態。埋めるぞ。」

「ちよくちよく罵倒入ってへん？」

「はいそこ。それ以上しゃべりやがったらコロンブスの卵ですよ。」

その一言で静かになった。コロンブスの卵の説明は省くがとりあえず物凄い面倒くさい事だと思ってくれるといい。「それでは朝のHR始めますよ。といっても今日は身体検査システムスキャンだけです。各人決まった所に言ってください。」

何だって・・・？

能力使用 疲れる 面倒くさい!!よしサボろう!

この四段論法を1秒で完成させた言波はいそいと帰り仕度を始めたが

「矢桐ちゃんサボりは許しませんよ」

「無理です。疲れます。きついです。帰りたいです。帰ります。」

「何でそんなこと言うんですか?ちゃんと受けてくれないと先生困ります。」

若干涙を浮かべてそう言う。瞬間クラス中の視線が一気に刺さる。

この空気に耐えられなくなった言波は

「分かりました!受けますよ!!」

1分で負けた言波である。「因みに矢桐ちゃんの身体検査はここではなく別の場所で受けて貰います。と言うのもどうやら非常に特異

な能力のようでここの機械では測定できないのですよ。」

「はあ、で、どこで受けるんですか？」

「常盤台中です。向こうには連絡していますので案内がいます。それではいつてらっしゃいなのです。」

で、しばらくして。

「もう嫌だ。帰りたい・・・」

またやる気をなくしている言波の姿があった。何故か？答えは簡単。常盤台がある学舎の園は基本女子しかいないので周りからかなり視線を浴びているのだ。

「めっちゃ見られてる。ああ視線が痛い。くそっ、案内人はまだかよ。」

すると唐突に目の前に少女が現れた。

茶髪をツインテールにしているその女の子が、

「あなたが矢桐言波さんですか？」

「あ、ああそうだが。」

「始めまして。私案内の白井黒子と申します。それでは参りましょう。」

言波の手をとり、気が付くと巨大な校舎の前にいた。

「ああ、空間移動能力者ね。」

周りを見渡していると突然

ズドオオン！！

と轟音が響く。

「何だ、今の音？」

「ああ、お姉さまの測定をしているようですね。」

「お姉さま？」

「ご存知ありません？学園都市の7人のレベル5の第3位最強の電気使い（エレクトロマスター）
超電磁砲こと御坂美琴お姉さまを。」

「ああなんか聞いたかも。」

「あ、終わったようですよ。ほら次はあなたの番です。」

急かされるようにプールに上がるとそこにはいつぞや決死の逃亡をする羽目になった原因である少女がいた。

「げっ、お前は昨日の電撃娘！！」

「あつ、あなたは昨日の。よくも逃げてくれたわね。あの後寮監に見つからないよう部屋に戻るの大変だったんだから！！」「いや、最後の方俺のせいじゃないし。ってか全てに置いて俺被害者だし。」

「うるさいわね。ていうか何であんたがここにいるのよ。」

「身体検査だよ。」

「へっ？このプールを使うって事はあんた高位能力者？」

「さあな。もういいか？とっとと終わらせて帰りたいんだが。」

言波がプールに上がるとギャラリが増えた。どうやら他校からこのプールを使う程の高位能力者が来るのは珍しいらしい。

「それでは始めてください。」

機械的な音声に従って能力を発動する。

1分が経ち、2分経っても何も起きない。

もしかして失敗かと周りが騒ぎ出すがもちろん違う。

彼の能力は膨大な計算が必要なので時間が掛かるのだ。

そしてひとたび計算が終了するとそれは時空をもねじ曲げる能力となつて発動する。

「数式完成。最終証明。プール範囲固定

推定面積100×100平方メートル。終了。」

「エリアアウト空間削除！！」

その声と共にプールが消滅した。
ギャラリイは皆啞然とするばかりだ。

プールがあつた空間にはただただ漆黒の穴が空いているだけだ。静寂が支配するなかで測定機械だけが淡々と言葉を発する。

「結果

該当現象 不明

該当能力 不明

干渉範囲 測定不能

総合結果 Level unknown

その結果に言波は

「だろうな。俺でさえよく分からないのに機械に分かる訳がない。」
軽い頭痛を感じながらそう思う。

未だ静まり返っているその中で、ただ1人御坂美琴だけが面白いものを見つけたと言わんばかりに目をキラキラさせていた。

とある論理の能力解明（後書き）

もう一つの小説もそろそろ次話考えないと・・・

とある論理の実戦経験（前書き）

テスト終わりました（色んな意味で）

バチィ

「うおお！いきなり電気を飛ばすな。駄々っ子かお前は！！」

「あんたにやる気がないなら私が一方的に攻撃するわよ。」

「何サラツと死刑宣告してんだテメエ！！
もういい、年上に対する礼儀ってもんを教えてやる。覚悟しろよ！」

「漸くやる気になったみたいね。」

「ああやってやるうじゃねえか。」

これが大体30分程前になる。（あの時はつい熱くなっちゃったけど冷静になれば俺コイツと戦ったら死ぬんじゃない？）

真面目に考えると結構ピンチな状態だったりする。

「なあ、ヤツパリ止めないか？」

「はあ？あんたあそこまで言っといまさら逃げようっての？ぶざけるのも大概にしなさい！！」

（やべえ何か地雷ふんだ。何あの電気触れたら一発で人生とおさらばしてしまいそうな気がする。）

体中から電気を放出し、鬨る気が殺る気に変わっている目の前の少女を見て冷や汗を流す。バチィバリバリッ

そんな音と共に電気の槍が一直線に放たれる。

「いきなりかい!?!」

そう言いながらもギリギリでかわす。

因みに能力は使用していない。あくまで持ち前の身体能力を駆使しただけである。要は銃と一緒にだ。

放たれる方向にさえ気を付ければ避ける事は出来る。まあタイミングを合わせるのは難しいが。

「まだまだあ!?!」

連続で放たれる電気槍。

今度こそ命中する。

その筈だったが

唐突に全ての電気槍がかき消えた。

言波の前方50センチメートル程先の空間が所々削れている。

「なる程それがあんたの能力って訳ね。」

そう言いつつ手を地面にかざした。

するとその手に黒い物体が集まり出し槍のような形になり、言波の方へ向かって行った。

「だあああゝ!?!殺す気か?」

だがやはり眼前でかき消える。

「これで分かっただろうか？お前の能力は俺には通用しな・・・」
その言葉は最後まで発する事が出来なかった。

さっきの黒い物体を今度は剣のような形にして切りかかってきていたのだ。

因みにさっきの能力はもう使えない。

ただでさえ能力発動には膨大な演算が必要なのだ。いくら干涉範囲が小さくても一瞬で発動出来る訳がない。

やった。その少女の目には勝利の輝きが見えた。

それは誰が見ても少女の圧倒的な優勢だった。

誰が予想出来ようか

その剣をかわすなど・・・

そうかわしたのだ。

あの剣を。

その動きはケンカ慣れしているとかそういう生易しい物ではない。
明らかに戦いに慣れている者の動きだ。

少女はそう感じた。

その背中に初めて冷たい物が流れる。

轟音と共に閃光がかき消える。

「……嘘……でしょ？」

渾身の一撃をも打ち消されて呆然としている少女。

「なかなかの一撃だったぞ！」

余裕ぶっているが実は彼の内心は

（あ、危ね〜。演算間に合って良かった〜。じゃないと今ごろ多分ミンチになってたろうな。あ〜怖かった。生きてて良かった〜。）

こんな感じである。

「で、どうする？俺の勝ちって事でいいか？」

「分かったわよ。私の負けだわ。」

「よし、じゃあ礼儀を叩き込んでやる。」

忘れてた。自分が何をしたのか。常人ならずでに3回は死んでいる。言波からは怒りのオーラがほとばしっている。その上全エネルギーを使い果たしたので動けない。つまり何をされようと何もできないのだ。

「食らいやがれ〜！」

「ヒッッ〜！」

少女の喉から引きつったような声が出る。

「目上には敬意を払なさいチョップ！」
ズビシイ

「いったく。」

「思い知ったかバカバカカ」

結構ガキである。

今の姿とさっきの戦いに慣れた者の姿一体どっちが本当なのだろう。それから数分後すつかり日が暮れた道を並んで歩く2つの影がある。言波が少女を送っていつているのだ。何だかんだで結局の所お人好しなのである。

「そついえばあんた名前は？」

「ジョン・スミス」

「はあ〜？」

どうやら洒落が通じないようだ。

「今のは冗談だ。
言波。矢桐言波と言う。お前は？」

「私は御坂美琴」

「美琴か、いい名前だな。」

「なっ、別に名前誉められても嬉しくないわよ！」

顔を真っ赤にしてそう叫ぶ。「ハイハイ」

「そういえばあなたの能力って何なのよ。あんなの見たこともないわ。」

「俺にも良く分らん。物心ついたときからあつたからな。まあ簡単にいうと数式を媒介に現象に干渉する。かな？」

「何よそれ、よくわかんないけどなんかズルくない？」「そうでもないさ。勿論デメリットもある。第一に演算に時間がかかるということ。干渉範囲が広ければ広い程時間がある。第二に脳への負担だ。とにかく圧迫が半端ない。ぶっちゃけ今も頭痛が酷い。」

「ぶ〜ん。あつ私此処からだから。」

「大丈夫か1人で？」

「だっ、大丈夫よ！子供じゃ有るまいし。」

「そうか、気をつけて帰れよ。じゃあ」

そういつて夜の闇に消える。

「あゝ頭いてえ」

あまりの頭痛に次の日、学校を休んだのはまた別の話。

とある論理の実戦経験（後書き）

こっちの小説は遊び心で書いてたのに段々本命みたいになってきた。

とある論理の疾走日常（前書き）

特に書く事は在りませんが、余りにもつまらない恐れがあります。
ご注意下さい。

とある論理の疾走日常

「畜生！あーもうしつこい！」

夜の路上を全力疾走する2つの人影がある。

1人は上条当麻もう1人は矢桐言波上条の方はさっきから

「不幸だ不幸だ不幸だー！ー！」

と絶叫している。

「不幸不幸うるせー！こっちはお前と一緒にいたってだけで全力疾走する羽目になってんだぞ。俺の方がよっぽど不幸だ！」

全く隣を走っているのが女の子だったらこの身に変えてでも守ってやるといいたい所だが、いるのは男である。

「この野郎俺にも不幸ウイルスうつしやがって、どうせうつすんならフラグ乱立ウイルスをうつさんかい！！」

「ハア？何の事ですか？上条さんにそんな幸せスキルありませんの事よ。」

「一辺死ね。」

「ああ心に刺さる。」

などと馬鹿な会話を続けているが、ここで彼らが走っている理由を

教えよう。と言っても後ろを見ればいたって単純明快「待ちやがれ
！！この腰抜けども！！」

「ちよろちよろ逃げやがって！」

「やかましい。テメエらこそ、ちよろちよろちよろちよろ群れやが
つてゴキブリどもが！」

「んだと、こらー！！」

「ちょっと言波さん何を言っちゃってるんですか？ほら見なさい。
あの方達が余計テンション上がっちゃってるじゃないですか」

「……って僕の隣の当麻君が言ってました。」

「オイ！！！」

「とりあえず二手に分かれよう。このまま逃げ続けてもどっかで捕
まる。」

「今の友だちを売るような発言はスルーですか？」

「え？何の事？記憶に無いけど。」

「おいこら、ずいぶん便利な記憶喪失だな。」

「下らない事言っている場合じゃない。

俺のピンチ何だぞ。」

「あれ俺の存在は？」

「・・・あとお前の。」

「俺ついで!？」

「とにかく分かれるぞ。健闘を祈る。」

(ふっ、悪いな当麻君。こついう場合絶対君の方にあいつらは向かっていく。君の不幸さを逆手に取った見事な作戦だ。)

かなり姑息な作戦だが、

「ウオオオ!!何だテムエら来るんじゃねえ。畜生妙なチームワーク見せやがって。ってかさつきより増えてねえ?」

彼の幻想は5秒で打ち砕かれた。

さすがに哀れだと思ったのか神様は上条に微笑んだらしい。

これぞ天罰。

普段から神様に嫌われている少年が

「え、おおー!!上条さんったら超ラッキー」などと喜びを爆発させている時

もう1人の少年は

「畜生、神様のバカヤロー!」

と恨み事を吐いていた。

逃走する事数十分

煙草と酒で肺と肝臓をやられている不良達が1人また1人と脱落していく中で、

未だしつこく追いかけてくる数人がいた。

「いい加減諦めるよこの野郎！」

「此処まで来て諦めてたまるか。」

「お前らにネバーギブアップ精神なんて似合わない！」

「んだとこら〜!!」

言波は走る、ただひたすら走る。

何でこんな目にあつてんだらう？

残念ながらその問いに答える人がいるはずは無く、いるのは殺気全開の男ども。

言波の目から水が流れた。

泣いてなんかいないぞ、これは汗だ。自分に言い聞かせる言波。

「おお、見えました裏路地。ざまーみるここの路地は俺の庭みてーなものだ。このまま振り切ってやるぜ。フハハハ〜！」

そのままの速度で路地を曲がり、逃げ切れると確信したその矢先

目の前に飛び込んできたのは工事中の文字。危ないから遊んじゃだめだよ。と妙なカエルのキャラクターが注意を促している。この切

羽詰まった状態でこんなもの見たら更にむかつきが倍増するだろう。

「工事中だあ？ふざけんなこのギリギリの時に大体こんな路地裏のどこをチェンジさせる必要が有るんだよ！」

その絶叫を聞いているのは今し方飛び込んで来たヤバめのお兄さんがた。

逃げ切れる筈の庭が

逆に閉じ込める為の檻に変わった瞬間である。

「やっと追い詰めたぜ！」

「観念しやがれ！」

そういつて手のひらに炎を生み出す。

典型的な発火能力者パイロキネティストだろう。だがその炎の大きさが尋常ではないのだ。

「うお、熱っつ。なんだその炎のでかさ」

「ハッハー！俺はレベル4だ。消し炭に成りやがれ！」

「あんなんで不良なんかやってんの！？」

レベル4と言えば軍隊に置いて戦術的な価値があると言われる程のエリートだ。

そう突っ込むのも無理は無いだろう。「うるせえな。そんな者俺の勝手だろうが。」

そうどなって、炎球を思いつきり投げる。

それは言波の体を燃やし尽くそうとまっすぐ飛んでくるが、まさに命中すると思われたその瞬間全く同じスピードで反射された。まるでテープを巻き戻すかのようにきれいに。

そしてそのまま炎を放った男にぶち当たった。何が起こったのか理解出来ないのか、周りの仲間も啞然呆然の体だ。

誰一人ピクリとも動かない中で炎が命中した男が悶えている。

更に今度は突如その炎が消える。

大怪我とまではいかないが明らかに戦闘不能だ。

「早く病院に連れて行くのを勧める。」

その口調はさつきまでとはまるで異なり、不自然なまでに落ち着いた声は不良達の戦意を喪失させるには充分過ぎた。

ボロボロの男を背負い、急いで逃げ出す。

後には言波だけが残った。否残っていた。

と言つのも突然目の前に

「ジャッジメント風紀委員です。通報を受けて参りました。大人しくして下さいな。」

と、茶髪のツインテールの女の子が現れたからだ。ジャッジメント？面倒くさくならない内に退散するとしますか。

「何が起きたのか事情を………あー！

」

突然絶叫をあげる。「え？何？俺何かした？」

「あなた、システムスキャン身体測定の時。」

「ああ、あの時の案内人か。で、事情がどうのここの言っただけ、簡潔にいうと俺を追いかけてきた不良達は急に腹痛を起こして帰りました！はい終了。じゃあ俺はこれで。」

「そうでしたの。腹痛を起こして……って絶対嘘ですの。何ですのこの辺りの焦げ跡は？」

(げっ！さっきの反射させた時に飛び散った奴だ。どうしようか……
・そうだ。)

「ああそれね。何かそこで煙草をもみ消した不良が居たんだよ。きつと。」

「………あなたはバカですの？」

ドスツ 心に刺さる音

「やかましい！真面目な顔で言うな！余計傷つく。」

「兎にも角にも今現状一番怪しい人があなたなので、最重要参考人としてご同行願います。………嫌本当に怪しいですね。雰囲気とかその他諸々。」

「何お前、俺の事嫌いなのか？さすがに其処まで言われた事無いんだけど。」

「とにかくとつと拘束させて頂きます。」

「任意から拘束へレベルアップ！？俺何かもう犯人扱い？」

ならば、取るべき行動はただ一つ。

戦略的撤退という名の逃亡である。

その場からダッシュで逃げ出す言波。

「逃がすとお思いですか？」

空間移動で捕まえようとするが

「能力が使えない？嫌、座標計算が合わない。どういふ事ですか？」

（悪いな。座標情報を改竄させて貰った。）

にしても俺ここんところ走ってばっかだな。御坂に追いかけれられぬ良達にも追いかけれられ、拳げ句の果てには犯人扱い。

（畜生、絶対当麻から不幸ウイルスうつされた。）

彼が寮に向かっていく同時刻。とある場所に1人の人物がいた。赤い髪に目の下にはバーコードのような刺青、更にいくつものピアスに加え煙草。体からは香水の匂いがする。

その奇妙にして異常な人物は、何かを探すかのように周囲に目を走らせ、

「見つけたぞ。」

そしてニヤッと笑った。

とある論理の疾走日常（後書き）

次回は・・・どうなることやら

とある論理の共同戦線（前書き）

読みにくい上にほとんど原作と変わりません。
すみませんがご容赦下さい。

とある論理の共同戦線

「うあ〜〜だるい。」首をコキコキ鳴らしながら親父くさい事を言っているのは帰宅途中の言波だ。「あー疲れた。いややっぱ昨日の逃避行が効いたね。全くこちとら疲労感MAXなんだから少しぐらいいたわれつつのあのハゲ。ったく焼却処分した荒れ野原みたいな頭しやがって。」

どのハゲだろう？

大体言波が昨日何してたか知らないし、コンプレックスを思いつ切りけなされているそのハゲさんはちょっとばかり可哀想だ。

「こんな日は家にとっと帰って寝るに限る。おっとあのハゲへの恨みを唱える事も忘れないようにあの頭を荒れ野から砂漠に変えてやる!」

だからどのハゲだ!?

「んっ何か今突っ込みが聞こえたような。」「気のせいです。」

「まあいいや。我が部屋まで後50メートル。あの角を曲がれば、着いたー!!」
「……………ん?」

そのハイなテンションが途中で止まる。

何故か?

「おいおいおいおい火事？」

そう廊下が燃えているのだ。否、燃えているなんて生易しい表現では表せない。

強いて言えば、地獄。そう、地獄だ。

消える事はないのではないか？そう錯覚させる程凄まじい燃え方だ。「いやいやふざけんなこの野郎。畜生八ゲを馬鹿にした罰か？」

嫌、もう八ゲはいいよ。しつこいなこの野郎！

「はっ、またなんか声が聞こえたような……っなんて言ってる場合じゃない。どうにかしないと。」

そう言い急いで、廊下に向かう傍ら演算を開始する。もちろん消火の為だ。彼の能力を持ってすればあれほどの炎でも、5秒もあれば消すことが出来る。廊下に到着した言波は

「何だよコレ……」

言葉を失った。

例えるならそれは炎熱地獄。視界いっぱい真紅の炎が広がり、熱だけで肌がチリチリと痛む。更に彼の目を奪ったのはそこにいる2人の人間だった。

1人は言波の隣人にしてクラスメイトにして友人上条当麻。

もう1人は、明らかに奇妙な人物だ。

周りの炎と同じ真っ赤な髪に、ピアス。全ての指にドクロの指輪。目の下にはバーコードのような刺青、更に口にはタバコ。

だが、その格好に反比例して顔つきは幼い。

その男は首をすくませ、

「やれやれ。邪魔ばかり入るな。」

大げさに嘆息する。「その君。今すぐこの場から消えるなら見逃してもいいけどどうする?」

「待て待て見逃すも何も状況が飲み込めない。何なんだお前。」

「ん? 僕? 魔術師だけど?」

「は? 何て? 魔術師? お前頭の方大丈夫?」

「ここ学園都市は科学の街だ。魔術^{オカルト}なんてナンセンスだし、魔術師と
言われてもバカじゃないと言っぐらいしか反応出来ない。」

「まあ信じる信じないは勝手だけどね。それよりそのいい加減退かないか?」

その男は当麻の方を向いて言葉をかける。

「おい当麻。お前が説明しろ。どうもあの異常者は話にならん。」

「……魔術師って言うのは本当だ。アイツはインデックス

を回収すると言った。この炎も全てアイツの仕業だ。」

一言一言を絞り出すように話す。

「は？インデックス、何？目次？アイツは本でも欲しいのか？」

当麻は無言で、指を男に指す。性格には男の後ろを。

言波はそこで初めてその存在に気付いた。

「人………だと？」

それはまだ幼い少女に見えた。

もとは白かったであろう服が血に染まっている。

「………」

数秒の沈黙の後

「オイオイ。何だよこりゃあ笑えねえぞクソ野郎！！」

言波はキレた。普段あまり怒らない彼が完全にブチ切れた。

「まあ怒鳴るのも勝手だけどさ。僕はソレを回収に来ただけだよ。性格にはソレが持っている10万3000冊の魔導書をね。」

「ああ？そんなもんどこにもねえじゃねえか？」

「あるさ。ソレの頭のなかにね。」

「はあ？」

「完全記憶能力というのを聞いたことはあるかい？ソレは全て記憶しているのさ。10万3000冊全てをね。その力を分かる奴はどれだけの物か分かる。そんな奴らに奪われたらマズいんだよ。」

いけしゃあしゃあと話す男に再び怒りがこみ上げる。

「つまり何か？お前はそこの子を回収するためにそんなケガをさせたのか？」

「やったのは僕じゃなくて神裂なんだけどね。彼女もケガをさせる気は無かったと思うよ。‘歩く教会’が起動していたはずだから。傷一つつかないはずだった。全く教皇クラスの結界が破壊されているなんて分かる訳がないだろう？」

その言葉にハツとした様子で自分の右手を見つめる当麻。

「そうか・・・俺のせいか。俺のせいでインデックスは傷ついたのか。」

その姿を真っ直ぐ見て言波は問う。

「上条当麻！俺の目を見る。何故今までこの事を俺に言わなかったのかと殴るのは後にしてやる。」

突然の大声に驚く当麻になおも続ける。

「悔しがるのも後だ。お前は どうしたい？このまま放っておくのか？自分では何も出来ないと言めるのか？守りきれなかったのならも

う一度守ればいい。お前は無力じゃない。最強の右手を持っている
だろう！もう一度聞くお前は どうしたい上条当麻！！」

その問いに途切れながらもはっきりと当麻は答える。

「俺は……俺はインデックスを助きたい。理由なんてどう
でもいい。ただ助けたいんだ……頼む。力を、力を貸して
くれ！！」

言波はニヤリと笑った。

「力を貸してくれたと。当たり前だ。よく言った。俺の力好きなら
け使え。」

彼は決意する。

かつて自分を救ってくれた少年の為に。

自分の過去を。行ってきた事を知っても尚、1人の‘人間’として
受け入れてくれた少年の為に。

自分の力を、命を潰す自分の力を全力で
使用する事を。

「おしゃべりは終わったかい？君たちが退かないと言うのなら殺し
てでも目的は達成する。」

「ふん、やれる物ならやって見る。」

「おっと。まだ名を言ってなかったね。」

何故か自己紹介を始めようとする。

あまりにも場にそぐわない行動に拍子抜けする2人。「ステイル」
マグヌスと名乗りたいところだけど、ここはFortiss931と
名乗っておこうか。」

「はあ？なんだそりゃ？」

「魔法名だよ。僕たち魔術師は魔術を使う時に真名を名乗ってはい
けないんだ。」

まあ古い習慣では歩けど。魔法名と言うのは、僕たちの間じゃ魔術
を使用する時に名乗ると言うだけじゃない。言うなれば……………
」

一呼吸置いて

「……殺し名……………かな？」

そして煙草を床に落とす。

「炎よ(Kenaz)……」

するとゴウツツと音を立てて火柱が立ち上る。

「あれが魔術か。明らかに大能力並みの炎だな。」

そしてその魔術師は炎を2人に叩きつけた。

3000度の炎を受けて無事でいられるなんて人間じゃない。

そんな存在を人間は古来よりこう読んだ。

「バツ、化け物・・・」

「ハッ、あなたがち間違いじゃねえな。だが俺のとなりにいるコイツは普通の人間だぜ。ただ正義感が人一倍強いつてだけのな。」

言波は宣言する。

「さあ始めようぜ。魔術師。化け物が相手してやる。」

そして2人は炎の魔術師に対峙する。

とある論理の全力突破（前書き）

炎の魔術師との戦い終了です。

とある論理の全力突破

「クソツ。有り得ない有り得る筈が無い。魔術師でもない奴が僕の炎を受けても無傷だなんてあり得てたまるか！！」焦りからかそう激昂する。

「実際あり得てるだろうが。残念ながらこれが現実だ。」

「まだ終わっていない！」

懐からカードのような者を取り出し言葉を紡ぐ。

「灰は灰に（Ash TO Ash）塵は塵に（Dust TO Dust）吸血殺しの紅十字（Squeamish bloody rood）イイツ！」

その手に炎の剣が二本生まれる。

そしてそのまま2人に向けて投げつけた。

酸素を勢い良く燃烧させて、軽い爆発が起きる。辺りには燃える匂いが立ち込め人間なら一瞬で骨も残さず、焼かれるはずだ。「熱っついな。一応熱は感じるんだから加減してもらいたいもんだ。」

しかしこの2人はただの人間ではなかった。

1人は右手を前に突き出し、1人は指を指揮者のタクトのように振

るう。

それだけで炎が消し飛んだ。

信じられない現象を続けざまに見た魔術師は、明らかに焦っていた。

（一体何なんだあいつらは！？僕の攻撃が全く効いていない。
あんな異常な能力見たことも聞いたこともない。……だが
僕も退く訳には行かないんだ。）

魔術師は行使する。

自信の最大の魔術を。彼もまた負ける訳にはいかなかった。

そして彼は呪を唱える。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ。

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸
なり。

その名は炎、その役は剣。顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ！
イノケンティウス！！」

言葉が終わると同時にその服の胸部が内側から弾け飛んだ。

中からはとんでもない質量の炎が溢れ、人の姿を形づくる。

何かドロドロした重油のような物を核としてそびえ立つその姿はさながら炎の巨人。

「魔女狩りの王、イノケンティウス。その意味は必ず殺す。」そして魔術師は命令を下す。それは炎の巨人の存在理由にして最大の意味。

即ち

「“殺せ”イノケンティウス。」

その言葉に従い、巨人はその腕を振るった。神が裁きの鉄槌を下すように。

だがその一撃は2人に届かない。

「ウオオオオオアア!!!」

当麻がその右手で防ぐ。まるで炎を殴るように。すると物が砕けるような音が響き、その腕が消し飛んだ。かに見えた。

「幻想殺し（イマジンプレイカー）が効かない!?!」

そう消えたはずの腕が元に戻ったのだ。

「無駄だよ。イノケンティウスには例えその手でも勝てない。無限に再生し続け、目標を確実に潰す。だから必ず殺すと言われているんだ。」

確かに消えたそばから元に戻っている。

幻想殺し（イマジンプレイカー）の処理速度より再生速度の方が上回っているのだ。

これではどうしようもない。

だが

「変われ当麻。」

妙に響く芯がある声が聞こえた。

「無茶言つな言波。例えお前に変わったって一緒だろ。むしろお前の負担が大きくなるだけだ。」

「いいから。俺が何の策も無く、こんな事を言うわけないだろう。」

「いいか周りを見る。そこら中に何か紙が貼られているだろう。恐らくそれがあれの大元だ。あれを叩けば勝算はある。違うか？魔術師。」

「

その問いに

「ふん。それはどうか。」

「いや、そうだ。少なくともあれがお前の魔術だ。でないと魔術を使う度にいちいちカードを取り出す必要は無い。」

「ッッ例えそうだとしても君達には何も出来ない。このマンション中に何千枚も貼ってあるんだぞ。」

「どつやら凶星だな。よし行け当麻。あの紙さえ無くなれば勝てる。その間は俺が時間を稼いでやる。」

「だけど……」

「さつさと行け時間がない。俺の事は心配するな。誰だと思ってる。」

自信に溢れた声で言う。

「分かった。有難う。気を着けるよ。」

そしてエレベーターの方へ走っていった。

「行かせると思うか!?!」

それを追ってイノケンティウスの腕が迫る。だが、途中で腕が消失する。

「チツ、君もか。」

「空気を読めよ。脇役は脇役どうして楽しくやるっぜ。」

(行ってこい。当麻 ヒーロー。インデックス ヒロイン を救うのは主人公であるお前だ。)

そう呟く。そして思考を切り替えた。

3年前までの自分に、神経を研ぎ澄まし戦闘に集中する。

「まあいい。後で仕留めよう。まずは君からだ。」

「エリリアアウ空間削除」

同時に眼前に迫る炎の塊が消える。

だがやはり元に戻る。

「本当に奇妙な能力だね。ところで僕は君をどこかで見たような気がするんだが………?」

「はん、俺にはないね。それとそんなに古い口説き文句が通用するのは10年位前だ。この時代遅れ野郎。」

その挑発に、魔術師は眉を少し不快そうに動かし、

「まあどうでも良いことだけどね。ちょっと気になっただけさ。特別意味は無い。どうせここで死ぬのだから。」

炎の巨人が迫り来る。

「来るか……… さあ矢桐言波根性見せるよ。」

自分にいい聞かせて身構える。

さらに能力を使おうとしたその時。

ザアアアアっとスプリンクラーから水が流れ出す。

「君の友人は馬鹿か？ 摂氏3000度あるイノケンティウスにこの程度の水が効くとも?」

（いや、アイツは馬鹿じゃない。だが何を考えて………待て

よ、そうかそういうことか！！)

言波が一つの結論を導き出すと同時に後ろのエレベーターのドアが開く。

「当麻やったのか？」

「ああ。」

「何を考えたと思ったたらお粗末な策だね。もう悪あがきはそこまでだ。死ねえ！」
再びイノケンティウスが動きだす。ターゲットを当麻に定めて。それを右手で殴る。

「無駄だといったハズだが………何ッ！」
イノケンティウスが再生しない。

「何故だ。あの程度の水でイノケンティウスがやられる訳がない。」
自問自答する魔術師に

「お前バカだろ。あの紙コピー用紙なんかじゃねえのか？」

言波は答えを与える。魔術師はハッと気づいたように顔を上げるが、

「だが、コピー用紙は水には溶けない。何故だ、何故……」

「紙は溶けなくともインクは水で滲むだろうが。手を抜いた事するからだ。まったく量産型はザクだけで充分だったの。」

イノケンティウスはついに消された。

「やれ当麻。」

「そのつもりだ。」

「そんな・・・イノケンティウス、イノ・・・」

拳を握って走ってくる当麻を見る目は恐怖に満ちている。

「はっ、灰は灰にー」

最後まで唱えさせず当麻は叫ぶ。

「歯ア食いしぱりやがれクソ野郎オオ」

ドゴオ！

鈍い音とともに顔面に拳を受けて吹っ飛び、床に頭を打ちつけてついに魔術師は動きを止めた。

とある論理の激突必至（前書き）

今年初投稿！

もう10日以上過ぎてますが。

今回の話はちょっと読みにくいです。

携帯で書いていると行間がよく分からなくて。

何か良い方法ありませんかね？。

とある論理の激突必至

鈍い音と共に魔術師は倒れた。息はしているから
気を失っているだけだろう。

遠くからサイレンの音が聞こえる。

恐らく、立ち上る火を見て、誰かが通報したのだろう。

「当麻！^{アンチスキル}！警備員が来る。」

その子が見つかるはず。取りあえずここから出よう。」

「あ、ああ……。でもインデックスを早く治療しないと、血を流
し過ぎてる。」

「分かってる。何とかする。」

それから2人はインデックスを連れて、ひとまず中庭に降りた。

「クソつ。血がとまらねえ。なあ！インデックス！！お前の魔道書
の中に傷を治すような魔術はねーのか？」

インデックスはうつすらと目を開けて、か細く答えた。

「あるには……。ある……。けど。私が……。術式を教えて、ちゃんとし
た…手順を踏めば、多分一般人にだって出来ると……。思う。」

「有るんじゃないか！！だったら俺がやる。」

そう当麻は言うが間髪入れず、インデックスが口にした言葉が彼を
絶望させる。

「けど……君には無理……というかこの街の……人間には魔術は使えない。魔術はもともと才能がない人間が……それでも才能がある人間と同じ力が欲しくて生み出された技術……だから才能がある人間つまり君達能力者には使えない……脳の構造が根本的に違うから……」

「畜生、だったら言波！お前の力でー」

「無理だー」冷たく聞こえるが彼の拳は微妙に震えている。押し溢れる感情の波を無理やり殺しているように。

「忘れたのか当麻。俺の力は自分以外の生物には干渉出来ない。すまないが……」

「クソ。どうすりゃいいんだ！……いや待てよ。インデックス！！要は能力者じゃなければいいんだよな。」

「そうだけど……？」

「おい！当麻。一体何を！」

「忘れてないか言波？俺たちに必ず力を貸してくれる存在を。」

「？……そうか！」

「子萌先生！」

彼らの頭には1人の人物が浮かび上がった。それは彼らの担任教師。常に生徒の事を考えてくれる教師の鑑とも言うべき人だ。

「よし、急ぐぞ当麻。今なら帰っているだろう。」

「ああ！」

だが、言波は走り出そうとした当麻を止めた。

「待て！！」

「何だよ。時間ねえんだぞ！」

ニヤリと笑って言波は伝える。

「30秒待て。こっちの方が早い。」そして彼は演算を開始する。
膨大な式が脳内を流れ、それを素早く構築する。

「干渉対象、空間座標。逆算開始、2・8・12・21。終了。空間連結開始、成功。」

無機質な声が流れるように計算過程を示し、彼の時空をもねじ曲げる演算能力の効果を証明していく。

「最終処理、次元切断」

同時に腕を横へ振ると、砕けるような、破けるような音と共に空間が裂け向こう側にうつすら建物が見える。

「行こう当麻。言っておくがくれぐれも体が触れないようにしろよ。
一発で粉々になるからな。」

「おう！しかしお前何でもありだな。」

「それなりのリスクは有る。」

そついう彼の口から一筋血が流れた。

能力を多用した事による肉体の損傷だ。

「お前それ……ごめん。俺のせいで巻き込んでしまった。」

「気にするな。だが後でぶん殴るからな。」

「ははっ。覚悟しておくよ。」

言いながら、2人は古ぼけたアパートにたどり着いた。

「閉鎖。」

言波が言うと、空間に開いた穴が溶けるように元に戻って行った。

階段を駆け上がり、ドアを何度もノックすると

「はいはい。今開けますよー。」

声と共にドアがガチャリと開く。

「こんばんは。小萌先生」

「あれ、上条ちゃん！？矢桐ちゃんも一体どうしたんですか？」

「すみません小萌先生。いろいろ困っているんで取りあえず入りま
すね。」

「ちよちよちよつと矢桐ちゃん！？先生困ります。いきなり部屋に上がられるというのは、ぎゃあああ！？」

当麻が背負っている血まみれのインデックスを見て、悲鳴を上げ、止まる小萌先生。

「非常事態なんです。入れて下さい。」

「わわわ分かりました。どうぞ。」

入ってからインデックスを下ろすと、

「きゅ、救急車は呼ばなくていいんですか？」

その言葉を遮るように機械的な声が響いた。

『警告、第二章第六節。出血による生命力の流出が一定量を越えたため、強制的に自動書記で目覚めます。ヨハネのペン』

「インデックス……か？」

あまりの豹変ぶりに思わず当麻は呟いた。

機械的なインデックスの声は尚も続く。

『――現状を維持すれば私の体は凡そ15分後に必要最低限の生命力を失い、絶命します。指示に従って適切な処置を施していただければ幸いです。』

「小萌先生お願いします。俺も手伝います。」

だがインデックスは当麻に対して

『あなたの右手はあらゆる魔術を打ち消す効果があります。魔術の障害となる可能性を鑑みれば、今あなたに出来る最善の方法はこの場から立ち去ることです。』

さらに言波にも言う。

『あなたも同じく。現状あなたの能力はどう分類すればいいのかわからない完全なイレギュラーです。有害か有益か判断出来ない以上これから行う魔術の障害に成りうると考え、この場を立ち去っていただきます。』あまりにも淡々とした言葉には一切の感情がこもっておらず

ただ要点のみを伝える。そこに自分たちの情が差し込む余地がないと考えた言波は当麻と共に出て行く。

「当麻出るぞ。インデックスの言う事は正しい。厳しい事を言うよ
うだが、お前の能力は本当に障害になる。」

「……わかった。先生！！先生にしか頼めねえんだ！！この子をインデックスをお願いします！！！」

土下座までした当麻を見て

「……わかったです。事情は分かりませんが、出来る限りの事はやってみるですよ」

「……ありがとうございます。」

そして2人は連れ立ってアパートを出ていった。

様子が分かるように、何かあったらすぐに駆けつけられるように近くのベンチに腰掛ける。

「当麻。話して貰うぞ。魔術って何だ？お前は何に巻き込まれている？」
「ああ…そうだな。何かから話せば言いのやら。」

それから彼が話した内容は正直荒唐無稽もい所だった。

なにしろ出会いからして当麻の部屋のベランダに引っかかっていたと言っただから。

あの炎の魔術師との戦いが無かったらウソつけこの馬鹿と一笑に付していただろう。

最後まで話し終え、何かつかえた物が取れたようなスッキリした表情の当麻を横目に。

「なんか、すげえ大冒険だな。ファンタジー映画みたいだ。」

その言葉に彼は苦笑いを浮かべ、次に溜め息を一つ吐くと

「悪いな。なんか大変な事に巻き込みまってる。」

「それさっきもいったぞ。気にすんなって。」

そして小さく今度は俺が力を貸す番だと付け加える。

その時、子萌先生の
部屋の窓から眩い光
が溢れ出した。一瞬爆発的に輝くとそれはすぐに収束する。

「おい、何だよ今の？」

「行ってみよう。」

古ぼけた階段をダッシュで駆け上り、ドアを開ける。

最初に目に飛び込んできたのは、床に倒れて気を失っているインデックスだった。

「インデックス！……まさか……。」

慌てて抱き起こす当麻。

「落ち着け当麻。良く見る。血が止まっている。どうやら成功したみたいだな。」

「本当だ。ハッ、ハハッ。良かった。」

ひとまず布団を敷いて彼女を寝かせると

「さて、俺は帰るけど、当麻お前どうすんの？」

「俺はここに残るよ。」

「そうか。じゃあ俺も残ろうかな。っとその前に当麻。」

「お前ロリコンなのか？」

「ブホオツ！と、突然何をおっしやいますか言波さん？」

時間はお昼どき。世の学生や社会人がバリバリ行動している時間帯だ。

結局子萌先生の部屋で一晩過ごし、目を覚ますと当麻がインデックスの顔を覗き込んでいたのでこんな質問をしたのだが

「いや、答えて貰いたい。お前はロリコンか？ロリコンなのか？そんな少女の寝顔を見てハアハアする人なのか？」

「ちがうわ！真顔でいうな！取りあえず落ち着け。一体何を根拠にそんなことを？」

「いや、だってお前今その子の顔覗き込んでニヤニヤしてたから。」

「してねえよ！あれか。俺には何か優しい気持ちになるのも許されないのか！？」

「まあまあ。冗談だよ、冗談。3割方な。」

「残りの7割は！？」

「あ、ほら起きたぞ。何か言葉を掛けてやれよ。当麻^{ロリコン}」

「おい、今当麻って書いて何て読んだ？」

「だから気にするなって。」

「気にするわ！」

会話の途中で、横から声が挟まれる。

「とうま。お腹減った。」開口一番無限の食欲を示したシスターさんに思わず言波は笑いが漏れた。

「あれ、君は昨日の…えーと？」

「矢桐言波だ。^{ロリコン}当麻の友人の。でもそろそろ彼の性癖にドン引きしてしまい、友人という称号を返上しようかなと思案中だ。」

「……なあいつまで続くんだ。この嫌がらせ。」

何か後ろで咳きが漏れたような気がしたが、気のせいと言っことにしよう。

「私はインデックスって言うんだよ。よろしくねことは。それはそうとうま。お腹減ったんだよ。」

「ハア―。今子萌先生が何か買いに行ってくれてるから待ってる。」

「なあロリ…当麻。子萌先生は何か言ってきたか？」

「お前今何か言いかけなかった？ハア、ま、いいや。子萌先生ならお買い物から帰ってくるまでに、言うことを整理しておいて下さい。それと先生お買い物に夢中になって忘れるかもしれない。帰ってきたらズルせずにちゃんと話して下さいね。だとき。」

自然と顔が綻ぶ。

「なあ当麻。俺たち良い先生に巡り会えたな。」

「…ああ、全くだ。」

感謝の気持ちで胸が一杯になった。先生だけは絶対に巻き込みたくない。

「なんとかするぞ、当麻。」

「ああ。」

そんな決意を固めた2人をまた別の2人組が遠く離れたビルの上から見ていた。

1人はあの炎の魔術師。もう1人は若い女性だ。片方だけ大胆にぶつたぎったジーンズを履き、シャツは胸のしたで結んでへそが見えている。更に極めつけは2メートルはあるつかという長大な日本刀を手にし、一種異様な雰囲気醸し出している。

その女性に炎の魔術師ステイル・マグヌスが話し掛けた。

「生きてるよ。どうやら魔術を使ったらしい。」

「インデックスに同伴していた少年2人の身元を探りました。」

「……で?」

「1人は上条当麻。少なくとも魔術師ではありませんし、強力な能

力者でもありません。」その報告にステイルは唇を曲げて、皮肉っぽく答えた。

「ハッ、止してくれ。何の力も持たない只の一般人が僕の魔術を退けたとでも？」

「更に妙なのはもう1人の少年です。彼に至っては矢桐言波と言う名前と能力レベルunknownと言うことしか分かりませんでした。」

「unknown?そんなのにも分かってないのと一緒にだろう。情報が意図的に封鎖されているのか。しょうがない。この際どんな手を使っても目的は完遂する。」

冷酷なその言葉は目的の為なら何人だろうと殺すという意思表示と同義だ。

「ところでステイル。先の戦闘で、あなたのルーンの致命的な欠陥が指摘されたと聞きましたが？」

「その点は補強済みだ。」

懐から無数のルーン文字が書かれたカードを取り出す。そのカードは全て防水加工ラミネートされていた。

「今度はぬかりはない。周囲2キロに渡って結界を刻む。」

そう言いつつもインデックスと当麻達のやり取りを眺め、

「楽しそうだよな。僕たちは一体何時まであれを引き裂き続けられ
良いのかな。」

ポツリと呟く。

「複雑な気持ちですか？かつてあそこにいたアナタとしては。」

ステイルの目に始めて感情のような物が顔をだす。それは無念さと
悲しみによく似ていた。

それを振り切るように後ろを向き、歩きながら

「何、いつもの事さ。」

割り切ったように話す、その背中には陰があるように見えた。魔
術師達が不穏な動きを見せるなか、取りあえず表向きは平和に3日
が過ぎた。

3日目の夕方頃当麻はようやく完全に回復したインデックスを連れ
て銭湯に向かっていた。

「何か楽しそうだなインデックス？」「もちろんだよ。ジャパニー
ズセントーてあれなんでしょ？」

フジヤマでイレズミのコンヨクで赤ワイン何だよね！？」

「おい。何か色々混じってんぞ。後最後の赤ワインなんて古き良き
銭湯にある訳ないだろ。どこのセレブだ！」

インデックスの間違った日本人的見解にツッコミを入れながらも、彼
は終始笑っている。

記憶を無くしたインデックスがそれでも尚心の底から楽しそうにし

ているからだろう。

「言波も来れば良かったのに。」彼の友人は同伴していない。何でも夏休みの課題をとっと終わらせたいからと子萌先生の所に残っているのだ。

「全くあいつは妙な所で真面目だよな。」

そう1人ごちていたその時、ふと違和感を感じた。

辺りから人気が無くなっているのだ。

時刻は夕方と言ってもまだまだ人が居なくなるには早すぎる。

「おい！インデックス。」

更に今まで横を歩いてインデックスがいない。

「畜生、一体何が…？」

今のこの現状を必死で理解しようとしていると

「ステイルが人払いの刻印ルインを刻んでいるだけですよ。」

突如として第三者の声が響く。

「神浄かみじょうの討魔としまですか。良い真名です。」

1人の女性がそこにいた。

とある論理の絶望否定（前書き）

眠くて眠くて何時もより駄文。

それでも良ければ読んで下さい。

とある論理の絶望否定

「初めまして。神裂火織と申します。」

上条当麻の前に現れた女性はそう名乗った。

「出来れば魔法名を名乗る前に禁書目録インデックスを保護したいのですが」

「イヤだと言ったら？」

「仕方ありません」

腰に下げていた刀に手を掛けたと思った次の瞬間、当麻の周りを何が走り抜けた。

辺りにあったものが問答無用で斬りさかれ、鉄で出来ている筈の風車までもが地面にくずおれる。

その威力もさるものながら、スピードも尋常ではない。

刀を抜いた瞬間さえも分からなかった。

「もう一度問います。彼女を保護したいのですが」

その圧倒的な力を見てもなお、当麻は食い下がる。

「また保護か、勝手なことばかり言いやがって。」

神裂の手が動き、当麻の周りをまた見えざる斬撃が荒れ狂う。

当麻が圧倒的な敵と死闘を繰り広げる中、正にその場所に向かって全力疾走している人影があった。

「クソっ、何か胸騒ぎがする。俺も付いていったほうが良かったな。」

人影、矢桐言波は感じている。

何かが危ないと。

理屈ではない。

具体的にどうと言われても答えられない。

ただ彼の本能が伝えている。危険だと。

彼の直感が伝えている。敵が迫っていると。

「いくぜ。干渉対象は俺の脳。司令文は“騙そうとするものから騙されるな” 神経接続、視界情報、心理状況維持共にクリアー。」

司令文実行。」

次の瞬間世界がやたらクリアに見えた。

まるで今まで世界を覆い隠していたベールを取り払ったように。

そしてその世界で彼が最初に目にしたのは竜巻でも通り過ぎたのかと錯覚させるほどの破壊の爪痕、そしてその中心に倒れ込んでいる当麻の姿と彼を殴りつづける女性の姿。

言波はカツと血が昇るのをハッキリと感じた。

「そこまでしておくんだな。でないと俺はアンタを殺してしまう。」

彼が警告で済ましたのはかろうじて感情より理性が上回ったから。

突然現れた言波を前にその女性、神裂は驚愕に目を見開き一言呟いた。

「イ、インクイジター審問官………?」

「ハア?何言ってるんだ?」

「いえ、違いますね。だが似ている。待てよ、言波? そつですか、あなたが“彼”の」

1人で呟き、納得している神裂を前に言波のイラつきは頂点に達した。

「おい、こらアンタ何1人でぶつぶつ言ってるんだ?」

その問いには答えず、彼女は刀に手をやり先ほどの斬撃を再び放つ。

「七閃!!!」

刹那、言波の体から鮮血が飛び散った。

その身が前に倒れる。

それを見つめる神裂の周りで何かが光った。その正体は

「…ワイヤー……」

「なんてこった。アンタ魔術なんて使ってなかったのか？」

「もういいでしょう。あなたは私には勝てない。私達はあの子を保護したいだけです。もう諦めてくれませんか？私も出来るなら誰も傷つけたくない。だから人払いの魔術まで掛けたのに、なぜ来れたのですか？」

「何故これか？簡単さ、あんたらは魔術師だろう？ここは科学の街だ。ならば魔術師であるあんた達は目立つ行為は避ける筈だ。物理的なセキュリティなら即、警備員^{アシテスキル}辺りに見つかるだろう。なら、物理的ではなく、心理的に作用するセキュリティのほうが、安全だ。なら、俺の能力で十分対応出来る。」言波は地面に手を突いた。

「それよりあんた今なんて言った？誰も傷つけたくない？ふざけんじゃないやねえよ！」

ゆっくりと体を起こす。血にまみれ、ボロボロの体で立ち上がる。

もう限界に近い。

能力使用によるダメージと先ほどのワイヤーによるダメージ。正直今にも意識が無くなってもおかしくない。

だが、彼は立ち上がる。その目にしっかりとした意志を持って

「誰も傷つけたくないのならなんでインデックスを斬った？」

傷つけたくないならなんで当麻はそこに倒れているんだ！！」その

叫びに神裂は身を強ばらせ

「私だって……私だって好きでこんな事をやっている訳じゃない！」

「あの子を斬ったのは、“歩く教会”が作動している筈だから、怪我などしなれと思ったから……」

その少年に手を出したのだってどうしてもあの子を保護しないと
いけなかったら……。」

その言葉に言波は何か引掛かるのを感じた。

本当にインデックスの敵であるなら、そこまで彼女の事を考えない
筈だ。

あれほどの力があるのだから早々に捕まえるなりすればいい。

それをしない理由。

それは

「おいおい、あんたもしかして……」

「そうです。インデックスは私の同僚にして親友なんですよ……。」

「じゃあ、なんでインデックスはあんた達から逃げてたんだ。友達
なんだろう？」

「あの子は記憶を失っているんですよ。その状態で自分を捕まえようとしている者がいたら、誰でも逃げようとするでしょう?」

「まだあるな。あんた達がインデックスを追いかける理由が、なあ。あんたなんでそんなに必死なんだ?」

彼女の顔色が一瞬だけ変わった。「そうですね。一応置いて置きましょうか?完全記憶能力と言うものはしっていますね?文字通り見た者を完全に覚える能力です。そして決して忘れません、忘れる事が出来ません。」

一語一語を何かに耐えるように語っていく。

「道を歩く人の顔、

朝露で濡れている葉の数。そんなどうでもいいものまでも忘れられないですよ!人間の脳のスペックは意外に小さい。彼女は10万3000冊の魔道書の記憶に85%、残りの15%を日常生活に当てています。このままでは脳が保たない。

だから彼女の記憶を消さなければなりません。また15%の余裕を作る為に。」

神裂の言葉は本当だ

、彼女は嘘など付いていない。

恐らく記憶を消さねばインデックスは生きていく事ができないのだろう。

だが

「納得いかねえ!

なんでそんな道しか取れないんだ！記憶を削る以外の方法を何で考えようとしなんだ。そんなのあんた達はずっとインデックスから敵だと思われ続けるんだぞ！！そんなの嫌だろ。親友なんだろう？」

「それでいいんです。思い出を作っても作っても彼女は忘れてしまふ。私達のこと、敵と思ってしまう。それなら一緒最初から……」

「バカやろうが！！諦めてんじゃねえよ。」

100回失敗したら101回挑戦する。1000回転んだら1001回起き上がる。何でこんなことが出来ねえんだ！！あんたは何の為に力を手に入れた？そんなすげえ力を持っているのに、何で抗おうとしねえんだ！？」

文字通り血を吐くような絶叫だ。

「最後にバッドエンド（ぜつぼう）しか残らねえってんなら、俺がハッピーエンド（こうふく）に変えてやる！そんなつまらねえ絶望なんか俺がきれいサツパリ否定してやる！」

これが彼の本質だ。みんなが幸せにならなければ意味がない。みんなが笑えなければ意味がない。彼はその為に動く事が出来る。

「それがあなたの強さ……ですか？なる程やはり“彼”によく似ている。でももう遅いんです。タイムリミットは3日後の午前0時、それまで自分が為すべき事をして下さい。どうぞ素敵な悪あがきを。」

追い打ちをかけるように言波の頭に刀の鞘を振り上げる。

立つのもやつとの状態である彼はあっけなく地面に突っ伏した。

もう体が動かない。

精神は生きていても肉体が限界に達しているのだ。

「もう、もういいんです。どうか私達にはもう関わらないでください。それがあなた達にとって最も善い方法です。」

そして彼女は

「さようなら。」

と唇を動かして闇に溶けるように去った。

それを見ながら、大口を叩いても一切何も出来なかった自分に齒噛みしながら言波の意識もゆっくりと沈んだ。

とある論理の絶望否定（後書き）

そろそろオリジナルいれようかな？

とある論理の最哀幻想（前書き）

一応インデックス編終了です。

若干消化不良の感も否めませんがー

次からは言波の過去の話です。

今までの話にもそれを匂わせるような表現がありました。

過去編はどうしても書きたかったもので……

とある論理の最哀幻想

目を覚ます。

知っている天井だ。

言波は始めにそう思った。

意識が覚醒してくるに連れて体中が痛んだ。

「うっ。」

思わず顔をしかめる。

ふと横を見ると、インデックスがこちらを覗き込んでいた。

「インデックス……？ そうだ！ 当麻は！！」

「オレならここだ。」

「お前無事だったか。良かった。」「ハハッ、おかげさまでな。」
沈黙が流れる。

「……なあお前聞いたか？ インデックスの脳のこと。」

「ああ、後3日……か！？ おい、当麻今日は何日だ！」
すっかり失念していた。

急いで新聞を取り出し、日付を確認する。

「あれから三日経ってる……。くそっ、当麻！インデックスも急いでここから離れるぞ！」
ひとまずどこかへ避難しなければならない。

このままここには、インデックスは必ず捕まってしまう。

「くそッ！貴重な時間を無駄にしてしまった。間に合うか…？」その時外から足音が聞こえた。

……来た！

「ちッ、間に合わなかったか……」

その言葉と同時にドアがバンッ！とやや乱暴に開けられた。

入ってきたのは炎の魔術師ステイルと、長大な日本刀を携えた神裂。

それが表すのは即ち

タイムリミット
制限時間！！！！

「ふうん……いやらその体では逃げる事は出来なかったみたいだね。」ステイルが包帯が捲かれたボロボロの状態を見て、鼻で笑うように言った。

そんな彼らの前に白い人影が守るように立ちはだかる。

言わずもがなインデックスだ。

「お願い…私はどうなってもいい。どこにでもついて行く。だから……だから2人には手をださないで!!」
その悲痛な願いに彼らは一瞬感情を押し殺すような表情を見せた。インデックスに完全に自分たちは敵だと認識されていることを思い知らされたからだ。

「お願い…っ」

そしてその体はくずおれる。

とっさに抱き止めたステイルは状態を確認し、言波達に告げた。

「今夜だー！今夜午前零時。その時刻に全てを終わらせるように術式を組み上げる。」

「…まっ…待てよ！聞いてくれ!!それがあんなら魔術師の出した答えかもしれねエけど……科学ならまだ分からねエー!!」

ピクリとステイルの眉が不愉快そうに動く。

それに気付かずに当麻はさらに言葉を続けていく。

「ここは学園都市だ心を操る能力者も、その研究所もそこら中に転がってる!そういう所を頼っていけばどうにかなるかもしれねエんだよ!」

必死に説明していく。それに対してステイルの反応は

「ーで?」

実に冷たい物だ。それもそのはず今の彼にとっては当麻の言う事など、偽善者の戯言に過ぎない。

「君はその心を操る能力者とやらや、研究所の連中にこの子の体を好き勝手にいじらせようと言うのかい？ー見る！」

彼の目線の先には布団に寝かされているインデックスの姿がある。

「今のこの子を見ても同じ台詞が言えるか？『全て上手くいくかも知れないからちよつと待つてろ』
なんて言えるのか？」

何も言えず、唇を噛み締めるだけの当麻にスタイルは懐から十字架を取り出し

「…これはインデックスの記憶を削るのに必要な道具だ。君の右手が触れば、効力を無くすだろう。そんなに自分の力を信じているなら消してみる！全て自分たちでやって万事上手くいく自信があるのならやってみるー！この英雄気取りヒーローの異常者ミュータントが！」
当麻は歯を食いしばり、右手を十字架に伸ばした。だが、途中でその手を止める。

「…畜生ー！」

彼は諦める事は出来なかった。だが、ここで何が出来たと言うのだろうか？彼が今ここで、この十字架に触れれば効力を無くす。しかし、本当にそれでいいのか？

もし、万が一が起きればインデックスの命を助ける方法は完全に失われてしまう。

ありとあらゆる葛藤が少年の胸中で渦巻き結果としてその手で触れるのを思い止まらせる事となった。
力無く下がるその右手。

だが――

その手を力強く引く者がいた。

「いくぞ。まだエピソードには速すぎる。」

その声は心に響き、何故か当麻の不安を押し流す。

ああ――まだ終われない。そう思える。

「そうだな。まだだ、まだチャンスはある。」

再びその身に気力を漲らせ、立ち上がる2人に啖きが聞こえた。

「何故ですか――？」

2人はその啖きを発した人間、神裂を見つめる。圧倒的な力を振るった彼女だが不思議と今はとても弱く見えた。

「どうして、まだ立ち上がれるんです？もう記憶を削る以外の方法なんて殆ど0なのに――何故？」

もはやそれは2人に当てた問いではなく、自分自身に言っているように聞こえる。

「でも0じゃない。可能性が1%でもある以上諦めた時点で人は負ける。前にも言っただろ？100回失敗したら101回挑戦する。1000回転んだら1001回起きあがる！！簡単じゃねえか！！思い出を失うなんてそんな悲しいことはあっちゃいけない。そんな絶望はー」

彼は笑みを浮かべて言うのだろう。

全ての者が幸せ（ハッピーエンド）を迎える為に

「ー俺がきれいさっぱり否定する！！」

そして2人は夜の街に走り出す。

最高の結末を手にするために

それを見送る神裂の胸に一つの感情が顔を出した。それはとっくに棄てたはずだった。

もう返ってくる事はないとも思っていた。

微々たる物には違いない。だがしかし、僅かながらも確実に。

希望が芽生えた。

すっかり夜の帳が降りた学園都市を疾走する2つの影。

怪我だらけなのは間違いない。本来なら入院しなければ行けない程だ。

しかし、その影は決して速度を緩めず突き進む。

「ひとまず、俺は片っ端から研究所を当たって見る。お前は小萌先生に連絡をしてくれ。先生なら何か知っているだろうからな！」

「ああ、分かった。頼んだぜ言波！」

2人は分かれる。

それから数分ほど経った。

言波は第一の研究所を目指して走っている。

不意にその足が止まった。急がなければならないのは分かっている。時間が無いのも承知だ。

彼が足を止めた理由。それはある疑問を持ったからだ。何故今まで考えなかったのか？

その疑問は脳内で明確な形となって現れた。

「待てよ。人間の脳ってそんな簡単にパンクするのか？考えろよ俺。脳の容量を超えて死ぬことなんてあるのか？完全記憶能力なんて確かに珍しいけど、0人じゃない。その考えでいくと完全記憶能力者はどいつもこいつもとつくに死んでるぞ！！」

彼は自分の愚かさを呪う。最優の頭脳なんて言われたってこんな単純な事を今の今まで考えつかないとはなんと言うバカだろう。更に思考を続ける。

それならばあの魔術師達は嘘を吐いていたのか？いや、ないな。あ

の必死さは本物だ。それに何より
そんな嘘を吐いてもメリットは無い。

状況を分析して、整理して答えを割り出す。

極自然に最も可能性のある解答が浮かび上がる。

それはあの魔術師達が嘘を吐かれていた。

「そうか、そうだよな。インデックスの力は世界をねじ曲げる。それを管理する奴らが、ご丁寧に本当の事を言う訳は無い。」

全ての事象に辻褃が合う。そんな結果を導き出した彼のとる道は一つ。

絶対助けけてやる。何もかも一つ残らず、ハッピーエンドだ。

彼は戻る為に能力を

行使した。リスクなど考えている場合ではない。

「対象は空間。座標情報逆算0、2、5、10空間連結成功。次元切断。」

それをしている間にも頭から血が流れ出すも、気にせず向かう。空間の向こう側へ

言葉では表現できそうもない黒よりも黒く、白よりも白い矛盾だらけの景色をくぐり抜けて彼はたどり着いた。

そして見た。

彼の友人が倒れ行く所を、言波は叫んだかもしれない。泣いたかもしれない。

周りに散らばった羽がまるで死者を葬るように当麻包み込んでいる。その日、その時、その場所で

たった1人の少女を救うため、奔走した英雄『上条当麻』は死んだ――

翌日。空は皮肉なほどきれいな快晴となった。

言波は病院にいた。

あの後意識を失い、目を覚ましたら病院の清潔感漂う白いベッドの上に寝ていた。

傍らには何故か手紙。封を切って読むと、流麗な文字で感謝の言葉が書かれていた。恐らくは神裂が書いたものだろう。

読み終わった後に手紙が爆発したところで、映画にもなった某有名スパイドラマを思い出したのは割愛しよう。

それからぼんやりと窓の外を眺めていた言波の耳に聞き慣れた叫び声が響いた。

病院内はお静かにのルールを真っ向から破って聞こえたその声に耳を疑う。

聞き間違いではない。

「不幸だああー！ー！ー！」

などという変態じみた叫びをあげるのは1人しかいない。

急いでベッドから跳ね起きて隣の部屋に向かう。

同時にバァンツ！と

その部屋のドアが力任せに開けられ、中から白い閃光インデックスが飛び出してきた。

かなりご立腹の様子で頬を膨らませながら

「あつ、ことはもいたの？とうまったらヒドいんだよ！全くもうバカにして〜！」

ムキーンと膨れっ面のまま暴れるインデックス。

「よしよし、よく分かった。ジュース買ったげるから落ち着こうかインデックス。」

コインを何枚か与えてインデックスを送り出してから言波は病室に入る。

「うわー！。こりゃまた暴れたな。」

病室の中は羽毛だらけでその中心点にくっきりとした歯型を体中に残し、精根尽き果てた様子で横たわっている当麻がいた。

彼は素直に嬉しいと思った。

こちらを見て、笑いかける彼の無事な姿を見て。

だが、違和感を感じる。何が違和感なのか？そして言波は気付いた。彼の目が自分の顔を見ていない事に。態度もどこかよそよそしい。何を話しても合わせるだけで自分から話そうとしない。

これらの状況を総合した彼の頭にある最悪な考えがよぎった。目の前の相手は記憶を失っているんじゃないかと。

信じたくない、だがその可能性は大きい。

いつの間にか口の中がカラカラになっている。

確かめなくては、

口を開いた。出てきた言葉は

「まあ、何はともあれ元気そうで良かった。どんな体してんだよ？あんな目にあつたのに。」

なんて事はない。普通の会話だ。

彼は思う。これでいいんだ。何も問い詰める必要なんかない。

いつか自分から話してくれる日を待てばいい。

コイツがどうなっても自分の友人である事に変わりはない。

そう、これからもずっとそれは絶対に変わらない。

だから今は待とうー

「じゃあ、戻るわ。早く退院出来ればいいんだけどな。」

「ああ、そうだな。お大事に。」

当麻は変わらない笑みで見送った。

「ふう。」

言波は中庭のベンチで一息ついて、物思いにふける。

思えばここ数日でいろいろな事が起きた。

こんな濃い時間を過ごした高校生は日本中探したって自分たちぐらいなものだろう。

そういえば、あの時神裂が言った事……

“彼”って誰だ？

妙に引っかかる。何か大事な事のような気がする。

「ん？」

ふと横に気配を感じた。

見てみると神裂が立っている。

彼女はぺこりと頭を下げてから近付いてきた。

「隣、よろしいですか？」

「え、あ…ああ」

「あなたがたには感謝しています。この恩は必ずー」
また頭を下げる。

「いって、気にしなくても。」

「ですが……」

「いって、全て上手くいったって訳でもないし……」

「は？」

少し沈んだ口調を神裂は怪訝そうにしている。

「いや、大したことじゃない。で？用件はそれだけ？」

それを聞くと、なにやら思い詰めた表情を浮かべて少し黙る。そして、おもむろに口を開いた。

「お話しておくことがあります。信じるか信じないかは御自分で決めてください。」

「はい？」

疑念に思いつつも一応了承の意を示す。

「これはあなたの過去を思い出させる事になりますが、聞いて下さいますか？」

言波はピクリと反応する。彼の過去…

それは血に濡れた毎日の事である。

「初めにいくつか聞いて起きたい事があります。最初に私とあなたが出会ったあの時私が言った言葉を覚えていますか？」

「“彼”によく似ている…か？」

「はい。どうやら覚えているようですね？では次に神白創かみしろはじめという名に心あたりは？」

その名を聞いた瞬間言波の表情が変わった。驚愕だろうかそれとも、怒りだろうか、恐らくどちらもだろう。

「あの人を知っているのか！？」

興奮した様子で神裂の肩を掴み、前後に揺らす。

「お、落ち着いて下さい！今から話しますから！」

そして彼女はある真実を話し始めた。

言波が置き去り（チャイルドエラー）としてあるプロジェクトに係っていた頃の事だ。

時は3年程遡る――

とある論理の狂乱回帰（前書き）

話が粗いです。

それでもOKの人はどうぞ読んで下さい。

とある論理の狂乱回帰

その少年の記憶にある最初の色は赤だった。
それは血の色。

少年はとある研究所で研究対象となっていた。

正式名称は『多目的能力特殊応用研究所』

そこでは毎日のように人が死んだ。
もはや死体を見ても人間ではなくただの“モノ”と認識してしまう程に。

そこでは死が普通だった。

毎日食事をするように当たり前に呼吸をするがごとく自然に。

ゾツとするがそれが日常のワンシーンに組み込まれていたのだ。

研究内容も各個人の演算パターンを強制的に組み替えて未知の能力を生み出すというものだったので、死人が出るのも当たり前だ。

なにしろ脳の構造を根本的に変えてしまうのだから。言うなれば異物を脳そのものに混入するようなものだ。

当然拒絶反応も著しい。

その少年は最初こそ地獄のような毎日に泣いていたものの徐々にその感情は衰退して行った。

何も考えず、何も感じず、何も疑わず。

そうすることで、自身の精神を守っていた。

何も願わず、何も樂しまず。

少年は若干12歳で自信が狂わない為の術を身に付けた。

そしてある日少年は

自らの能力を発動させた。科学では説明がつかない、原理も一切不明。

それはあらゆる現象を掌握し、時空さえもねじ曲げる究極の演算能力。

間違いなく未知の、人間が踏み込んではいけない領域にある力だろう。

研究者たちは狂喜した。

少年は最も優秀な能力を発現させた少年少女の集団

オリジナル・チルドレン（八人の最高傑作）の一員となり、完全実力制のその一団で能力の余りの特異さに番外戦力ロストメンバーというポジションに付けられた。

研究者が言うには非常に名誉なことらしいのだが、少年には何の感慨もわかない。

ただ、無表情に無感動にその結果を受け入れた。

しかし、そんな少年にも劇的な変化が起きる。

彼はとある少女と出会った。

その少女は新しい実験体ルムナイトとしてやってきた。

前いたルームメイトは『使い物にならなくなった。』

今ごろどこかの保管庫の中にでもいるのだろう。

別段珍しくは無い。その新しいルームメイトは腐った地獄のような場所で微笑むことが出来る少女だった。

少年にはとうの昔に失った感情だ。

少女は頻繁に話しかけてきた。

名前を聞き、趣味を尋ねる。

取り留めもない会話。

少年は少女の事を疎ましく思っていた。

そんなことを知っても何の意味もない。

いつかは自由になれる、そんな希望なんかあるわけがない。

少年は不思議だった。

何故、彼女はこんなにも笑えるのか？

しかし、同時にある微かな感情も生まれた。

今思えば、それは恋心だったのかも知れない。

大きい瞳にきれいな薄い唇と白い肌。

笑顔がとても似合っている少女だった。

暗く澱んだ世界に光が見えた。

少年にとってその少女は希望そのものだったのだろう。

単調な毎日が初めて楽しく思えた。

少年はやっと喜びを手に入れた。

それから暫くして、少年はある実験を受けた。

なんてことはない。

ただの能力テストだ。

それは今までにも定期的に行われてきた。

ただ1つ今までと違っていたのは、見たこともない黒い箱が実験室に置かれているという事だ。

しかし、少年は特に疑問も感じずその箱に能力を使用した。

箱は四方からの不可思議な圧力を受けて徐々にたわんでいく。

そして完全に圧碎された。

瞬間、箱から何か赤い液体が迸った。

少年にはその正体がすぐに分かった。

見慣れたその赤色、微かに漂う生臭い匂い、血液だ。

唐突に嫌な予感が少年の胸をよぎる。

鼓動が早まった。

何の…いや、“誰”の血だ…？

疑問に思うともう止まらない。自分の意志に関係なく勝手に脳が分析して、答えを割り出す。

分かってしまった。中に何が入っているのか。

信じたくなかった。

しかしながら答えはでた。

彼の計算は無情にもただ、結果のみを生み出す。

震える足で箱に近づき、震える指先で蓋を開ける……

次の瞬間

『が…ああアアアアアアアアアアああ!!』

少年は獣のように雄叫びを上げる。

やはり、中にいたのは少年が最も心を許したあの少女の変わり果てた姿だった。

『ガアアアアアアアアアア!!!!』

少年は未だ叫び続ける。

それが、悲しみからか怒りからかもう少年にも分からない。ありとあらゆる負の感情がとめどなく溢れる。

研究者たちが犯したミスは実験に少女を使用した事だ。

少年の感情の変化による能力干渉の拡大の度合いを確かめるのが実験の目的であり、確かに結果は出た。素晴らしい成果だ。

だが、それと同時に

憤怒に狂乱する1人の鬼神が生まれてしまった。

研究者は戦慄する。

叫び続ける少年の尋常ならざる事態に、自分たちは何かとんでもない事をしてしまったのではないかと今更ながら考えた。

だがもう遅い。彼らは人が踏み込んではいけない領域に土足でずかずかと入りこんだのだ。

研究者たちは次いで怯える。

狂ったように絶叫する少年の背中に今まで見たこともない翼のようなものが存在していた。

紅に染まる翼が二対。まるで翼を血に染めた天使のような姿がそこにはあった。

誰かが素晴らしい…と呟く。

彼らはそちらを振り向いた。

異常なまでの研究心で有名な初老の博士だ。

その顔は恍惚としている。

性欲を満たしたばかりのように満ち足りた表情だ。

「諸君らは素晴らしいとは思わんのかね！？これは私たちが夢に見てきた『神ならざる身にして天上の意志にたどり着く者』なのかも知れな……！」

唾液を飛ばしながら興奮した面もちで叫んでいたその口が不意に止まる。

刹那――

博士の頭が内側からはじけた。

真っ赤な血と共に灰色がかったぶよぶよした物が四方八方に飛び散る。

それが一番近くにいた女性研究員の顔面にくっ付いた。

全てが一瞬の出来事で何が起きたか理解出来ない様子でいたその女性性は自分の顔にこびりついた物をつまんで引き剥がす。

そしてそれを“認識”し

「ぎゃああああア……！」

女性は壊れた。

悲鳴が悲鳴を呼び、阿鼻叫喚の場と化したそこで、発狂した者、泣き叫ぶ者、祈る者を問わず死は平等に訪れた。さっきと同様頭が爆ぜ、更には体が真つ二つに引き裂かれ、何故か内臓が動きを止める。

一拳に殺戮が訪れた。

最早動く者否、命ある者がいなくなった今でも少年は叫び続ける。

既に真つ当な理性など消え失せている。

今彼を動かしているのは膨大な殺意と敵意のみだ。

今なら彼は視界に入る者全てを破壊してしまうだろう。

狂乱し、凶乱し、破壊を続ける彼を止めることはもう不可能だ。

荒れ狂う怪物は翼を広げ、地に叩きつける。

それだけで、地面が抉れ発生した風圧は

衝撃波となった。

彼を中心に不可思議な爆発が起き、全ては灰燼に帰す。

転がる無数の死骸も

ズタズタになった部屋も有機、無機を問わず、纏めて消滅した。

それは比喻でもなく、結果論。

本当に何一つ残らず

この世から消え去ったのだ。

破壊の対象とすべき物は無くなった。

それでも尚、彼の怒りは収まらない。

彼の殺戮は終わらない。

再び翼を広げ、再度地面に叩きつけ――――られなかった。

急にその動きが止まる。だが、もがいている姿を見ると自分の意志で止まっているわけではないようだ。

よく、目を凝らすと何かが体中に絡みついている。

糸のように細いが、まるで質感がない。

その未知の物質は完全に動きを奪いそこに縫い付けていた。

いつの間にか1人の男性がいた。糸のような物質の端を右手に持って立っている。

男性と言つにはまだ若い。

17〜8歳位だろうか？

信じられない事にこの怪物の動きを止めたのは彼のようだ。

彼は特徴ある銀色の目を微かに歪ませ

「天使の力の過剰^{テレスマ}摂取による力の暴走か……。もう少しで取り返しがつかなくなる所だった。空間移動魔術を使って正解だったな。これは時間との勝負だから……。」
と呟く。

魔術や天使など科学の街では凡そ聞かないような言葉を並べ、独りごちる。

「すまない……。まだ完全にはお前を守る事は出来ないようだ。」

その男性は願った。お前は何も知らなくていい。

ただ普通に生きてくれればそれでいい。

ここでの事は全て忘れる。

今からお前を光へ連れ戻す。陰惨な記憶は捨てるんだ。

そして彼は叫ぶ。

嘗てある技術を学ぶ時に自分の胸に、魂に刻んだ名前を……

「Judicare 025（我が手は大罪を打ち砕く）！」
守りたい物を守りきる事が出来なかった。それを自分の大罪とし、その大罪を打ち砕く為に彼は力を手に入れた。

その叫びは周囲にこだまし、直後眩いばかりの光の奔流が流れ出す。

光が収まった後には気を失い倒れている少年がいた。

倒れている少年、その名は矢桐言波という。

「はっ！」

言波の意識は覚醒した。

どうやら、神裂の話を聞いている内に忌まわしい記憶を思い出して
いたようだ。

言波の額には冷や汗が浮かんでいる。

「申し訳ありません。忌むべき記憶を呼び起こさせてしまったよう
ですね？」

「嫌、気にするな。」

……はつきりと思い出した。俺はあの時、能力が暴走し自我も失い
ただの殺人鬼になっていた。それを救ってくれたのがあの人神白創
だったんだ。

あの人は恩人だよ。

……そうか、あの人も魔術師だったんだな。ということは俺は魔術
を既にしっていたのか……。」

「ええ、彼はイギリス清教第零聖堂区『必要悪の教会所属の魔術師
です。ネセサリウスネセサリウスというのは私やステイルも所属している組織で
対魔術師に特化した専門部隊です。彼、神白創は私の同僚に当
ります。」

ですが…と彼女はそこで言葉を区切った。

「彼の姿は数回しか見た事がありません。彼はネセサリウスの中で、最も隠密性が高い広域特殊殲滅部隊『滅殺連隊』のリーダーを務めていますね。滅多に面には出てこないんです。」

ふーんと言波は気が無さそうに相づちを打つ。

「んで？結局話って何だよ？」

そう言うと彼女は僅かに躊躇うような表情を見せた。

伝えるべきなのかどうか、迷っているように見える。

数秒ほど逡巡し、やがて決心がついたのか話し始める。

「お聞きします。あなたは事件が起きた後、どうなりましたか？」

「さあ？何か直ぐにスーツを着た連中に保護されて、とんとん拍子に住む場所に通う学校、資金なんかを整えられたけど？」

「妙だとは思いませんか？」

神裂は一言一言区切りながら話した。

丁寧と言って聞かせるように。

「あなたは未知の能力を目覚めさせ、あなたを研究していた研究所は全壊した。」

“何故あなたは普通に暮らす事が出来るのですか？”あの事件は世界中のあらゆる組織が知る所となりました。科学サイド、魔術サイドどちらにもです。彼らがあなたを放っておくと思いますか？」

「何だよ？何なんだ！何が言いたい！？」

彼は薄々気付いていた。おかしいと思っていた。あれほどの殺戮を犯した自分が何の束縛も何の干渉も受けずに日々を暮らしている事に。

「答えは簡単です。あなたは守られていたんですよ。神白創に。彼が学園都市に話を付け、あなたを狙う数多の魔術結社を壊滅させあなたの日常を守り抜いたんです。」

返ってきた答えは単純だ。しかし不可解だ。そこまでする必要はない。
更に疑念が深まる言波に“ヒント”がもたらされた。

「もう一度考えて下さい。私はあなたに会った時“彼”に似ていると言ったんですよ？もちろん精神的な相似ではなく肉体的な相似も含まれます。」

言波は思考し分析し、そして戦慄する。

口が渴き、汗が吹き出す。

驚愕に体が震えた。

「まさかー！まさかあの人は俺の兄か……？」

解答など訊くまでもない。神裂の表情が全てを語っている。

言波にはかつて兄がいた。両親が死んだと同時に離れ離れになった兄が。

その後直ぐに里親から学園都市に入れられた言波は兄に会う機会など終ぞ訪れなかったのだが……

「彼の魔法名はJudicare025。意味は『我が手は大罪を打ち砕く』彼は初めて会った時私にこう言っていましたよ。『俺は守りたい物を守りきる事が出来なかった。それが俺の大罪だ。もう二度とそいつを苦しい目に合わせたくはない。その為に俺は力を手に入れたんだ。』……と。」それを聞いた瞬間言波の目から暖かい何かが零れ落ちる。

それが涙と分かるまでそう時間は要らなかった。

安堵からの涙かも知れない、歓喜からの涙かも知れない。

ただ涙はとても暖かった。

「これが全てです。

彼はそれつきり何も言わず去りました。

あなたにとっては残酷な現実でしょうね。」

残酷。確かにそうだろう。言波は今までずっと1人だった。仲間が出来たのはつい最近。幼いころ唯一心を許した少女は闇の薄汚い欲望の犠牲となった。

彼は孤独の中日々を過ごしていたのだ。

確かに残酷だ、されど

「嫌、素晴らしい真実だ……。」

自分を見守ってくれる人がいた。

自分を大切に思ってくれる人がいた。

それだけで充分だ。

彼の目から絶え間なく涙が溢れる。

「有難う、神裂……」

「いえ、それではもう私は行きます。どうぞお元気で。」

そして彼女は立ち去っていった。

その後ろ姿は涙で霞む。

肩を震わせ、嗚咽はやがて大声に変わる。

言波は初めて、優しさで泣いた。

その声はいつまでもいつまでも響いていた。

間話・漆黒の残照（前書き）

ちよつと入れて見たかった話。

若干暗い……かな？

まあ、見て頂けるのならどうぞ、読んで下さい。

間話：漆黒の残照

某国・某所にある森林。余りに深すぎて地元の者も滅多に近寄る事がない。言わば現代世界の死角といふべきその場所を疾走する1つの影がある。

明らかに異常なスピードだ。とてもただの人間が出せる速度ではない。一步で数メートルは進んでいる。物理法則を完璧に無視したその影はやがてある場所で立ち止まる。

それは一言で言う要塞だ。よくも今まで存在が見つからなかったなと思えるほど巨大な建造物。

その時、月明かりがその立ち止まった人影を照らし、姿を露わにした。

ぼうつと浮かび上がったのは男性だ。

黒いロングコートを羽織り、軍用のゴツいブーツを履いている。

更に特徴的なのは、その手に携えている一振りの槍だ。月光を反射してキラリと禍々しく光る。

見る者を思わずゾッとさせるほど根本的な恐怖に訴えるような輝きだ。

その槍を携えている男性は周りを探るように見回し、ボソツと呟く。

「探索術式が杜撰すぎる。まるで入ってくれと言っているような物だ。——まあ、十中八九罠だろうけど……。敢えて引つかかるか

……」

一歩前へ踏み出し、言葉を紡ぐ。

『場に満ちし光を以て四方を我が支配下とす。』

一瞬後

周りを照らしていた月光が不自然に強まり、一点に集まった。

その光の玉はドンツと音を立てて破裂する。それに伴って何もなかった筈の空間に急に蜘蛛の巣状に張り巡らされた赤い線が浮かび上がり、次々に断ち切れた。

「防御が軽視されている理由……それはつまり、攻撃に絶対の自信があるから。」

彼は見ている。赤い線が破壊されたその先の空間を。

いつの間にかいたのかざつと2000人程の人間が手に手に獲物を構えていた。

剣や斧、弓など使用目的が明確な物もあれば兜や磁石、カードなど凡そ攻撃には向かないであろう物を携えているのもいる。

だが、共通している事が1つ。全ての者が殺気に満ちていると言うことだ。

それほどの人員を前に男性は焦り1つ見せず、冷静に構えている。

普通に考えると戦うとしても戦力の差は200対1だ。どう足掻いても勝てる訳がない。

だが

この男性にはそんな道理は通用しない。

そもそも仮定からして間違っている。

勝てる勝てないの次元ではなく、抗おうとする事が既に無意味なのだ。

例えるなら絶対的な王者に小枝を持って刃向かうような物。

結果など決まりきっている。

王者ははつきりと宣言する。

「私はイギリス清教必要悪の教会所属^{ネセサリウス}“滅殺連隊”が長。神白創。貴君らの行動を鑑みた結果決して容赦出来る範囲内ではないと判断し、貴君らを迅速に始末する事とした。」
表された意味は迅速なる死刑執行。

200人が騒然とした。

“滅殺連隊”と言う名に。

イギリス清教の暗部中の暗部。イギリスにいる魔術師の頂点に位置する特殊任務部隊で、その主な任務は敵対組織の速やかな殲滅。

そして彼らは絶望した。

“神白創”と言う名に。

インクイジター
審問官の異名をとる精鋭中の精鋭。

彼じゃなかったらまだ希望は会った。

他の“滅殺連隊”のメンバーだったら200人で一斉にかかれば或いは倒すという所までは行かなくとも、退ける事は出来たかも知れない。

だが、神白創が出てきた時点で彼らの勝利は有り得ない物となった。

「それでは魔術結社『深淵なる黄昏』対魔術師狩りの存在理由の下、裁きをー」

次いで為されるのは戦の引き金を引く言葉。

「ーーー執行する」

同日魔術結社『深淵なる黄昏』本拠地は謎の爆発によって壊滅。

しかし、詳細は闇から闇に葬られた。

行ったのは“滅殺連隊”面に出ることはない影の組織。

名誉を求めてはならない。

賛美を求めてはならない。

何故なら、彼らは全員血塗られた手を持つ最も罪深い存在なのだから……

とある論理の前哨介入（前書き）

今回一番短いです。

今、先生の目を盗んで投稿しているのでバレたらどうしようかとビクビクものです。

とある論理の前哨介入

――季節は夏。

日光が積極的に自己主張を始め、夏休みというビッグイベントに世の学生のテンションが上限知らずに上がっていく季節でもある。

空は当たり前のごとく晴天。

夏の暑さに更に追い討ちをかけるが如く日光が輝いている。

言波はその空の下をふらふらとゆらゆらとまるで夢遊病患者のように歩いていた。

パツと見ですぐ職務質問を受けそうな怪しい動きだが、その原因はただ1つ。

「…暑い……………」

極端に暑さに弱い彼は最早病気ではないだろうかと思える程危なっかしい足取りだ。

「くそ！クーラーが壊れるなんて俺に死ねとでも言ってるのか。」
ぶつぶつ言いながら向かうは近くのコンビニ。

クーラーが効いている天国へ急ぐ。

「やべえ。早く行かねえとリアルに暑さで昇天しちまう。」
余りの熱気に命の危険を感じた彼は進める足を速めようとした。

「ん？」

その動きがピタリと止まる。

人混みの中にあの御坂美琴を見たような気がしたのだ。

「見間違いか…？」

それならそれで構わない。正直あのバトルジャンキーとは関わりたくない。

だが、妙に胸騒ぎがする。そもそも名門常盤台のお嬢様でホイホイ出歩いているのはあのバトルジャンキーと変態テレポーター位のものだ。

故に見間違いなどそうそうない。

だが、もう次の瞬間には人混みに紛れたのかその御坂らしき人物の姿は確認出来なかった。

「ま、いいか。」

さほど気にもせず目的地のコンビニへと急ぐ。

数分後

ガーーーーッ

コンビニのドアから出てきた言波はやたら清々しい顔で、右手に大量のジュースが入ったビニール袋を下げ、

「ふふふ、サツパリしたぜ。後は家に帰ってシャワー浴びてこのジュースをグイッと。たままないね〜、夏もまた良きかな良きかな。」
ご機嫌で家路を急ぐ。だから気付かなかった。これ見よがしにバナナの皮が落ちているのが。

ドタンツ！ 転ぶ音

ガタンツ、ガラガラ ジュースが転がり落ちる音

ブチンツ 余りのベタで理不尽な展開に言波がキレる音

「ざっけんなああ！！」

3種類の音の後に絶叫が響く。

周りの人達の視線はもう何？このいろいろ痛い子！？だ。

世間の冷たい目というのを直に感じた言波は

「ふ、ふふふふ……」

今、俺の事を変人を見るような目で見た奴ー風邪引け。」

……何とも器が小さい男だ。

「全く誰も手伝ってくれないし、人情つてのが無いよな〜」

尚もぶつぶつ言いながら流れ出たジュースの缶を拾いにかかる。

「必要ならば手を貸しましょうか？」と、ミサカは提案します。「すぐそばから声が聞こえた。」

「うわぁ！御坂？」

常盤台の制服を着た少女がそこにいた。

確かに顔は御坂そのものだ。

しかし、御坂美琴はこんなにもゴツい軍用ゴーグルなど持っていただろうか？

「必要ならば手を貸しましょうか？」と、ミサカはもう一度あなたに問います。「

「は？お前そんな変な喋り方だったっけ？ってかそのゴーグル何？」

「もしかしてあなたはお姉さまの知り合いですか？」と、ミサカは若干の疑問を露わにします。「

「お姉さま？じゃあお前御坂の？」

「はい、妹です。」

目の前の少女は淡々と話していく。まるで機械のように無駄な物を削ぎ落とす口調で。

「へえ！あいつ、妹いたんだ。見れば見る程そっくりだな。」

「遺伝子レベルで同一ですからと、ミサカは答えます。「

その言い方に少し引つかかる物があった。まるで自分が作り物で計算されて生み出されたかのように聞こえた。

しばし、思考の海に沈もうとした言波を御坂妹（そう呼ぶことにした）の声が連れ戻す。

「このままでは通行の邪魔になるのでは無いですか？」と、ミサカは客観的な意見を表明します。」

こぼれたままの缶を指差しながらそう言った。

そして拾おうとする。

「おっと、悪いな。」

「いえ、誰かが怪我をする可能性も有りますので。」

やはり、無表情で答える。

「それで、これはどこまで運べば良いのでしょうか？」と、ミサカは問いかけます。」

「いやいや、そこまでしてもらわなくても、こうやって。」

言波が缶に触れると一瞬でその場から消えた。

「今のは？」と、ミサカは驚愕を示します。」

「あんま驚いているようには見えないけど？まあ、今は俺の部屋に転移させただけだよ。女の子に運ばせるのもなにか悪いし。」

「どつやら空間移動とはまた違うようですね。と、ミサカは分析します。」

「まあ、似たようなもんだけどな。」

「それでは用が済みましたらー」

「ああ、ありがとう。お礼は今度するから。」

「はい、ではいずね。」

ぺこりと一礼して御坂妹は去っていった。

――御坂妹との出会い。それは言波を更なる戦いへと誘う――

とある論理の光陰境界（前書き）

凡そ2ヶ月ぶりの投稿となります。

全く今まで何をしていたのやら。全然話が浮かんで来ない上に勉強が忙しくてまたしばらく、更新はしないと思います。

とある論理の光陰境界

「ハッ、ハッ…ハア」

とある路地裏を少女は走る。

ただでさえ光が当たる事がないそこは、時刻が夜ということも重なり、何やら世界から外れているように感じられた。

狭い路地裏を息を切らせながら疾走している少女。

なぜ、こんな暗い道を必死に走っているのか？

少女は追われていた。

追われているといってもそこらの不良達にはない。

不良ぐらいなら楽に追い返す事が出来る、ある物を携えているからだ。

それは一丁のライフル。

ただのライフルではない。俗に対戦車ライフルといわれているそれは、破壊力に関してはわざわざ論じるまでもない。

ならば、明らかに殺傷能力がある兵器を手にしても逃げなければならぬ脅威とは何なのか？

その答えは少女の真後ろに現れた。

「よオ、そろそろ鬼ごっこは終わりの時間だぜエ。」

カツカツと靴音を響かせて現れたのは1人の少年。全体的に細身で、とてもじゃなく、戦闘能力が高いようには見えない。

……だが、見えないだけで少年は誰よりも……それこそ世界中の軍隊を相手にしても容易にねじ伏せる事が出来るのだ。

ガン！ガン！ガン！

発砲音が路地裏に響いた。

少女が手に持つ対戦車ライフルの引き金を引いたのだ。

普通なら生身で対戦車ライフルなど発砲したら反動で体が吹っ飛ばすことになるだろうが、この少女は特別な訓練を受けたおかげで衝撃を最小限に抑える事が出来る。

そしてその撃ち出された弾丸を人間が食らったならばグチャグチャの肉片になってそこらに飛び散る事になるだろう。バチャバチャと重い液体が地面にぶつかる。

だがしかし、赤い、紅い、朱いその液体が流れ落ちるのは少女の腕からだ。

通常なら有り得ないだろう。

何故、撃たれた本人は平然と立っていて撃った本人の片腕が血まみれの肉塊と化しているのか。

「……!？」

少女は潰れた腕を庇いながら、今度は手に持っていたライフルを少年に投げつけた。

だが、そのライフルは少年の体に達する前に粉々に破砕される。

更に少女は身を翻し路地の間に走り込む。

しかし、逃げることなど意味はない。

どのみち命が助かることはない。

少しでも命を保つための時間稼ぎにしか過ぎない。

しかし、その時間稼ぎさえも無駄な行いとなった。

少年は1つため息をつくと言わずに地面を軽く蹴った。

ドン!

それだけで轟音をたててその体は有り得ない程加速する。

もはや低空飛行の状態だ。

「もういい加減うんざりなんだよ!無様に逃げてばかりで、もうちょよっと俺を楽しませて見ろっつもの!」

あつという間にその体は少女に追いつき、そして拳が振るわれる。

「あぐッ！」

悲鳴を上げて少女は地面を転がる。

その拍子に目もとを覆っていたゴーグルが外れて飛び、その顔が露わになった。

その顔はある人物に瓜二つだ。

そう、常盤台のエース学園都市最強の電撃使い（エレクトロマスター）7人しかいないレベル5の第3位「超電磁砲」御坂美琴にそっくりだった。

「つまんねエな、もオ終いか？……ハハッ！なア1つクイズと行くか？さアて問題だ。お前をここまで追い詰めた俺の能力は何でしょオカ？」

心底愉快そうに少年は笑う。

闇夜に赤い目を光らせて、少年にとっての一方的な殺戮は本当にただのゲームなのだ。ワンサイドゲーム

能力は何か？その問いに少女は答える事は出来ない。

息も絶え絶えで呼吸するのがやっとの状態だ。

「分かんねエよなア！大サービスだ。答えはベクトル操作。熱量、電気量、運動量あらゆる力の向きを俺の体に触れただけで操作出来る。まア、デフォじゃ反射に設定してるけどなア！」

何故、こんな所にいるのか？要するにヒマなのだ。こう見えても優秀な部類に入る言波は夏休みの課題はとっくに終わらせてしまい、もちろん補習など有るはずもない。

つまりやることが無い。隣の部屋に住む不幸少年は残念ながら馬鹿なので補習に行っている。

友人など数える程しかいない彼にとって

もう1人でぶらぶらする以外に時間を潰す方法が無いのだ。

しばしばーっとしてしていると、ふと子供達の声が聞こえてきた。

見ると、小学生が数人缶蹴りをして遊んでいた。今時ゲームもしないで外で遊んでいるとは珍しい。

言波は子供が好きだ。断じてロリ ンだのそういうのではなく、純粹に子供は可愛いと思っている。特に元気に外で遊ぶのを見るのは微笑ましい。

だが、その子供達の集団の中にある人物を見つけると一気にその顔が憂鬱そうに変化した。

「おりゃあ!!」

その人物は小学生相手に飛ばしていた。

実に大人気なく、思いつきり缶を蹴飛ばしている。

名門常盤台中学のお嬢様なのに非常にお嬢様らしくない、あの電撃姫。御坂美琴を発見した。

「……………帰るっ」

アイツに見つかったら絶対面倒くさい事になる。

具体的には電気の槍が飛んで来たり、最悪、決して人に向けて撃つてはいけません的な戦略軍事兵器をぶっ放される恐れがあるからだ。

「君子危つきに何とやらってね。」

ヨイシヨとベンチから立ち上がり、見つからないようにやや小走りに移動する。まるで頭にGがつく黒いヤツを彷彿とさせる動きだ。

正直言つて気持ち悪い。

端から見たらもの凄く目立つし、怪しい事この上ない。

しかし、とつとこの場から去りたい彼にとって第三者からの生暖かい視線など、気にする余裕もなく。

まあそれはしょうがない、が、残念な事に彼は周りを気にしなさ過ぎであった。

もし、チラッとでも後ろを見たら気付いただろう。

蹴り飛ばされた空き缶が彼の後頭部を目掛けて飛来して来ている事に。

カーン

軽い音とは裏腹に金属の塊である空き缶は、蹴られた時の威力と重力という自然の節理が相まって彼の頭に驚く程のダメージを与えた。

一見何も無さそうな事に限って実はとんでもなく痛かったりする。

タンスに小指をぶつけるとすると分かりやすいだろっか？

音は軽いのに、とんでもなく痛い。

それは今、この場でも例外ではなく頭を抑えながら、無言で悶える言波君が完成した。

「すみません！ちょっと大丈夫……何だアンタか。」

ビクビクと地面でのた打ち回る彼に謝りに来たはずの御坂が冷たく声をかける。

「何だとは何だこの野郎！ここは普通に謝るべきだろ。大体こんな大して広くもない公園で思いつき蹴ったらこうもなるわ！考えんかバカ！！畜生やっぱりお前と会ったらろくなことにならない。こういう不幸は当麻だけの専売特許じゃなかったのか？もしか、アイツの不幸って移るのか？」

「うるさいわね。悪かったわよ。っていうか何、この匂い。何かゴミみたいな。」

「お前、全然悪びれてないだろ！全部お前のせいなんだよ。さつき蹴った缶、いちごおでんって書いてあったけどな、まだ中身入ってたぞ！

しかも賞味期限が一週間前。そら臭いわ！一番臭いのは俺なんだ。全く中身を確認してから缶蹴りはなさい！」ひとしきり言い終わった後、ふうと息をつく言波。

「分かったから何とかしてよ。アンタの能力なら何とかなるでしょ。」

「

「……なあ、何でお前そんな偉そうなの？被害者は俺なんですけど。」
「ぶつぶつ言いながらも、能力を応用して服から水分を抜き取り、匂いを分解する。ついでに雑菌も死滅させた。」

あまり派手な能力の使い方ではないのだが、目の前で汚れが一瞬でなくなる様は小学生達の好奇心を刺激するには充分だったようだ。

1人の女の子が興味しんしんと言った様子で聞いて来た。

「うわ〜！今のどうやったの？」

「うん？ああこれが、ただ服を濡らしている水分を抜いて匂いは分子ってっても分からないよな。簡単に言えば匂いっていうのは物凄く小さな物の組み合わせなんだ。だからそれを分解して無臭にしたってわけ。」

「ふ〜ん、良く分からないけど凄いなだね！」

「見たか御坂？子供はこんなに素直なんだ。お前もちよっとは見習……ん？」

御坂はこちらの話など聞いておらず、ある一点を見つめて微動だにしない。

「ん？」

その視線の先、御坂を見つめさせたまま動かさないものは1人の少

女だった。より正確に言えば、その胸元につけているカエルの絵がプリントされた缶バッジだった。

スタスタと無言でその少女に近づく御坂。そしてガツと肩を掴む。

「お嬢さん。そのバッジはどこで入手したものですか？」

その剣幕に若干少女の顔が引きつっているのは否めない。

「えっと、駅前のガチャガチャだけど。」

「行くわよアンタ達！」

言うが早いか猛ダッシュを始める御坂。

「ありや能力を使ってやがるな。何て無駄な使い方だ。」

そう自分の生態電気を操作する事で、一時的に身体能力を挙げているのだ。

「あ、こけた。おお、手をついて一回転してまた走り始めた。」

目の前で織りなされた妙技に思わず舌を巻く。

「どうする？見失っちゃったね〜」

「しょうがないね帰る？」

口々に子供達が言い合う。

「大丈夫だって、すぐに追い付く。」

言波がそう言うときみんなきよとした顔になった。

「どっせして?」

「まあ、ちょっとね。えっと駅前で良かったっけ?」

「うん、そうだけど...?」

「よし、じゃあ行くつか。みんな手をつないで。」

「?????」

未だ?マークを浮かべながら一同が手を繋ぐ。

「干渉対象は空間。現座標を1次元座標へ変換。逆算開始、1、3、9、10完了。空間連結、成功。接続。コネク」

突如並べられた無機質な声による演算式に驚きを隠せない子供達。そしてもっと驚いた事に気が付けば自分たちが駅前にいるという事実。

「わ〜!今の何?」

「お兄ちゃんレベル5(超能力者)なの?」

など興奮覚めやらぬ面もちで次々と問い掛けて来る。

その問いかけには微笑で返す言波。正直な話、彼自身にも自分がレベル5に相当するのかわからない。何しろレベルアンノウンなのだ

から。

それは誰にも分からないだろう。

「さて……いた。」

彼が呆れたように見つめる視線の先には熱に浮かれたように一心不乱にガチャガチャを回し続ける御坂がいた。

「おい、御さ……」

「ごめん、ちょっと両替してきて。」

そう言っで一万円札を押し付ける御坂。

「パシリかよ。ってかこんなんに良く一万もかけようと思うよな。」
などとぶつぶつ言いながらも御坂の目にある種の危なさを感じた言波はおとなしく両替へ向かう。

141

その間ガチャコンガチャコンと回す音だけが妙に辺りに響き、通りすがりの人達も不思議そうに立ち止まる。

周りに子供達がいるため、子供達に買っただけがと解釈されているようだが、これが全て自分の為だと知ったらどんな表情になるだろうか？

少なくともお嬢様に対しての憧れは一瞬で消えてしまう筈だ。

そう考えさせるほど目の前の少女は異様なオーラを迸らせている。

「そついや俺、何でこんなところにいるんだろ？」

今更ながら、言波は自分がかかり場違いだということに気付いた。

ひたすらガチャガチャを回しまくる女子中学生のそばにただ立っているだけとはかなり無駄な時間だ。

(……帰っていいか？って言いたい！言いたいけど、今話し掛けたら電撃が殺傷能力をもって飛んできそうだ。嫌、ってか何も帰るのに許可なんか取る必要ないよな。よし、帰る。)

そう思った時、不意に御坂が満面の笑みを浮かべて立ち上がった。

その手には女の子が付けているのと全く同じバッジが握られている。

「やった……!」

周りの子供達の表情も苦笑い。

「……で？どうすんのそれ？まさか服に付けるなんて言わないよな。正直にいうけど、もしそうならお前はいろいろとアウトだぞ。」

言波がそう言った途端、御坂の満面の笑みがピシッと凍った。

どうやら気付いたようだ、中学生にもなってキャラクターがプリントされたバッジを服に付けるのはかなり痛いセンスだという事に。

「……………」

「……………」

しばし無言の時間が流れ、

「……カバンとかならいいでしょ！ バッジの1つや2つ付いても珍しくないし！！」

「うん、まあ良いんじゃない。それで恥をかくのもお前だけだし。」

「……………」

再びその場を沈黙が支配した。

「お、悩んでいるとこアレだけど完全帰宅時間だ、早く帰れよ。俺も帰る。」

そう言って言波は早々にその場を立ち去った。遠くで帰宅時間を知らせるメロディーが流れている。

御坂はまだ悩んでいる様子だったが、子ども達と手を繋ぎながら帰り道を歩き始めた。

何やら談笑しながら歩いているその姿は、まるで彼らの姉のような優しさを秘めている。

しかし、唐突にピクリと顔色が変わった。

そう、その表情が表すのは戦慄。

「お姉ちゃんどうかしたの？」

1人の女の子が御坂の異変を感じたのかそう問いかける。

「え？うつん何でもないわ。」

当然のようにそう返すも、どこか顔色が悪い様子は隠せていない。

「じゃあね、気を付けて帰んなさいよ。」

子ども達と別れた所で、走り出す。

御坂が感じたのは自分とよく似た力の一端、似すぎているといつてもいい。

唐突に御坂の脳裏にとある都市伝説が思い浮かぶ。

それは彼女の・・・学園都市第3位「超電磁砲」のクローンが作られているという噂話。

但し、噂の出どころは不明で、信憑性も無い。学園都市に数多ある下らない噂話の1つにすぎない。・・・そう、すぎない筈だった。

・・・

実質御坂本人も信じてなどいなかった。自分に関する噂話は気分がいいものではなかったが、それでもヒマな学生が考えた作り話だろうと受け流していた。

だが、今なら信じてしまう。

学園都市に電撃使い（エレクトロマスター）など数多くいる。それこそ発火能力者や念動力者のように最もメジャーな能力の1つだ。ハイロキネシスト サイコキネシスト
希少さで言うのなら彼女の後輩の空間移動能力の方がよっぽど上だろう。テレポーテーション

……だが、それでも御坂はレベル5であらゆる電撃使いの頂点に位置する最強の能力者である。

だからこそ自分そっくりの異常なまでに似ている“力”を感じる事など有り得ない。

同種の能力を持っていたとしても、能力の本質はそれぞれ違う。人間に個性があるのと同じように、同系統の能力にもまた1つ1つ癖がある。2人の念動力者が全く同じタイミングで、全く同じ時間、全く同じ物に干渉する事は無い。

それは発火能力者においても、もちろん電撃使いにおいてもあらゆる能力者もまた然り。

そう、有り得てはいけない（……………）。
もしも有り得るとしたら、自分と全く同じ存在。つまり、自分のクローンが存在するという証になる。

御坂の顔から冷や汗がとめどなく流れ出した。

何故、こんなに走っているのか？

何故、この力の根源を探そうとしているのか？

御坂にも分からない。今も彼女の理性は走るのを止めさせようとしている。本能は警告を発している。

……見てはならない、知ってはならない。二度と日常には

戻れなくなる……

それでも彼女の脚は止まらない、止められない。

今ならまだ間に合う。今ならまだ戻れる。

踏み込んだその先にはきつと絶望しかない。

なのに……

御坂は止まらなかった。戻らなかった。

そして踏み込んだ。

「あなた……何者……？」

澀んだ『闇』へと、真つ暗な『陰』へと

境界線を越えてしまった（……………）。

その目線の先にいるのは1人の少女。自分と似ている、嫌、最早同一なその姿。

皮肉な事に全く信じていなかった戯言を自分の手で真実だと証明した瞬間だった。

そして闇への片道切符を強制的に押し付けられた瞬間でもある。間違いない、今この時を境に彼女の普通の日常は跡形もなく砕け散った事だろう。

運命か偶然か或いは……必然か……

今はまだ誰にも解らない。

ただ1人、学園都市の某所、培養液に満たされたビーカー内で薄く笑う人物をのぞいては……

この街の『闇』は、『陰』は、『暗部』は誰が想像するよりも遥かに深く暗くて、そして凄惨だ。

油断すれば、食い潰される。

抗えば呑みこまれる。

何も知らないのが一番良い。何にも気付かないのが一番良い。

そして、もしも知ってしまったなら、何かどんな些細な事にでも気付いてしまったなら、

日常に微妙なイレギュラーを感じてしまったなら。

その時は……諦める……

二度と光を求めな。

生き残りたくば、最も最善の選択がそのまま落ちることだ。

それが、闇を知った、闇で生きたこの俺。ロストナインパー番外戦力からの忠告だ。

とある論理の表裏干渉（前書き）

これで全3作品全て投稿出来ました。

次回はちよつとだけ戦闘シーン入ります。息抜き程度に頑張ってください。

とある論理の表裏干渉

「あんだ……何者……!？」

余りの驚愕に、思考が廻らず分かりきった事を聞いてしまう。

出来るなら答えないうでいて欲しいと思う自分がいることに美琴は気付く。

そうすれば、まだ、何も知らずに引き返せるかも知れない。

実際はもう手遅れなのだが、淡い希望を抱かずにはいられなかった。

だが、返ってきた言葉はあらゆる予想を正面からすっ飛ばすような不可解極まりないものだ。

たった一言

「ミヤー」

……は？美琴の思考が違う意味で固まった。

(mya?何かの組織?それとも暗号?)

どうにかして意味がある事象に結びつけようと軽いパニックを起したのも無理は無いだろう。

それ程突拍子もない応答だったのだから。

それに続く言葉もある意味訳が分からない。

「・・・と鳴く四足歩行動物がピンチです。」

ふいとその恐らくはいや、間違いなく自分のクローンであろう少女の目線の先に目を向けると、今にも木からずり落ちそうな子猫がいた。

「先ほどここを通りかかった時、車の中に赤ん坊が取り残されているのを見つけ、ミサカ的能力でロックを解除し事なきを得たのですがその時に驚いて木に登りそのまま降りられなくなったのです。と、ミサカは懇切丁寧に説明します。」

はー

半ば呆けていた美琴ははっと我に返り、

「そんなことどうだっていいのよ！私はあんたが何者かって聞いてんじゃない！」

怒鳴り声にも近いその剣幕に少女はあっと小さく声を上げ、

「どうやら更に危機的状況になったようです。」

と、今の声に驚き更にずり落ちそうになっている子猫を見ながらそう呟く。

「助けなくてよろしいのですか？」

淡々と話すその様子にもどかしさといらつきを募らせ口調を強くして

「猫だから大丈夫よ！それより私はあんたが何者かって……」

「そうですか」

はーとため息をつきながら美琴を見つめる。その目にはどこことなく非難するような色があった。

「それではお姉さまはあの猫がどうなってもいいとおっしゃるのですね？」

抑揚のない喋り方で尚も続ける。

「その結果大怪我をして機能障害が出て、生命活動を停止してもどうでもいいと。」

言いたい事を言い終わってこちらをじっと見つめるその視線に一抹の罪悪感を感じたのか、ついに美琴は折れた。

「わ、分かったわよ。どうしろっての？」

「台の上に人が立てばギリギリ届くのではないでしょうかとミサカは提案します。」

「台ね、でも辺りにはそんなの見当たらないけど？」

そこでこちらを見つめ続ける視線に気付く。

一分後

(えっ? 何で私が下?)

若干の理不尽さを感じつつ地面に四つん這いの姿勢で踏ん張る美琴がそこにいた。

上に乗っているのは勿論、クローン(仮)少女だ。

「お姉さま、もう少し左です。」

「くっ、無茶言っつなつての……はぐう！」

突如蛙が潰れるような呻き声を挙げる美琴。

少女が背中中で急に飛び上がったのだ。

「あ、アンタねえ……!!!!!!」

抗議の声を挙げるその顔が真っ赤になった。

目の前には子猫をキャッチした少女がいる。其処まではいい。

だが、スカートをネットのようにして猫をキャッチしていたのだ。

当然スカートは捲れ上がっていた。より具体的に言えばパンツが丸見えの状態だった。

自分と同じ顔をした女の子がパンツを見せているその光景は美琴を羞恥心で染め上げるには十分な威力を誇っている。

「な、なななな何してんのよっ!! 乙女なのに、乙女なのに……」

「!!」

「私と同じ顔してそんな…」

そこで、傍らにいる子猫に目が言った。

「ミヤアアと鳴くその姿はとても愛らしく、先ほどの羞恥心など簡単に忘れてしまう。」

「ち…近くで見るとなかなかかわいい子猫じゃない。」

「コネコ?」

「子供の猫だから子猫よ。でも怯えられちゃうのよねー」

手を近づけただけでビクビク震える子猫に残念そうな口調でそう呟く。

「私の体から流れる電磁波に反応しちゃうのよ。」

「どうやらミサカも駄目な様ですね。」

同じように怯えられている妹の方も心なしか残念そうな口調になっている。

「だー!!!!そうじゃなくて!!!!」

そこで本来の目的を失いそうになった御坂は単刀直入に切り出した。

「あんだ私のクロ…クローンな訳?」

「はい。」

何とあっさりと心の中で御坂は呟いた。

「何であんたみたいなのが存在するのよ。クローンは国際的に禁止の筈でしょ？」

「ZXC741ASD852QWE963」とミサカは符丁の確認を取ります。」

「は？」

「やはりお姉さまは実験の関係者では無いのですね。先程の質問にはお答え出来ません。」

「実験つて？」

「機密事項です。」

「誰が主導してんの？」

「禁則事項です。」

そこでフツと御坂の目が据わった。

ガツと肩を掴んで引き寄せ

「痛い目に会いたいの？力づくで聞いたっていいのよ。」

「……………」

それでも何の抵抗も示さない妹に流石に 躊躇いを覚え

「くっ…いいわ行きなさい。勝手に後を尾けさせてもらっから。あんたはどっかの施設なり研究所なりに帰る訳だから。そこで直接聞き出してやるわ。」

それから妹と共に行動し始めた。途中何故かアイスを食べたり紅茶を飲んだり、明らかに目的からかなり脱線し、気がついたらもう完全に日は暮れていた。

「あんたね…いつになったら帰んのよ?」

一日中歩き回ったせいで乱れた呼吸を整えながら聞く。

「言い忘れていましたが、ミサカはこれから実験に向かうので今日はここで。お姉さまが後をつけるのは自由ですが、情報を手に入れる事は出来ません。」

「なっ…何で今頃…?」

「聞かれませんでしたので。」

しれっと答えるその様子に御坂は微かに額に青筋を浮かべ

「もっと早く言え〜〜〜〜!!」

怒鳴り声は辺り一帯に響き渡った。

「どうしたのですかと、ミサカはお姉さまの突発的な行動にドン

引きしつとも尋ねてみます。」

「ハア、もういいわ。とりあえず今日はここまでね。」

御坂はいろんな意味での疲労感を露わにしながら立ち去ろうとする。

「お姉さま。」

最後に妹が声を掛けた。

「ん？」

「さようなら。」

「あ…うん、じゃあね…？」

その最後に放った言葉に、何かしらの違和感を感じた。

まるで、本当のお別れのような。

だが、去っていく御坂の後ろ姿を見つめるその表情は相変わらずの無表情。

結局その言葉の真意は解らないままだ。

- - - - -

「ハア。」

御坂は本日何回目になるうかの溜め息を吐いていた。

何なのだろう、この虚しい感じ。

自分のクローンだというのだから、自分に変わって御坂美琴という存在に成り代わろうとしているのかと、三流SFをちよつとだけ想像してしまったのだが

「実際はあんなのもんなあ。」

苦笑と共に感想がでる。

「さて、と、どうするか。」

数秒ほど逡巡して御坂は携帯の番号をプッシュし始めた。

相手は友人にして情報処理に関して右に出る者はいないとされる情報のエキスパート。同時に風紀委員ジャッジメントでもある人物、初春飾利だ。

「あ、初春さん？急にごめんね。突然だけどちよつと解説を頼める？」

御坂が符丁バスの解説を依頼したちよつとその時。

御坂妹は路地裏にいた。前方からカツカツと足音が聞こえる。

現れたのは1人の少年。

真っ白な髪に血のように赤い目、髪の色とは対称的な黒い服を着た

その名は一方通行最強のレベル5である怪物は

「現在時刻は二時四十八分。第九九八二実験開始まで後一分四秒ですので指定のポイントへの移動をお願いします。」

その言葉に引き裂くような狂った笑みを浮かべた。

同時刻、御坂は送られて来た解読内容を読み、愕然とする。

「…何よ、これ…？」

『「絶対能力者進化実験」概要

学園都市には七人の超能力者（レベル5）が存在するが、『樹形図の設計者』の予測演算の結果絶対能力（レベル6）へ辿り着けるものは第1位一方通行のみと判明した。この被験者に通常のカリキュラムを施した場合絶対能力に到達するには250年もの歳月を要する。我々はこれとは別の方法をとることで時間を大幅に短縮する事に成功した。特定の戦場を用意し、シナリオ通りの戦闘を進め、成長の方向性を操作する。予測演算の結果同超能力者（レベル5）第3位『超電磁砲を一二八種類の戦場を用意し、一二八回殺害する事で実験は成功する事が判明した。しかし、『超電磁砲を複数確保するのは不可能であるため、過去に凍結された彼女のクローン計画』『量産型能力者計画』を利用するものとする。そこで再び演算を行うと武装した二万体のクローン体通称『妹達』を二万通りの戦闘シナリオで処理する事でこの実験は達成する。』

「ハハッ、こんな事有り得ないわ。こんな計画実現できる訳……」

力ない笑いが込み上げ、唐突に先程の御坂妹の言葉がよみがえる。

「さようなら。」

と彼女は言った。

あれは本当に別れだったのだ。

御坂は唇を噛み締め、報告の最後に添付されていた実験場所の座標を見つめる。

『絶対座標 X - 1 6 2 2 5 8 Y - 4 1 5 6 8 7』

一度空を見上げ、御坂は走り出した。

同じ頃、御坂が目指している座標に向かって疾走している1人の男がいた。

普段の彼を知る者なら想像がつかないだろうほどに厳しい表情。

「くそつ、気付いたか。早めにケリを付けて置くべきだった……」

怒りを滲ませながら吐き捨てる。

その人物の名は矢桐言波。学園都市至上最低にして最悪の研究計画『オーバーアウト
複合能力強化実験計画』の生き残りにして成功例。

彼もまた元々は『閻』の住人。地獄の底を知る者。そして逃亡者。

だが、今度は逃げる訳には行かない。自らに架せられた因果の鎖を
引きちぎる為に、

「絶対に終わらせる……これ以上のさばらせてたまるか。待つて
るよ、薄汚い闇共。俺は何度でも叩き潰す。」

とある論理の殺戮狂行（前書き）

意外にもなかなか早めに書き上げられました。内容は……気にしたら負けです。

とある論理の殺戮狂行

ガン！何かが炸裂する音が辺りに響く。

夜間に紛れた操車場では怪物の一方的な殺戮が始まっていた。

「ギャツハハハハハハハハアア！おらおらどうしたア！逃
げねエと死ンじまうぞオ！」

一方通行が足で地面を踏みしめる度に石がまるでショットガンのよ
うに御坂妹を襲う。

「あッ、ガッ！」

石の散弾を全身に浴びて地に倒れる血まみれの少女。

その様子を見てもなお、怪物は攻撃を止める事は無い。

もう人間の心など捨て去ってしまったのだろうか？

「どオやらそこまでみてエだなア。そろそろ終いにすンぞ？」

その頃、御坂は絶対座標を頼りに向かった場所で壊れた暗視ゴーグ
ルを手にした所で、轟音に気付き更に走り出した。

「一体何がどうなってんのよ……？」

その問いに答えを返す者はいない。

一体自分はどうしたいのか？

自分のクローンの存在を知った時、正直気味が悪いと思った。少なくとも友好的な感情を抱かなかったのは事実だ。

……だが

今日1日共に行動して分かった事がある。

それは彼女達も1人1人の“人間”であると言う事だ。

確かに表情は乏しい。何を考えているのかも分からない。

けれども - -

アイスを食べている時は美味しそうに食べていた。

紅茶を飲んでいた時も、味に満足していたようだった。

あくまでもそれはようだったに過ぎない。

本当は何も感じていないのかも知れない。

それでも御坂には彼女達をただの作り物クローンには見えなかった。

奇妙な話、本当の妹のようにも見えた。

だから、御坂は走る。

彼女達を『妹達シスターズ』をむざむざ実験と言うふざけたものの犠牲にするものか。

決心は決まった。

実験は止める。

超能力者（レベル5）の第3位。最強の電撃使い（エレクトロマス
ター）にして常盤台のエース。

肩書きの1つをとってもそれは圧倒的な力を示す象徴だ。

その力を振るえば、実験を潰すのも容易い筈だ。

しかし、相手は第1位。最強の能力者アクセラレータ一方通行。

真正銘の化け物に一般の常識が通用する訳がなかったのだ。

御坂は見てしまった。

正に先ほどまで一緒にいた妹が目の前で殺されたのを。

目の前で操車場に無造作に積みまれてあったコンテナが浮かび上がり、
そして妹を押しつぶした。命の価値に反比例して、異常な程あっさ
りと死を見せつける。

コンテナと地面との隙間から微かに流れ出す赤色を認識して

「う、ああアアアアアアああああアア！！！！」

憤怒、悲哀、無念、あらゆる負の感情が爆発した。

狂ったように叫び声を上げ、一方通行アクセラレータに向かって駆け出す。

数億ボルトもの青い雷光の槍が空気を切り裂き、四方八方に飛び散
る。

ガガガガガガガアアン！！

強烈な電気エネルギーの炸裂に、独特なオゾン臭が満ち満ちる。

まるで、空爆でも起こったかのように破壊の爪痕を残し、帯電したレールがバチバチと火花を散らした。

しかし、これほどの惨状を前にしても一方通行は小さく眉を動かした。ただし、アクセラレータ。

「ンダア？まだ残ってやがったか？」

ぼそりと一言だけ呟く。

「.....!!!」

最早言葉にならないほど怒りに満ちた声を迸らせる御坂。

その周りでゾワリと黒いものが生き物のように蠢き、爪のような形を為す。

「ハハッ、すげえすげえ新技かア？」

何でも無いように話すその姿が砂鉄の竜巻に飲み込まれる。ただ砂鉄を操作している訳ではない。

一粒一粒がチェンソーのように高速振動しているそれはかすっただけでも十分な脅威だ。

それが逃げ道を潰し、包み込むように展開されているのだから全身を細切れにされて血と肉をばらまく事になるはずだ。

だが、

「ふうん、磁力で砂鉄を操ってんのか。面白エ使い方だな。――まアタネが割れりゃあどってことねエがな。」

聞こえる筈が無い声が聞こえた。

同時に包み込んでいた砂鉄に亀裂が入り、風に溶けるように流れて行く。

有り得ない状況なのだが、極度の興奮状態に陥り、冷静な判断能力を失っている御坂は今度は磁力を周りのレールに使用した。

バキンと次々にボルトが外れ、無数の鉄の塊が宙に浮く。

そこで初めて一方通行アクセラレータの表情に訝しむような色が現れた。

「お前……」

空中で束ねられたレールアクセラレータが一方通行を追うように次々と地面に突き刺さる。

だが、直後。

ガアアン!!!

一際巨大な音と共にレールが弾き飛ばされた。

当然。

一方通行アクセラレータにそのような攻撃が通用するはずもない。

確かに御坂美琴は強い。最強の電撃使い（エレクトロマスター）に恥じない力を持っている。だが、それでも学園都市最強には叶わない。

彼女の序列は3位。

一般論で言えば、かなりの高位に位置するだろう。

それは即ち学園都市280万人の中で3番目に優秀だという事だからだ。

だとしても1位ではない。上には上がいる。そもそも超能力者（レベル5）の序列は戦闘能力や、演算能力の高さで決まるものではない。

基準は能力応用が生み出す利益だ。

力の強さは関係無い。そうなのだが、それでも1位の力は圧倒的だった。

少なくとも頂点に君臨するには充分過ぎる程に。

御坂は言葉を失った。一気に興奮状態から冷めあがる。それは冷静さを取り戻したというよりは恐怖により無理やり冷めさせられたと言った方が正しい。

頂点とはたった2位の違いしか無い。

それなのに遠過ぎる。

太刀打ちなど出来るはずも無い。

絶対的に負けは決まっている。

「そうかそうか、予定と大分違うからおかしいと思っただがお前オリジナルかア。」

ニタリと実に楽しそうに笑みを浮かべる。
友好的な笑みではなく邪悪極まりない狂笑。

その表情を見た瞬間、御坂の全身から力が抜けた。

「クローン共はオリジナルの変わりつてこたアだ。テメエとやれば、このだりイ作業もぐつと短縮できんだろオ？いい加減飽き飽きしてたんだ。頼むぜエオリジナル。」

ジャリつと地を踏みしめ、人の形をした災害がゆっくりと近づく。

恐怖を浮かべるその顔を、その表情をも楽しむようにゆっくりとだが確実に『死』その物が接近する。
一步、更に一步。

さながら死刑執行までのカウントダウンだ。

腕を広げて前に突き出す アクセラレータ 一方通行。

それだけで処刑の準備は整った。

後は触れられるだけで御坂の体は全身の血液と生体電気を逆流させられ、内臓も何もかも根こそぎ爆発する。

「あ……う……」

涙も出ない、声も出ない。

本物の死の感覚にすべてが麻痺する。

数秒後には無残な死体がもう1つ転がっているだろう。

直後。

ドゴオオン！！

爆音が轟いた。

それは一方通行アクセラレータの足下が粉碎された音だった。

「ああ？ンダア？次から次へとうつとオしい。」

明らかに死んでもおかしく無いほどの爆発アクセラレータだったが、傷1つ無

い姿で爆風を切り裂き不快そうに現れる一方通行アクセラレータ。

「そこまでだ、一方通行」

声は頭上から聞こえた。

闇に溶け込むようにコンテナの上に立つ人物。

一方通行アクセラレータはただただイラついたように見ているが

御坂美琴の反応は違った。驚愕に目が見開かれる。何故なら現れたのは良く知っている人物だったからだ。

右手に不思議な力を持つ少年といつも一緒に行動している彼。

矢桐言波が『闇』を背負って立っていた。「あんた……どうして……？」
その問いには答えず、ただ無機質にその目は一方通行のみを捉えている。

「なんなんですかア？ テメエはア？ 気にいらねエなア。部外者がこのこ入りこんでんじゃねエよ。」

「……1つだけ答えよう。俺は部外者ではない。俺にはこの実験を止める責任があり、義務がある。」

「あア？ 何訳分かんねエ事……」

その言葉を遮るように言波はある単語を口にした。

「複合能力強化実験計画。……それだけで充分だろう。」《複合能力強化実験計画》

それは学園都市に数多存在するプロジェクトの中で、最も非人道的な研究だったと言われる。

置き去り（チャイルドエラー）と呼ばれる孤児を使用して、活動していた研究所『多目的能力特殊応用研究所』にて行われた非人道的な実験。

学園都市史上最も多大な犠牲を払った研究。しかし同時に最も成果を収めた研究でもあった。

この実験により開発された成功例は8名。

数だけ見れば決して成功率が高いとは言えない。犠牲者の数はその軽く10数倍以上にも上るのだから。

しかし、8人が得た能力の価値を見ればそれらを補って余り有る。

当時は研究者達にこう評された。曰わく『彼ら全てを手中に収める者がいたら、その者は世界をねじ曲げるどころか何度でも世界を作り替える事が出来るだろう。』と。

更に多大な犠牲と引き換えに多大な成果を手に入れたこのプロジェクトこそ、絶対能力進化実験（レベル6シフト）の前身。

数多くの惨劇を起こし、怪物を生み出そうとしている実験の前の姿。

アクセラレータ
一方通行はそれを聞いて嘲るように笑った。

「ハッ！こいつアすげエ！てことはお前あの8人の成功例の1人か。そいつが今更何をしようってんだ？罪滅ぼしのつもりか？お前の手はどうしようもねエ位血まみれだぜエ！過去の行いは精算できねエ！もう戻れやしねエンだよ！！この偽善野郎オがア！！！！！」

「……分かってるさ。確かに俺は、軍事戦力として学園都市に敵対するあらゆる組織と戦って来た。潰した命も数え切れない。その事は否定はしない。お前の言うとおり俺の手は血にまみれているよ。」

だが、と言波は一言置き

「だからこそ終わらせるんだ。こんな事したって過去は消えない、過ぎた時間は取り戻せない。何かが変わるとも思っていない。罪滅ぼしの為にやっているんじゃない！それは所詮自分の為だ！……あ

の時、俺は決めた。重い拳で打ち抜かれたあの時。例え望まれずとも、自分の手が届くのなら必ず守り抜くと！！」

そして一方通行を見つめる。その目は先ほどの無機質なものと違い、確かに感情の色があった。

「いいか一方通行今日はここで引け。目的は果たした筈だ。」

「これ以上無駄な戦闘をするなら……」

一瞬の間の後

「……ここで俺がテメエを殺す。」

ゾワツと言波の纏う空気が変わる。それはどこまでも深く、暗く、冷たい。

『死』の感触。

「ちイツ！……まあいい。興も冷めちまったしなあ。ここらで引いてやるよ。」

そう言った直後、目の前の一方通行の姿が瞬時にかき消える。

遙か向こうで微かにトンツ、トンツ、と地面を叩く音がしていたがやがてそれも消えた。

「あんだ……何者？……複合能力強化実験って何？8人？軍事戦力

?……もう訳分かんない。」

頭を抱えながら御坂はズルズルと地面に腰を落とす。

パニック状態なのだ。無理も無い。

今まで自分が住んでいた場所とはまるで異なった世界をこつとも一気に見せつけられたらそうもなるだろう。

言波はしばらく無言だったが、意を決したように話し始めた。

実験を、アクセラレータ一方通行の正体を、この街の裏の姿を。

- - -そして

自らの事を。

言波は敢えて語る。自らが背負う十字架がどれほど重いものなのか。自らがどれだけ汚れた存在なのか。

口汚く罵られようとも構わない。

殺されたとしても文句は言つまい。

全ての責任は実験の最後の生き残りである自分にあるのだから。

とある論理の自己証明（前書き）

少し短め。次回は殆どバトル中心になると思います。

とある論理の自己証明

「信じられない……」

全てを聞いた御坂の第一声がそれだ。

力無く座り込み、声にも何時もの覇気が無い。

「これが真実だ。そしてこれが本当の俺だ。あの一方通行と同じ血にまみれた闇の住人。」

「恐ろしいだろう?」

それは自らを嫌悪する問い。

「この件は俺がけりをつける。お前はお前の日常へ戻れ。何もかも忘れて、光の世界で楽しく生きる。お前にはそちらが似合っている。」

口調さえも、一切の感情を捨ててただ淡々と言葉を紡ぎ出す。

「時間が時間だ。今日は俺が送る。」

「ちよっ! まっ . . . !」

何かを言う前に、能力を使用して常盤台の寮まで転送する。

後に残ったのは奇妙な静寂と、虚無感のみだ。

スツと一度言波は祈るように目を閉じ、そして開いた。

そこにいるのはもう矢桐言波では無い。

彼はもう存在しない。

時は3年前に戻った。

言われるがままに、数多くの命を奪っていたあの頃に。

其処にいるのはオリジナル・チルドレン（8人の最高傑作）の最後の生き残り。最優にして最強。ロストナンバー番外戦力、闇に染まりきった殺人者だ。

彼は身を翻し、深遠に踏み込む為^レに駆け出した。

向かうのは絶対能力者進化（レベル6シフト）実験関連施設。

悉くを跡形も無く、叩き壊せば実験を止めざるを得ない。

少なくとも凍結はするだろう。

やらねばならない事は滞積している。

この実験は成功させてはならない。2万もの命の上にふんぞり返って利益を貪るような外道共に成功を与えては行けない。

言波は絶大なる怒りで歯を食いしばる。

直後その体が超高速で空に舞い上がった。

大気の向きを掌握し、気流を操作する。

常人ならばまず頭の血管が引きちぎれるような演算でも、言波なら呼吸をするように容易い。

最早その体は弾丸のように夜空を裂いて、突き進む。

同日、品雨大学付属研究所及びバイオ医療研究局他5箇所もの研究機関が謎の爆発事故により全壊した。

「う……………?」

翌日御坂は学校の寮で目を覚ました。

見渡してみれば変わらない部屋、変わらない壁、変わらない天井。
そして

「おっ姉さまあああああ!!!」

相も変わらずの変態後輩。

抱きついてくるその後輩に何時もなら電撃を見舞うところだが、そういう気分ではない。

「おはよう、テーブル飛び越えたら危ないわよ。」

普通なら有り得ない応答に、後輩白井黒子も若干の違和感を感じたようだ。

別に電撃を食らいたい訳ではないが、それが毎日の事なら逆に無い方が不自然なのだ。

「…………お姉さま？」

白井は早々に身支度をして部屋を出た御坂の背中を見て、怪訝な咳きを漏らした。

「ふ……………」

長い長い溜め息をつきながら、全身を襲う脱力感と鈍痛により自宅ベッドの上で言波はぐったりしていた。

長時間に渡っての能力使用による副作用のようなものだ。

しかし、この程度ですんでいるだけまだましだ。と言波は思う。

昔は全身から血を吹き出し死にかけたことも有る。

それに比べれば動ける分遙かにましだ。そして動けるうちに来るだけ破壊は進めて置かなければならない。まだ施設は無数にある。こんなところでくたばっている場合ではないのだ。

勝負は今夜。今日主要な研究機関を全て潰す。大元を叩けば後は自然に崩壊していく。根がなければ木が育たないのと同じだ。

体力を少しでも回復させる為に言波は深い眠りについた。

~~~~~

言波が眠りについた時と同時刻。

学生達が行き交う早朝の学園都市に朝日の光を受けて御坂は佇んでいた。

その顔は疲労と焦燥が色濃く張り付いている。

『シスターズ  
妹達』 - - -

彼女達が造られた理由。それは全て御坂に原因があった。

彼女は過去にDNAマップを提供した事が有る。筋ジストロフィー患者の治療法の開発のために、本来の神経系とは別ルートで生態電気を流す事が出来れば、一気に改善出来ると言われたからだ。

その言葉の通りに彼女は従った。

自分の力で多くの命が救えるのなら、素晴らしい事だと思ったから。それが最初からクローンを作る為だったのか、それとも本当に治療法の研究をしようとして、歪曲した先に行き着いたのか今はもう分からないが、その現実に御坂は耐える事が出来ない。

自分のせいで二万もの命が犠牲になっている今の状況を知りながら、ののうと日常生活を楽しむことなど出来る訳が無い。

「私……最低だ……」

彼は矢桐言波は関わるなと言った。  
お前の日常に戻れと言った。  
しかし、それが赦されるのか？  
答えは当然NOだ。

真実を知りながら、見てみぬ振りをする程御坂は腐っていない。

「私が・・・私がやらなきゃ。」

ぐっと唇を噛み締めて、覚悟を決める。

恐らくは二度と元の生活に戻る事は出来ないだろう。

十二分に理解した上での決意だ。

ピッ、ピピッと電子音を響かせ、御坂はPDAを操作する。

画面に表示されているのはある研究機関のデータ。

それを全て記憶し、御坂は行動を開始する。

時刻はとうに真夜中。人の気配等はどこにも無い。

だが、今もあの実験は行われ、またあの子達が殺されているのだろ  
うと思つと、胸が激しく痛む。

拳を強く握りしめ、闇を駆け抜けていく。

ヒュツとその姿が消えた。磁力を使い、最短ルートを進んでいるのだ。

やがて、前方に巨大な建造物が見えてきた。

パリリツと微かに電気が閃き、ゲートが開かれる。電撃使い（エレクトロマスター）に取って電氣的なセキュリティは何も意味を為さない。

しかし、ここに来て1つの違和感が脳裏を掠める。

余りにもスムーズに事が運び過ぎていないか？

幾つかの研究所は以前、原因不明の爆発事故により運行が停止されている。

だが、それは面向きで実際は謎の襲撃を受けて破壊されたのだということを御坂はハッキングしたデータを見て知っている。

そして、恐らくはその襲撃者の正体も。

だからこそ、何の警備もされていないセキュリティとは名ばかりで中身はスカスカナこの状況を見て、奇妙だと感じたのだ。

襲撃に備えて武装した警備チームが居てもおかしくは無い。

寧ろ、それも考慮に入れていたのだが……

だが、御坂にはじっくりと考える余裕は無かった。

突如その頭上がシュツと音を立ててバラバラに崩れてきたのだ。

鉄骨の雨が容赦なく彼女を襲う。

そして、その数メートル程先の暗がりで見えなから一人の少女イレギュラーが手に何かのツールを携え、ニヤリと笑っていた。

天井が崩れたのはこの少女の仕業だろう。  
だとすると何者だ。

ここの研究内容はいわばトップシークレット極秘事項。

間違いなく一般人が知り得る内容ではない。

恐らく彼女もまた『闇』の一員なのだろう。

ガラガラと鉄骨が崩れた後に、御坂が無傷で立っていた。

磁力で瓦礫の軌道をずらしたのだ。

「……やっぱりそう簡単に行くわけないわよね。」

半ば、自暴自棄気味にそれでいて想定内の出来事に御坂は軽く溜め息を吐いた。

そして気付く。何時の間にか自分が、白いテープのようなものに囲まれた中心にいるのを。

当然、ただのテープでは無い筈だ。

その考察に答えるように火花の線がテープに沿うようにこちらへ走

ってくる。

そしてそのテープの先にはぬいぐるみがあった。

火花がそのぬいぐるみに付着すると同時に、ドンツと爆発する。

「爆弾ツ……!？」

間一髪で免れた御坂の額に冷や汗が一筋流れる。

脅しても何でもない殺すための破壊。

本物の殺意が一方通行に出会った記憶を呼び起こす。

震える脚を無理やりに押さえ込んで火花が走ってきた方向を睨むと、正に1人の金髪の少女が階段を駆け上っている所だった。

「おっしーい、後少しだったのに結局ミスっちゃったわ。」

大して残念そうな口調ではなく、寧ろどうやっていたぶっていかうか楽しむような感覚で少女は言った。

「どこの誰だか知らないけど、計画に加担しているならただじゃすまないわよ。」

金髪少女は確かに『闇』の人間だ。

彼女が所属している組織の名は『アイテム』学園都市の不穏分子の削除を主任務とする小規模な非合法部隊。俗にいう暗部だ。更にア



アイテムはその暗部のなかでも実力、権力は上位にある。

容易に攻略出来る相手達ではない。

そしてこの少女の名はフレンダ「セイヴェルン。爆発物のスペシャリストにして近接戦も得意とする厄介な人物。

ここで『アイテム』対『超電磁砲<sup>レールガン</sup>』の戦いが幕を開けた。紫電と爆炎が交錯し、建物自体が大きく軋む。

だが、所詮はただの爆弾。

1人で軍隊も相手に出来るレベル5の、更に3位に位置する御坂の敵ではない。

僅かに油断していた。自分の力を過信していた御坂はまだまだ未熟といえよう。

戦場では力があるのが、必ず有利であるとは限らない。1つの戦術で逆転されることも大いに有り得る。

御坂はそれを間もなく思い知らされる事になる。

## とある論理の強制制圧（前書き）

ああもう、全然書きたいように書けない。全般通して低クオリティです。

## とある論理の強行制圧

「全く一体幾つ仕掛けてんのよ。」

右手に見える爆弾を無力化しながら、御坂は呆れたように呟いた。

今ので、無力化した爆弾は少なくとも10は越えた筈だ。

電磁波によつて空間情報を完全に把握出来る御坂に取つて爆弾その物はたいして脅威ではない。

だが、それも限度がある。防ぐ事が不可能な訳では無いがそもそもが爆発物。

殺傷能力は充分にあるし、数で押し切られたら防御その物も難しい。

そして、また更に御坂は爆弾を感知した。

爆発するその前に、磁力を使って金属を引き寄せ即席の楯にする。

しかし、楯に使用していた鉄骨から音が聞こえた。

より正確にはカチカチと時計が針を動かすような音が。

この状況下で、時間を刻むような音が聞こえたらその正体も想像に難く無い。

「……！」

とっさにその鉄骨を投擲した直後に爆発し、爆風をまともに浴びた

御坂は数メートル程吹きとんだ。

「くっ……」

更に、その先。

「囲まれている……!?」

御坂の前後左右を固めるように設置された爆弾に火花が点火された。

「くそっ！」

突如その体が後ろ向きに不自然に加速した。

後を追うように爆発が連鎖する。

ダアンツッ!!

その体は壁にぶつかって止まった。

「ぐっ……磁力を最大にした緊急回避。ダメージデカいから使いたく無かったけど……」

それでも爆弾を受けるダメージに比べれば、遥かにましだろう。あの熱量をまともに喰らったら命も危ない。

「だが、それよりもあいつは？」

金髪少女を探すために四方に目をやる。

これほど正確に爆発させている所から考えるにそう遠くにはいない

だろう。

更に言えば、こちらの位置を常に特定出来るような場所。

例えば高所。

「見つけたわよ！」

いた。今正に二階への階段を上っているその少女を。イヤ、『アイテム』構成員フレンド・セイヴェルン。

「あら、見つかったちゃった？」

馬鹿にするような口調で、階段を駆け上がる。

電撃を放つても鉄骨が邪魔で当たらない。

直接、行くしかないだろう。

そう判断した御坂は走る。

「逃がすかッ！！直接の関係者が雇われのエンジニアトか知らないけど……」

脳裏にあの惨状がよぎる。血まみれの空間に佇む白い悪魔アクセラレータ一方通行。

「……こんな形で、実験に加担するようなヤツは許さない。」

「うわスッゴい形相、捕まったら八つ裂きにされちゃうかも。」

と言いつつも御坂が階段を駆け上がるのを見ると

「なぐぐんちゃって」

シュツと何かがこすれるような音と同時に今御坂が上っていた階段がバラバラに崩れていく。

「にじしし この高さでも打ちどころが悪ければ……」

優越感に浸りながら、下を見たその言葉が不意に止まった。

「あれ……?」

「私を落としたいなら鉄分を抜いて施設ごと立て直して置くべき立ったわね。」

磁力で階段の破片を集め、空中に留まる御坂。

それはつまり、鉄分がある限りこのような罫は通用しないということだ。

「ナニそれ、ズッルッ」

どちらかと言えばフレンドの方が、よっぽど姑息な手を使っていたのだが今の彼女にはそんな物を考える余裕など無かった。ただひたすらに、逃げる為に走る。

単純に考えて見ると、先ほどの磁力。あれほどの鉄骨を繋げるパワー。

まず間違い無くレベル4はあるだろう。

そんな高位能力者に勝てる訳が無い。

意地を貫いて、こちらがやられるなんてお笑い草だ。

安いプライドなんかより、自分の身の方が大事。

フレンダはそんな価値観の持ち主だった。

しかし、ただ単純に逃げているだけでは無い。

そこは彼女とてプロだ。何もせずして退避などはしない。

まあ、ここで逃げ出したら成功報酬が0になるという極めて俗っぽい理由がその行動原理の大半を占めているのだが。

彼女が入っていったのは1つの部屋。

というより何かの格納庫と言った方がいいだろうか。

「ただ単に慌てて逃げ込んだのかしら？それとも……」

その言葉にフレンダは薄い笑いを浮かべ自嘲するように

「結局ここまで追い込まれるとは思わなかったわ。」

だが、それは勿論自嘲ではない。焦りでも好奇の笑みでも無く、ただ有るのは自信から来る絶対の勝利を確信した笑み。

「……一体何の為に働いてんのか分かんないけど、この研究所はね  
……」

「ああ、いいっていいってそういうの。何の為に働いてその結果どうなるのが、結局どうでもいい訳よ。」

言葉を途中で遮り、未だ笑みを浮かべたまま言い放つ。

それもそのはず、彼女にとってそんなことは些末な物だ。

大事なものは仕事を成功した際の報酬。

それさえ貰えれば、後はどうでもいい。

つまる所、人間がかなり狭い人物なのだ。

「それと、私を追い込んだ気になっているみたいだけど……」

バシユン！

言葉と同時に、天井部分が開き、大量のぬいぐるみが降って来る。言わずもがな爆弾だ。

ここまで、徹底して畏を仕掛けるその周到さは流石はプロだと感心せざるを得ない。

どんなに姑息で、どこまでも現実主義と言っても伊達や酔狂で暗部などやってはいない。

幾つも修羅場をくぐり抜けてきたのは紛れもない事実なのだから。

「……結局追い詰めた気になって実は自分が追い詰められていたってのはよく有るパターンな訳よ。」



圧倒的優勢。

これ以外の言葉で、今の状況を説明できようか？

周りには無数の爆弾。

身を守れそうな手頃な金属は無い。

更にいえば、入り口も爆破で閉じた。

つまり、退路も無い。

後は、下に引いてあるテープに着火装置を押し付けるだけ。

それだけで、全てが終わる。

だが、フレンダは1つ見落としている。

致命的なミス。それは御坂を見くびった事。高位能力者であろう事は目星は付けていた。

しかし、御坂はレベル4等ではない。彼女はそれを遥かに超越したレベル5。

そして、最強の電撃使い（エレクトロマスター）の力を持ってすれば地面を磁力で持ち上げてテープその物を断ち切ることも可能。

ブチィッ

テープが引きちぎれるような音を聞いて、フレンダは動揺を隠せない。

『なっ！地面を磁力で持ち上げた？』

そして気付く。

『ま…まさか、こいつレベル5クラスの能力者！？』

「さーで、何でも知っている情報洗いざらい吐いて貰うわよ。」

終わった。後はこいつから情報を聞き出すだけだ。

御坂は素直にそう思った。

畏はもう無いようだし、今からだと細工をする時間も無い。

そしてそんな時間を与える気も毛頭ない。

しかし、そこで御坂は気付くべきだった。

フレンドの手が微かに動いたのを。

彼女は爆発物のスペシャリスト。

能力に頼らず、爆弾とトラップで任務をこなす。

ならば、

常に爆発物を手元に仕込んでいたとしても何ら不思議では無いことに。

ヒュッと手首のスナップを聞かせて放られたのは何かの液体が入っ

た小瓶。

とっさに電撃で撃ち落とすとやはり、爆発した。それもかなりの破壊力。

御坂は爆炎に煽られて、一瞬視力を失った。

「うっ……、く、まだこんな物を持ってたなんて……？」  
周りに何かガスのような物が充満している。

見ると、フレンドが何かバルブのような物を回していた。どうやらこのガスはそこから出ているようだ。

「学園都市特性の気体爆薬『イグニス』これは人体には影響はないけど、放出後一瞬で拡散して空気中に満たされる。要するに今、この部屋は1つの巨大な爆弾になってるって訳よ。さっきのビンであるの威力。電気なんて使ったらどうなるか……」

バンツと地面を踏みしめ、そのままの勢いで蹴りを出す。

とっさに手でガードするが、勢いに押されて弾かれた。

「つつ、」

電気は問題外。金属を操るつにも摩擦が危険。電磁波も物によっては火花が出る。つまり、御坂はその能力を全て封じられたのも同然の状況。

格闘戦では明らかにあちらに分があるが、それしか方法は無い。

「ぐっ……」

続け様に放たれる蹴りをどうにか耐えて、体勢を整えようとするが背後に移動していたフレンドによって髪を掴まれて投げられた。

「ぐあっ！……」

そのまま地面に叩きつけられ、一瞬呼吸が止まる。

「うっ、ぐう……」

防戦一方の御坂。嫌、本当に防戦になっているのかも疑わしい。

辛うじて受け流してはいるように見えるが、細かい攻撃は入っている。そしてその細かい攻撃によるダメージは確実に蓄積され、体力を奪っていく。

「ハア、ハア……」

「なかなか粘るじゃない。もうちょっと遊びたかったけど、麦野が来る前に終わらせないとね。」

そしてカツンと軽く靴を地面に叩き付けると、かかとの部分から刃がせり出す。

先端に液体のような物が光っているのを見ると恐らくは毒でも塗っているのだろう。しかもかなりの致死性を持つ猛毒でほぼ間違いないはずだ。

「さっきあなたに何の為に働いてその結果どうなるのが興味は無いっていったけど止めを刺す時だけはちょっと感慨深い物があるわね。」

「命を摘む正にその瞬間、私は相手の運命を支配した気分になるの。」

結局・・・」

凶悪な笑みを浮かべ、実に愉快そうに優越感を漂わせながら言う。

「・・・こいつは私に殺される為に生まれてきたんだ…ってね。」

「それじゃあ最後にいい感じの悲鳴を聞かせてちょうだい！」

体を反転させ、そのままの速度でかかとの刃を突き出す。

・・・直後

ガッ、

その足が止まった。

というより止められた。

誰かが掴んでいる。

より正確に言えば少年、矢桐言波の右手によって。

「はあ、だから関わるなと言ったのに。」

そして言波は呆れたように呟いた。

「あんだ何なのよ。急に現れてピンチを救う？ヒーロー気取りって訳？」

足を掴まれたままのフレンドが、憎々しげに言い放つ。

良いところで邪魔をされた。彼女に取ってはそれだけで不愉快な事なのだ。

それでも言波はその言葉を無視して御坂の方に向き直る。

「……ダメージ量が相当あるな？今日は帰れ。そして金輪際首を突っ込むな、あれほど関わるなと言ったのに死にたいのか。」

そのまま外に転移させる。言い分など聞く気は無い。

そちらの方がはるかに安全なのだから。

「なっ……！！あんた何したの!？」

「ただ外に逃がしたただけだが？」

淡々と語るその口調に若干気味悪さを感じたが、大した脅威に成りうる相手では無いと判断したフレンドはまず目の前の障害を排除する事に決めた。

即ち矢桐言波を。

フレンドは完全に見くびっていた。

彼の力を。彼自身を。

大した脅威に成らない？その時点で間違っている。

「ふん、まあいいわ。あんたをぶっ殺した後であいつも始末させて貰う訳よ。」

「出来ると思うのか？お前如きが俺を殺す？ハッ、寝言は寝ていえクソガキが。」

口調が変わった。暴力的な色が見える。

これが3年前の彼。

冷酷な戦闘兵器は再び牙を向いた。

## とある論理の凶刃暴虐（前書き）

出来たんで、投稿します。内容の方はまあ、ね？ははっ……



## とある論理の凶刃暴虐

「フッ！」

短く息を吐いて蹴りを繰り出す。

非常に鋭いその一撃はまるでギロチンのように、フレンドを襲った。「うわつとお！！」

間一髪でその場にしゃがんでやり過ぎすフレンド。

その頭上を通過した足は彼女の髪の毛を数本ほど切断した。

（んなっ！なんて蹴りよ。まるで刀じゃない。）

はらはらと落ちて来る髪の毛を見て、一気に青ざめる。

もしかしたら自分ほとんどもない貧乏くじを引いたんじゃないか。

かなり後悔するが今更だ。

追い討ちをかけるように眼前に拳が迫る。

それを後ろに転がってどうにか回避した。

あの空気が裂けるような音から考えるにその威力が、洒落では済まされない事は分かる。

「ふうん、思ったより使えるな。普通なら、首の骨が折れた上に頭蓋が砕けてる筈なんだが……」

ボソリと呟くその言葉。

普通じゃない……！！

フレンダは本能的な恐怖を感じた。  
ゾツと背筋が粟立つ。

コイツは違う。自分も闇に属する人間だが、目の前のコイツは違う。  
外れている……。何よりも誰よりも。

躊躇い無く殺そうとした事がではない。  
そんな物は自分だって同じだ。殺す事に抵抗は無い。一種のスリル  
すらも感じるぐらいだ。

……だが、この男は異質だ。殺しに何も感じていない。悲しみも無  
ければ、愉悦も無い。

行動の真ん中に核となるべき感情が存在していない。嬉々として殺  
しを行う者も恐ろしいと言えは恐ろしい。

が、まだ分かりやすい感情がある分付け入る隙はいくらでもあるし、  
心理戦に持ち込む事も不可能じゃない筈だ。

だが、コイツは異常だ。行動が読めない。まるで考えている事が分  
からない上に淡々と仕事をこなすその姿は意志を持って動いている  
と言うよりは無感動に作業を行っていると言った方が近いかも知れ  
ない。

勝てない、勝てる訳が無い……。

強さがどうか力の差がどうかそんな物理的な面は一切関係なく、  
どこか遠い所、手が届かないどうしようも無く深い所から次元が違  
うのだ。

それでも一縷の望みを掛けて絞り出すような声で“賭”に出た。  
「と、止まりなさいよ！あんた周りの煙が何だか分かってんの？爆薬よ。そんな動き回って火花の1つでも出して見なさい。木っ端微塵よ。」

事前に種を蒔いて置いて正解だった。

ピタリと止まった姿を見て、賭に勝ったと確信した彼女は大きく息を吐く。

「ふふふ、これであんたは下手に動けない。

正に袋の鼠って訳よ！」

「はあ、……」

小さく溜め息をつく声が聞こえた。

そこで怪訝に思っ立止まったのは賢明だ。

突如・・・ヒュンツと空気を裂くような音が連なって聞こえそして……周りに漂っていた煙、その全てが切り裂かれた。

そのまま近付いていれば、今頃バラバラの惨殺死体が転がっていただろう。

「で？周りに何があるって？」

「なっ！……」最後の切り札が、捨てられた。

流れていたのは実はただの窒素ガスだ。  
どれだけ動こうとも爆発などはしない。

心理戦としては初歩的だが、敢えて最後の最後に披露する事で信じさせる。

一番最後に出す事で相手は勝手に奥の手だと思い込むからだ。それが、通用しない。

「どうした？いつまで呆けていやがる？……本当に死ぬぞ。」

何時の間にか言波が前方数センチ程先まで移動していた。

顔が触れ合うように近い位置から、明確な殺意がフレンドの体に突き刺さる。

「ひっ、」

引きつった声は自分の喉から出ていた。

腕を掴まれ、そして

「吹っ飛べー!!」

ブンと力の限り投げ飛ばされ、そのまま壁に叩きつけられる。

「あ……ぐ……」

全身を強かに打ちつけ、肺から空気が全て出ていった。

「う……ゲホ、ゴホッ！グッ……」

更にそのまま言波は喉元を掴んでグイッと引き上げる。

「あつ…うぐつ…！」

自然、体重の全てを首もとで支える事になり、呼吸さえままならぬい。

バタバタともがこうとまるで万力に挟まれているように微動だにしない。

「さて、と。終わりだな。知っている情報を全て吐くってんなら殺しはしない。もし拒むんならかなり残酷な死体を御披露目することになるが、……どうする？尤も選ぶのはお前だ。生きるか死ぬか好きな方を選ぶ。」

そして引き上げていた手を放して、フレンダを解放した。

ズルズルと壁に沿って床にへたり込み咳き込みながら、息を吸おうと喘いでいるその姿を上から見下ろし告げる。

「決断は早くしろ。時間は無いんだ。何も話さないなら、ここで殺す。」

そしてまたヒュンと空気を打つような音が響き、近くにあった壁に横一文字に亀裂が走った。

「5秒だ。早く答えないと切り刻むぞ。」

今し方その威力を十二分に見せ付けて反応を促す。

だが、彼女は答えない。というよりも答えられない。

先程の壁に叩きつけられたダメージがまだ消えておらず、正直な話

動くのもきついくらいだ。

だが、言波はそれを反抗の意と捉えた。

「情報は言えないって訳か……。仕事を遂行しようとするプロとしてのプライドはそこそこ見上げたものだが、残念だ。」

明らかに何かを訴えようとしているフレンドの様子にも気が付かず腕を上げた。

彼女はとっくに喋ろうとしている。ただ声が出ないだけだ。

必死の訴えも虚しく、腕が振り下ろされようとした。

そう、されようとした。それは仮定で終わった。

挙げた腕がピタリと止まる。

次の瞬間言波は顔色を変えて後ろへ思いっきり跳んだ。

闇に生きる者が出す特有の気配。膨大な殺気を痛い程感じたからだ。

刹那――

一瞬前まで言波がいた位置を光の線が貫いた。そのまま突き抜けて向こう側の壁を融解する。

爆音が響く中、閃光が飛来してきた場所に開いた大穴から1人の女性、次いで少女が2人出てくる。

「あんまり静かだからやられちゃったのかと思ったけど、間一髪だったみたいねフレンド？」

そう喋る女性が身に纏う空気は明らかに他の者と違っていた。

それはそのまま長い間闇で生きている事を意味する。

更に言えば裏切り、謀略、殺戮が日常茶飯事の裏世界に置いてそれだけ生き延びてきたに相応しい実力を持っているという事だ。

それも納得は行く。

何せこの人物は殊戦闘に置いては圧倒的すぎる破壊力を有しているのだから。

「原子崩し（メルトダウン）の麦野沈利……第4位の登場か。」  
そう、彼女は学園都市の230万人の頂点に君臨する7人のレベル5（超能力者）第4位。

有する能力は、原子崩し（メルトダウン）。

本来『波形』又は『粒子』のどちらかの性質を示す電子を2つの中間にある『曖昧なまま』の状態に固定することで擬似的な壁となつた電子を麦野は強制的に操作出来る。

この能力に障害物は意味を為さない。それごとターゲットを撃ち抜く事が出来るからだ。

「ここで出てくるか？……チツ、厄介だ。」

その眩きを軽く流して

「んで、侵入者ってのはあれ？」

麦野はフレンドに問い掛ける。

「う、うん。気を付けてね。何か妙な能力を使うみたいだから。」

「妙な能力？」

「うん、見えない刃を飛ばすみたいだな。とにかくかなり広範囲に効果があるよ。」

「ふうん……」

その言葉を聞いた瞬間麦野は薄く笑った。そして、何の予備動作もせずに右手から電子線を放つ。

当然の事ながら、光の速さで動くそれを回避することはほぼ不可能だろう。

照準を合わせられたら終わりだと思った方がいい。

1 瞬先の未来を読む。

それしか無い。

言波は原子崩しという能力を知っている。そして有する破壊力も。

電子を操作するという点に置いて根っこの部分では電撃使いと同種の能力だ。

高位の電撃使いならば感知して避ける事も出来るし、その線を曲げる事も出来る。

例えば、先程逃がした御坂美琴。超電磁砲と呼ばれる彼女なら可能な筈だ。



逆に言えば、電子を操作する系統の能力者でなければ難しい。そして、言波はそんな能力は持っていない。

つまりは、どう足掻こうと回避は出来ない筈だ。

少なくとも麦野沈利はそう思っていた。

だからこそ、目の前の異常事態を処理する事は困難だ。

「なっ！……、一体何をしたって言うのよ。」

それは誰がどう見ても起き得ない現象だった。

電子の槍が放たれたその先。

撒き散らされた筈の災厄が無い。破壊が存在しない。

そして何よりも、ターゲットが変わらずそこに立っているという事実。

そこに立っている、それは全く動いていない事を意味する。

つまりは、回避さえしていない。

確かに原子崩しは放たれた。だが、その痕跡が無い。

これが表す事、行動はあったが結果としては見えない。

それはつまり

「私の原子崩しを消し飛ばしたってこと……？」

誰に問い掛ける訳でもなく、自らに問い掛けるようなその呟きは、

その理解不能な現実をどうにかして理解しようとする表れなのかもしれない。  
避ける訳でも無く、（避けたとしてもそれはそれで驚嘆すべきことなのだが）打ち消した。

今更になってこの男の能力に疑問が沸く。  
能力そのものを打ち消す能力なんて聞いた事も無い。

どのカテゴリーにも属さない完全な異分子。  
イレギュラー  
対応策は全く思いつかないが、それでも麦野はニヤリと笑いを浮かべる。

どうやら、これぐらいでは彼女の心を折るに足るほどの材料にはならないようだ。

再度閃光が空間を切り裂いた。  
今度は全部で3発。  
最大連続攻撃数で、放つ。

三条の光が延びて、そして炸裂した。

そう、今度はその威力を十分に証明している。大穴が空いた鉄の壁。爆風は手当たり次第に場を蹂躪する。  
これこそが、本来の原子崩し。

1人で軍隊と戦えると言われるその噂を完璧に肯定する程の力。

事実、一個中隊程度なら10分もあれば全滅させる事が出来るだろう。

全てを蹴散らして、踏み潰す圧倒的な戦闘能力。  
それが原子崩しの真髄。

その目は獲物を狙う狩人の如く、右に回避した言波を睨んでいる。

避けた、それだけでも十分な成果だ。

避けたという事は危険だと判断したからだ。

更に今度は打ち消す事はしなかった。

しなかったのでは無く出来なかったのだろう。

未だに能力は分からない。が、あの憔悴しきっている様子を見ると  
体にかなり負担がかかると見てほぼ間違いでは無い筈だ。

つまり、あの現象はそう多用して起こすことは出来ない。

情報は少ないが、勝機は有る。

全ての情報を統合して、結果付ける。それは彼女の高い勝率をはじ  
き出した。

今度こそ麦野は笑った。傷付いた獲物を噛み千切る寸前の獣のよう  
に獰猛に。

彼女の行動理由はいたってシンプルだ。

ただ自らの敵となる者を叩き潰す。

そして、今この場に置いて言波は立派に敵だ。故に、一切の容赦は

無い。

麦野の手の延長線上に、光が集約し始めた。数本の電子線を束ねて放射する。

当たれば即ち死に直結する。

そして光速で動く物体を回避するのは容易では無い。

少なくとも今の疲弊仕切った言波の状態では到底無理だろう。

全ては一瞬の出来事。辺りには暴虐の嵐が吹き荒れた。これで、終わりだ。

麦野は素直にそう思う。あの状況下で逃げられる奴がいたらそいつは人間では無く化け物だ。

己の能力に対する自信、勝利の確信。 - - - - -しかし、それが慢心。

彼女は知らない。あの一瞬の間に、1000分の1秒の世界で言波がどのような行動をとったのかを。

不意に不自然に空気の流れが変わった。

確かに、原子崩しは凄まじい程の破壊の爪痕を残している。

鉄で出来ている壁はドロドロに溶け、原形をとどめていない。

しかし、言波は未だそこにいた。

奇妙な事に彼の周りにだけは何の損害も無い。まるで、攻撃が全て彼を避けたかのように。



## とある論理の強行手段（前書き）

この話を書き始めて一週間。自己最高執筆速度です！…すいません  
どうでもいいですね。それでは読んで頂けるのならば嬉しいです。

## とある論理の強行手段

言波の手が生み出した突風は瞬間的にF5クラスの竜巻と同等になった。家どころか飛行機でさえも吹き飛ばす猛攻。

そも風の力というのは我々が想像する以上に凄まじい。台風のエネルギーは純粹に核爆発のエネルギーにをも匹敵する。嫌、もしかしたらそれすらも上回るかも知れない。

この研究所にある空気の向きを操って一時的に作りだした突風とはいつてもその威力は馬鹿に出来る物では無い。

まともに食らえば八つ裂きになっても何ら不思議ではないのだから。

未だ空気の乱れとなって突風の名残が流れて行く。

「ん…？」

その中を動く影があった。確かに手応えがあったにも関わらず、かなりのスピードで踏み込み真っ直ぐ拳を振るって来る。

見たところ武器に類する物は持っていない。となるとあのスタイルが既に能力なのだろうと見当を付けてから、体を僅かに捻る。

あの状態が能力を使用している状態だとすれば、ただのパンチを受けける程度のダメージで済む筈が無い。

その考えは半分は正解だがもう半分は間違いだ。その半分の間違いとはつまり

「ぐはッ！」

紙一重で避けた程度では、完全に避けた内には入らないという事。

確かに手は触れられていない。にも関わらず、重く、硬い衝撃がその身を襲った。まともに打ち込まれていたら、一体どのような事になっていたか想像するだけで冷や汗が伝う。

「なんだ、今は…!?!」

「相手が超悪かったですね。その程度では私のオフエンスアーマー窒素装甲は超防げません。」

「窒素装甲?…待てよ、窒素を操る?先程の突風に耐えうるレベルの防護力…おい、お前名前は?」

唐突に求められた問いに中学生位の少女は眉をひそめた。

どう考えても今のこの状況で自己紹介などという発想には至らない。故に、この少年の意図が読めない。自分達は敵同士だ。ならば、例えどれだけ小さな物でも情報は明かさないのである。

「…そんな事聞いて超どういっつもりですか?」

「そうだな、なら質問を変えよう。お前の名前は絹旗最愛で間違い無いか?」

「なっ…!?!?」

絹旗と呼ばれた少女は思わず絶句した。自分が属する『アイテム』という組織は学園都市に数多ある暗部組織の中でも上位に位置する。機密レベルもそれ相応に強固な物だ。



『闇』の情報というのは例え下つ端に位置する組織でさえもそう簡単に手に入る物では無い。『アイテム』となれば尚更だ。

「あなた…超何者ですか？」

「凶星か？ならお前が『暗闇の五月計画』の生き残りか…。」

「そこまで知ってるんですか？」

「知ってるさ。俺も少し前まで『闇』にいたからな。確かもう1人の被験者、ボンバーランス室素爆槍とやらの暴走が原因で永久凍結になったんだっけか？」

「もう一々驚くのも超バカバカしくなってきました。まあ、あなたが何を知っていようと私が遣えることは変わりません。此処で超ぶっ潰します。」

ゴッ！と自動車でさえも容易くスクラップに変えてしまう最早砲弾にも等しい一撃が振り抜かれた。空気が裂ける。その威力たるや正に絶大。人の体など一瞬でただの肉塊になるだろう。

その上この少年は動こうともしない。結局正体は分からず終いだっただが、死んでしまえばそれも些末な事。

躊躇い無くその体に叩き込んだ。

…ハズだった。

「ハッ、…！？」

唐突に視界が揺れる。腹部に違和感を感じ、視線を移すとめり込ん

でいる拳が見える。認識した瞬間に、痛みは来た。突進のスピードを逆手にとったきれいなカウンター。ただの拳だが、その威力は何倍にもなる。腹部を押さえてその場にくずおれる絹旗。

「一体、何が…？」

訳が分からない。自分の窒素装甲は例え至近距離から弾丸を受けようと破る事は不可能だ。ましてや銃器どころか素手で、このような状況に至っている事が理解出来ない。

「悪いな - - 解析、完了だ。」

「解析…？」

「ああ、お前が『暗闇の五月計画』の被験者だと分かった瞬間から、その能力の威力から効果範囲、展開速度まで全てを計算した。そして構築した能力破壊公式を俺の手に展開させた。と、まあこんな所だ。他に質問は？」

「もう一度言います。あなたは超何者ですか？」

「…知ってるかどうかは分からないが俺は元『オリジナル・チルドレン』、ロストメンバー番外戦力と呼ばれていた。」

「…そう、ですか。…“あの”計画の生き残りだったんですね。私が超勝てない訳です。」

過去、『闇』の頂点に君臨していたその存在。その価値は世界が彼らを求めて戦争を起こすとまでいわれた程。

だが、それは決して誇れる物では無い。結局の所、誰よりも多くの

人間を殺せる兵器としての評価に過ぎないからだ。しかし、だとしてもその実力は本物。ただ純粹に1人1人の戦闘力は一国の軍隊にも匹敵する。

その内の1人。

真つ向からぶつかつても勝てる訳が無かつたのだ。表での圧倒的な力の象徴が『レベル5』という肩書きならば、闇での力の象徴は間違いない。『オリジナル・チルドレン』だ。

今はもう存在しないとしても、未だにその勇名或いは凶名は絶大な影響力を残している。

「解答は以上だ。――そろそろ終わらせよう。安心しろ、殺しはしない。ただ、意識を奪うだけだ。」

フツとその姿がぶれ、気が付くと直ぐ目の前に現れている。抵抗どころか反応から既に出来なかつた。

頭に触れられる。それだけで意識がブラックアウトしていく。何をされたか分からないが何かをされた。

原理などは考えるだけ無駄だ。通常では有り得ない事を平然と行えば彼らにとつて常識は有つて無いような物。

ただ、それだけ圧倒的な力を見せられても絹旗には不思議と恐怖は無かつた。

自然と眠るように意識が沈み、遂に地面に倒れ込む。余りにも静かな戦闘終了であつた。本来彼の力を全力で行使すれば、10秒でこの場を血の海に変えることも可能だが、それをしなかつた。出来る限りは余計な血を流したくは無いだ。別に彼は人殺しを好んでいない訳ではない。

数多の命を刈り取ってきたのもそれが任務であり、命令であり、そ

れでしか自分の存在の価値を見いだせ無かったからだ。  
ある意味哀れだったと言わざるを得ないのかも知れない。

言波は完全に気を失った絹旗を外に転移させる為に近付く。この施設は破壊する。その巻き添えにするのは忍びないからだ。

一瞬だけ体に触れて移動させる。他の気絶している少女達も同様に

「全く、学園都市つてのは昔からやることが変わってない。こんな子供を裏世界に引きずりこみやがって、俺たちだけじゃ飽きたらなかつたつてのか……クソつたれが。」

見れば、まだ中学生か高校生ぐらいの少女達だ。そんな彼女達に躊躇いなく汚れ仕事を押し付ける上層部の精神構造が理解出来ない。人間をなんだと思っっているんだと、再び怒りがこみ上げる。

これ以上奴らに、利益を与えない為にこの実験は絶対に止めなければならぬ。

たった1人で挑む敵がどれほど強大な物かは重々理解している。まず、あれほど大規模に行われている実験に学園都市の監視システムが気付かない訳が無い。間違い無く上層部、統括理事会が介入している。誰が相手だと問われればそれはもうこの学園都市そのものだろう。

この街は最先端技術で彩られた未来都市などという華やかな物では無い。勿論、その評価も間違っつてはいないのだが、所詮は表向きだ。裏の実情を知らないから夢がある事が言える。

光があれば必ず影が有る。光が強ければ強い程、影も濃くなるものだ。

しかし、誰もが分かっていない。普通に生活を送るその裏でどれほどの人間が命をかけて動いているのかを。

誰も知らない。不変の物であると信じて疑わない日常が微妙な均衡の上に成り立っている非常に不安定な物であることを。

そもそも、もし学園都市がクリーンな科学技術研究機関であるならば万民に受け入れられ反対勢力などが出来る筈が無い。そしてそれに対応するために自分達のような存在が生み出される必要も無かった。

そこまで考えてから言波はフツと自嘲気味に笑う。確かにこの街に操られてはいた。しかし数え切れない程殺戮を重ねて来たのもまた事実。

それは決して赦されるようなものでは無い。

幾ら自分の意志ではないとしても、だからといって行ってきたのは紛れもない大罪。皮肉にも、現在行われている絶対能力者進化実験の犠牲者より、言波が手を下した事によって命を落とした者の方が圧倒的に多いのだ。だが、これは罪滅ぼしという訳ではない。そんな事で清算できるとは思わない。

否

思っではいけない。そうする事が、自らに課した罰とでもいうべきものなのだから。

「…ん？」

ふと首を傾げる言波。数が合わない。1人足りない。

「まさか……!!」

直後、ゴツ！と空間が破裂するような勢いで一条の光線が頬を掠めた。

とつさに半歩横に退いていなかったら今頃頭が消し飛んでいたに違いない。この反射神経も訓練の賜物である故に今だけは感謝してもいいだろう。

光線が飛んで来た方向を見ると立っている人影がある。それが誰かはいちいち考えるまでもない。

「…参ったな。」

最も厄介な人間が残ってしまった。まず第一に行動不能にして起きたかったがそう容易くは行かなかったようだ、このレベル5第四位原子崩し（メルトダウン）こと麦野沈利という存在には。

「ナメた真似してくれたじゃねえかクソガキが、ああ！？テメエはもれなくぶち殺し確定だコラアアアアア！」

状況は最悪と言ってもいい。戦闘に次ぐ戦闘。それ自体は大した事では無いが、その時に行使した能力は確実に彼の体力を奪っていた。

並みの風力使いを軽く上回る突風を生み出し、能力を無効化する公式を構築する。それがどれだけ難易度が高い事かは想像に難くない。

しかも、戦闘を行いながらの高速演算。恐らく大きく能力を使える

のは後もって三回程度。それ以上は自らの肉体を滅ぼしかねない。見極めるべきはタイミング。多用出来ないからこそ、最も効果がある瞬間を狙わなければならない。

だが、全くの生身で攻略出来る程原子崩し（メルトダウン）という能力は安くない。

実際の所ローリスクハイリターンなど実践においては存在しないのだ。

それが理想ではあるが、犠牲なくして結果は出せない。犠牲は付き物である事を前提に置き、それをいかに最小限に抑えられるかが、勝敗のキ―を握る。

もう一度言うが、結果に犠牲は付き物だ。一々恐れていたら生き残れない。殊このような場面に置いては尚更だ。

だから言波は躊躇なく能力を己に使用した。その効果は身体能力の強化。こうでもしないと光速で動く原子崩し（メルトダウン）は補足出来ない。

光線が放たれた。膨大な殺意が纏われたその攻撃はただただ万物を破壊するのみ。

撃ち抜き、突き破り、灰燼に帰す。

一撃でも受けたら、即死は免れないだろう。

だが、言波は逸れを難なく回避している。しかも僅かに体を捻ったり、半歩飛んだりと紙一重でだ。端から見ると危なっかしく見えるが、これはかなりの高等技術。

一切の無駄を省き、余計なエネルギーを使わずに必要な最小限の動きで避けていく。

時間は後僅か。体がまだ動く内にけりをつける。

とにかく彼女に触れることさえできれば、脳内への酸素供給をストップさせ有り体に言えば“オトす”ことが出来る。

「クソが、チヨロチヨロチヨロチヨロ動き回りやがってゴキブリか  
デメエは！！」

業を煮やした様子の麦野から不意に攻撃が止んだ。懐から何かを出そうとしている。

あまりにも唐突な行為に隙と判断して良いものかどうか一瞬迷う。  
それこそがせっかくの好機チャンスを奪ってしまった。

逡巡してから、一気に間合いを詰めようとした彼を襲ったのは先程までの猛攻を上回る光線の群れだった。

拡散支援半導体『シリコンバーン』

カードのような形をしたそれは面に原子崩し（メルトダウン）を放射する事で幾重にも枝分かれさせる事が可能。

圧倒的な物量。抵抗も馬鹿馬鹿しく思える程の火力。

並みのメンタルの持ち主ならこの時点で戦意を失っている。

だが、しかし元々軍事戦力として利用されていた言波の精神力は並々ならぬ頑強さを持っている。そうでもない毎日死を見ていたあの日々を耐える事は出来なかっただろう。早々に発狂していた筈だから彼は躊躇わずに前へ出た。



右手が高速で動いたその後には、麦野が放った光線群は跡形も無く消滅していた。

「……！」

驚愕の意を示す麦野。そこに生まれた一瞬の隙に一気に間合いを潰す。

「シッ！」

この一撃で決める。強化した身体能力により繰り出される蹴りは絶大な破壊力を生み出す。轟ッ！と大気を裂く音と共に唸りを上げて振り抜いた。

確かにその蹴りは常人が受けたら、骨が碎けて昏倒するぐらいの威力は秘めている。

だが……

「本当に厄介だな、第四位。」

当たらなければ意味が無い。避けるのが難しい程のスピードなら、能力を使って避ければいい。

麦野は原子崩しをジェットエンジンのように噴出して、後方に移動していた。

「そんな程度で私を捕らえられるとでも思ったのかしら？レベル5舐めてんじゃねえぞ！」

「ふん、別に侮ってなどはないさ。寧ろ過大評価している。」  
一呼吸置いて

「何せこの俺をここまで手こずらせてんだからな。」

瞬間、言波から膨大な威圧感がゾアツと迸る。殺気とはまた違うが、とにかく目を離せない。蛇に睨まれた蛙の状態とはまさにこの事を言うのだろう。

マズい、と麦野は感覚で理解する。とにかく一刻も早くここから動かななくてはならない。

理屈ではなく本能で。認識ではなく、直感で。全てが危機を告げている。

「さて、と…此処からは攻めにまわる、ぞ！」

脚で思いっきり地面を踏み込み、加速する。その勢いそのまま掌底を腹に打ち込み、続け様に胸に肘を入れる。

「ぐふっ…!!」

耐えきれずに口から血が飛び散った。

「言うておくが、殊戦闘において俺に勝てるなどと思うなよ。くぐり抜けて来た修羅場はお前よりも多い。」

拳を水月に沈め、膝で蹴り飛ばす。女性に対しても容赦はしない。少なからず心苦しいが敵として向かってくる以上は全力で排除する。特にこの四位の力は本物だ。その強大さを知っているからこそ徹底

的に。

「くそが…」

意識が朦朧とする中、未だ立ち上がる麦野。その精神力は賞賛に値する所がある。

だが、

「これで終わりだ。……沈め。」

ブオツと地を蹴って跳ぶ。空中で体を反転させるとそのまま重力と遠心力を利用して、肘を後頭部に一撃。

俗にブレインシェイカーと云われる技だ。試合では禁じ手だが、これは実戦。威力は人一人を気絶させるには充分だ。

「がつ、……」

短い呻き声を上げてそして倒れる。

命に別状は無い筈だが、一応応急処置をしてから外に転移させる。後は『アイテム』の下部組織辺りが病院に連れていくなりするだろう。

「ふう…さて、目的を果たさなきゃな。」

頭を押さえながら一歩進む。口元からは血が流れ出している。やはり、そのダメージはかなりひどいようだ。

「そろそろか…そう長くはないな。」

その呟きは誰にも聞こえない。何を意味しているのかも分からない。

そのまま何かを振り払うように、奥に言波は駆け出して行く。

数分経つてドガア！と轟音と共に炎が立ち上った。炎は研究所の薬品に引火して更に広がりを見せる。

瞬く間に建物中に満ち、そして爆発した。崩壊して行く研究施設。

僅かにだが、確実に反抗への狼煙は上がりだす。

何時までも上に従う訳は無い。目的を手に入れた今、矢桐言波を縛る事は誰にも不可能。

挑む相手は最強。守べきはこの日常。自らを取り巻く全ての物。そして賭けるものはその命。

彼は1人で入り込む。慣れしたんだ嘗ての居場所。『闇』の戦場へ。

失いたくないものは余りにも多い。それらを守る為にも、誰も犠牲にする事は出来ない。

だからこそ彼は孤独に参戦する。全てが終わった後少なくともこの日常が平凡に続いている事を願って。

## とある論理の最終交渉（前書き）

前書きは省きます。

## とある論理の最終交渉

――とある路地裏

この近代的な街、学園都市を彩る明るすぎる程のライトはおるか、月明かりでさえも満足に無い完全な闇の領域。

昼間に置いては、日常生活の死角。

夜間に置いては誰も 立ち入ろうとしないアウトゾーン。

そこへ、ザンツと空気を裂いて突然人間が現れた。比喻でも何でも無い。本当に空間からそのまま滲み出して来たように予兆もなく、現れたのだ。

しかも、その人間の格好が奇妙さを更に後押ししている。

Yシャツにネクタイ、その上に黒のロングコート。足にはミリタリーブーツ。そして右手に携えている一振りの槍。明かりが全く無いにも関わらず、禍々しい程の銀光を放っている。そもそもこの現代社会、それも最先端科学を地で行くこの街で武器としての用途を考えれば余りにもローテクでナンセンス。

だが、この人物にとってはこの槍こそ最強の兵器。この人物に軍隊を相手どる程の戦闘能力を与える唯一無二の装備。

流石に彼らの中での最強『聖人』には適わないが、それに次ぐぐぐらの能力は保有している。

彼は魔術師。才能が無い者が、目的を達成するために血反吐を吐く

程の努力を乗り越えて力を手に入れた存在。

彼は魔術師。科学とは対を成し、未知の法則を自在に操る存在。

- - -そして、世界の裏側からただ1人を見守って来た存在。

彼は槍を地面に突き刺した。コンクリートで出来ている筈の地面をそれは豆腐に刺さるように、あっさりとめり込む。

『空間照応、四界接続。我が槍に命ずる。我に属する全ての法則、軌跡を描き我を導け。』

一瞬、槍の刃先が鋭く光った。次の瞬間には彼の姿は跡形もなく消えている。

痕跡も残さずに現れて、痕跡も残さずに消えた。

- - -

学園都市の第7学区には『窓のないビル』というものがある。正式には何と言うのかは分からない。が、そこがこの街の政治のトップ、事実上の最大権力者。学園都市総括理事長の拠点だと言う事は裏世界で大概知れ渡っている。

『窓のないビル』の中、円筒形の巨大なビーカー。赤い培養液に満たされたその中に浮かんでいる者がいた。

聖人のようで囚人に見え、子供のようで老人に見え、女のようで男に見えるその“人間”こそが総括理事長。ゆらゆらと揺れながら、閉じた目を開く。

『君か。』

やはり声までも統一されない。若くもあり、老いたようでもあり、女のようで男のような異質すぎるその声で言葉を掛けられた人物は奥の暗がりから歩いて来る。

『どうやって入って来たのかは…聞くだけ愚問だな。』

「そんな事はどうでもいい。率直に言っぞ。あの子を巻き込むな。」

銀色の瞳を歪ませて、僅かに憎悪を含んだ口調でそう吐き捨てた。

『何を言っているのか理解出来ないのだが…？』

「とぼけるな。お前の『プラン』とやらはどうでもいい。好きなようにすればいい。だが、そこにあの子を組み入れるなど言っている。」

「いつの間にかその手には一振りの槍が握られている。彼の名は神白かみしら創はじめイギリス清教『必要悪の教会』ネセザリウス所属の魔術師。汚れ仕事を一挙に引き受ける部署にてそれ相応に修羅場も乗り越えている。つまり、それ程に十分な実力を備えているという事だ。事実彼がその気になれば、一国の軍隊程度丸ごと薙ぎ払うことも可能。」



それ程の力を備えた相手がそれ程の偉業ともいうべき行いを成し遂げる兵器を手に取り、睨んでいるというのにピーカーの中の人物は微動だにしない。

別に萎縮しているという訳では無い。この人間にとっては別段警戒すべきレベルにも入らないのだ。

『それは無理な相談だ、神白創。彼はもうプランの中核となった。そもそも3年前、私が君との交渉を呑んだ時、私は言った筈だ。【いずれ、この見返りはしっかりと回収させてもらおう】とな。それに君も了承した。違うか?』

「くっ!」

まさにその通りだ。一分の隙も無い完璧に正当な意見。

確かにあの時、自分は了承した。ただただ彼の安全を願っていたからだ。だが、今更自らの采配に歯噛みをして何も始まらない。

「くそッ!」

思わず悪態を付く。

『そう憤るな神白創。君らしくも無い。だが、まあこれで分かっただろう?彼の存在はそれだけ価値が有るということだ。一気にプランを短縮出来る。』

全ての人間を駒にして必要なければ切り捨てる。そこにはもう自分のことしか目には入っていない。残念なことにこの“人間”にとつて、メリットがあると判断された人物はもう決して逃れられない。

さながら蜘蛛の糸に絡まった虫のようにもがけばもがくほど絡みつく。寧ろそれすらも楽しんでるのだろう。どこまでいっても底が見えない。どこまでいってもこの“人間”が計れない。

「…お前は一体何がしたいんだ？」

『それこそ、君が知る必要は無い。どうせ理解は出来んよ。』

「……そうか、ならば私は私で行動させてもらっぞ。」

『好きにするがいいさ。イレギュラーもまた面白い。』

「1つ忠告をしておく。…何もかもが計画通りに進むと思うな。その余裕はいずれお前の足下を崩すぞ。お前だって人間だ、神じゃない。理解の範疇を越える事も充分にあり得る。もう一度言っぞアレイスター（、、、、）いつまでも優位性を保ってはられない。」

それだけ言ってから踵を返して歩きさる。一瞬だけ光が閃いた後にはもう陰も形も無かった。

『残念だが、インクイジター審問官もつ君の想定出来うるレベルは超えた。今更どう動こうとも何も変わらないのだよ。』

神白創が消えた後の虚空に向かってアレイスターと呼ばれた“人間”は呟いた。全ては想定範囲内であり、多少の誤差も調整は可能だ。マイナス（不測）さえもプラス（利益）に変える、一体どれ程

の高所から世界を見ているのか想像すら出来ない。

“人間”の名はアレイスター・クロウリー。現代の魔術の基盤を作った史上最高の魔術師にして、科学サイドに身を置く事で最も魔術師を侮辱した史上最低の魔術師。

公式には死亡したとなっているが魔術サイドの一部は未だに存在しているらしい、彼を調べる事だけを目的とした調査セクションを設けている。

彼そのものが魔術サイドのタブーにしてアンタッチャブル。魔術と科学、この2つの世界を1人だけで揺るがしかねない極めてリスキ―な“人間”。

彼はただ笑う。それは決して好ましい笑みなどでは無い。

見る者全てに無条件で警戒心を抱かせるような歪みを含んだ笑みだ。  
『さあ、久方振りの嬉しい嬉しいショータイムだ。』

ここに彼の“娯楽”が明確に始まった。誰の意志も必要としないで、強制的に幕は落とされる。

何をもって、何を考えて、何を目的としているのかはアレイスター・クロウリーを除いては誰にも解らない。

理解した時には全ては手遅れなのだ。  
だからもう遅いのもかもしれない。事態は取り返しのつかない所まで進んでいるのかもしれない。

いや、恐らくはそんなのだろう。誰が手を加えようとそれすらも許容できる範囲内の出来事に違いない。

一体どれだけ先を読んでいるというのか、一種不気味さを感じるまでにアレイスタークローリーという存在は異質だ。

もう、時間さえもろくにない。引けるカードは余りにも限られていく。今から取ろうとしているジョーカー（手段）が切り札となるか、若しくはただの道化となるか…『窓のないビル』の外で神白創は思考する。

本来彼の力を使えば、純粹に破壊するという点だけで見るのならばこの件は容易に解決する事は出来る。

ただ、これはアレイスターが同時進行させているプランの一角に過ぎない。潰したとしても直ぐに軌道修正して、再び思い通りにプランは進行していく

それが分かっているから神白創は慎重に慎重を重ねる。事態は逼迫している。だからこそ冷静に。

激情にかられて突き進むのは愚の骨頂。それ位でプランを叩き潰せるのなら、もう誰かが実行している。

物事はそう単純ではない。神白創は改めて自分に問う。

何の為に力を手に入れたか。何を目的として全てを乗り越えて来た

か。方向性を得ているかいないかで、人間は大きく変わる。

静かに目を閉じて、そして開く。

意志の再確認。躊躇う道理はない。

もう一度、光が閃く。その後には誰も居なくなった。

「見ているがいい、アレキスター。いつまでもその高みから、眺めているがいい。いづれ墜ちるその時までには優越感を好きだけ感じ  
ておけ。」

“人間”アレキスタークロウリーに比べれば、自分の能力は遙かに劣る。知っていることもごくごく僅かな事だけだ。勿論詳細などは知らない。実際のところプランが完成すればどうなるのかも分かっていない。

世界の不利益になるのではないかというただの予想。根拠はない。極めて薄い理由で動いているに過ぎない。

自らの全てをかけて成し遂げるに値する内容かと問われれば何も答えられなくなるだろう。

そもそもが、別に神白創がやらなければいけない事では決してないというよりは寧ろアレキスターに関わってはいけないという暗黙のルールさえ匂ってきている位だ。

だが、それでも彼は成し遂げなければならぬのだ。

世界のルール等は関係ない。怖じ気づいたのならばどこか遠い所で震えながら隠れているがいい。

そうではないのだ。彼が動くのは自らのルール。嘗てその身に刻ん

だ魔法名の意味。『judicare025【我が手は大罪を打ち砕く】』

唯一守りたかったものを一度は失ってしまった。それを自らの大罪として、打ち砕く為に彼は力を入れた。

その意味に忠実に従うまで。

『我が身に纏うは導きの光。縛りを緩め断ち切り、正しき方向へと繋ぐ糧となれ。』

直後、その姿が一気に加速した。空間移動魔術はそう多用しては使えない。消耗が激し過ぎるのだ。

だから彼が今使っているのは彼にとって最もスタンダードな移動魔術。

漆黒の闇を更に塗り潰す“黒”が空を高速で切り裂いて行く。

一瞬だけ、その顔に微笑が生まれた。不可能の中にルートを見出す。

解が無いのなら適当に当てはめていけばいい。何時かは辿り着く。

手段が無いのなら作ればいい。どれかは効果を生み出すだろう。

それすらも出来ないのなら最初から抗おうとするべきではない。

それだけの“覚悟”を備えた人間だけが次の段階に踏み出せるのだ。

「粘り強く物事にあたれば道というものは必ず見つかる。その事をアレイスター、お前は知らない。常に挫折を知らずに生きてきたお前には分からない。……完璧というのにはある意味最も脆い存在なのかも知れないな。」

もう一度だけはつきりと言おう。

神白創は総合的な実力でアレイスター、クロウリーに劣る。それこそその差は埋めようが無い程かけ離れているだろう。

しかし、“最強”の定義は必ずしもただ強いというだけでは無い。それだけでいいのなら一度王座に就いたものは何時までも君臨し続けられる筈だ。

ところが歴史のどこを見渡しても、王座に就き続けられたという事例は見当たらない。

嫌、本当はあるのかも知れないが、それは少なくとも圧倒的少数派だ。一度王座に就いたという事はそれを争って来た中で最も強かったから、その地位を手に入れたに違いないのに……。

これが意味するもの、それは強さとは曖昧な基準に過ぎないという事。

誰かが自分が負けた事実を認めたくなくて、相手の方が自分よりも力が上だったとする事でどうにか心の平穏を保とうとした。

要するに臆病者が定めた基準。

これを以てすれば、戦いからは逃げられる。失敗しても諦められる。何とも便利な理屈ではないか。

しかし、この事を本当に理解出来た者なら決して逃げようとはしないだろう。

強さとは一定ではないから。

力とは曖昧な物だから。

抗おうとすれば抗える。付け入るチャンスはどこにでもある。

出来る出来ないかは関係なく、遣るか遣らないかが重要なのだ。

だからこそ神白創はその拳を握る。恐れる必要は無い。

真の敵は他でも無い自分自身。

・・・ラインを越える。

・・・恐怖を塗り潰せ。

・・・踏み込んだその先を見据える。

「さあ始めよう。ここからは……………」

一区切り置いて

「……………反撃の時間だ。」



-  
-  
-  
-  
闇を切り裂く魔術師は深く静かに、動き始めた  
-  
-  
-

## とある論理の単一進撃（前書き）

上条さんが空気です。すいません、うちの主人公をメインにしたか  
つたんです。

## とある論理の単一進撃

少年は走っていた。

とある真実を知り、それに関わっているとある少女を助けるために

……

始まりはほんの些細な事からだった。

普通の生活の中に埋もれたとしても何の違和感もない程微妙な出来事。

しかし、何の因果か少年はほんの少しだけ関わってしまった。『闇』に、その実情に……。

そして少年は真実を知った。更にその真実はこの少年にとってとても見てみぬ振りが出来るような生易しいレベルには無かった。

次元が違う……

間違いなく関わってはいけない何かがあるのだ。

それは『闇』に慣れていない、言ってしまうえばそこらの一般学生と変わらない少年にもなんとなく解る。

世の中には明確にラインが引かれている。世界と世界を区切ることで、均衡を保っているからだ。

しかしながらそのラインを踏み越えてしまうのも決して珍しくは無

い。但しそれが故意であろうとなかろうと破った物にはそれ相応の代償が必要となる。

意外に“入口”というものはそこから中に存在しているものだ。

例えば路地裏。

例えば廃ビル。

例えば夜という時間。

道を曲がればその先に有る。

錆びたドアノブを回せばその先に有る。

暗い中を歩いていけばその先に有る。

思っているよりも身近に、且つ有り得ない程密接な所に“裏”と“表”の境界線というものは存在する。

それに立ち入ったら最後運が悪かった。ただそれだけで、一蹴される理不尽。

関わらないのがベストな選択であり、気付かない為に努力しなければならぬ。事はそれ程のレベルにまで達しているのだ。

同じ『闇』といってもそこらのチンピラ共の小競り合いなどは訳が違う。そういうのは少年も経験した事はあった。

だが、これは別物。全くグレードが違う『闇』。深すぎて底すらも見えない。

理解している。十分に、十二分に。それでも尚、見過ごせない。

例え偽善使い“フォックスソード”と呼ばれようが、人を救う事が傲慢だと言われようが。

……だからどうした

彼は胸を張ってこう言える。何も全てを一度に救おうとしているのではない。それこそ不可能だ。目の前で誰かが苦しんでいる、そしてそれは自分の手が届く範囲の出来事だった。

だから手を差し伸べるのだ。右手を握り締め走って迅って、少年は鉄橋にたどり着いた。

そして、見た。少年は思わず凍りついた。それはいつも見ている姿では無かった。

自分を追いかけてまわした彼女とは違う。  
毎回毎回勝負を挑んできた彼女とは違う。

あの快活な少女とは全然違う。  
鉄橋の欄干に手をかけて、風車を眺めている姿は余りにも弱々し過ぎた。

触れただけで、簡単に崩れさってしまうようなそんな錯覚さえも抱かせる位に、哀しくなる程に脆過ぎた。

「……何やってんだよ、御坂……！」

† † † †

少年が、上条当麻が走っていった少し後に矢桐言波もまた急いでいた。

彼が跨っているバイクが高速で、冷たい大気を切り裂いて行く。

漆黒のフォルムを持つこのバイク。

名をHSVSM-01通称『ハンターズ・ドッグ』元々は陸上戦闘に置ける高速展開用に開発されたが、機動力を高める代わりに火力を犠牲にした為、戦闘はドライバー自身の技量に左右されるようになり直ぐに開発は中断された。

しかしながらそのスピードと機動力は本物。機体のバランスを常に絶妙に保つ事で、空気抵抗を最小限に抑えベストな速度を常時維持出来る。

用途が戦闘でなければ、性能は抜群に優れている。『オリジナルチルドレン』時代に支給された一品だ。

そして彼は、鉄橋にたどり着いてからため息混じりに呟いた。

「はあ…やってくれたな。」

その視線の先、倒れている上條当麻と前髪から火花を散らせている御坂美琴。

何が起きたのかは一目瞭然だった。

「お前まだこんな事やってたのか…？」

御坂は肩で息を切らせながらも動揺は隠せない様子だ。

こんな事になるとは予想していなかったのだろう。また、あの右手で防がれるに決まっている、そう思っていたのだろう。

なのに、上條当麻は無抵抗を貫いて倒れている。まさか死んでしまったのでは……。そう考えたとしても無理もなかった。

「生きている。気絶しているだけだ。どうやら電流は強くても電圧はそうでもなかったみたいだな。出なきゃ今ごろ当麻は黒こげだ。」

言波はそれだけ告げて

「……………で？お前はどこに行こうとしている？」

生きている、それを聞くと安心した様子でその場から立ち去ろうとする御坂。大体予想は着いているが、一応問い掛ける。疑問というよりも確認の意を込めてだ。

返ってきた返事は予測に違わず

「……決まっているじゃない、一方通行の所よ。」

「やっぱりか。悪いが、行かせはしない。」

「どうしてよ？ 今度ばかりは、私も本気よ。邪魔するってんなら容赦はしない。」

「容赦はしない？ ……その言葉の意味、本当に分かってんだろかな？」

ゾクツと場の空気が凍る。本物の殺気、研ぎ澄まされた威圧感。その全てを纏って言波は言う。

「う……あ……」

まともに相対出来ない。まさしくこれこそが、“黒”。御坂は感じる。目の前の少年がその気になれば一瞬で自分を殺せるだろう事を。

はっきりとイメージ出来る。無理だ……。適いつこない。『超電磁砲』という肩書きも陳腐で、空虚なものに思えてくる。いつの間にか御坂は地面にへたり込んでいた。



「感じただろ、自分が殺されるイメージが。殺す覚悟も殺される覚悟もない奴が軽々しく命を賭けようとするな！！今、お前が行ったとしても確実に死ぬ……。一方通行は、<sup>アイツ</sup>本当に怪物だ。レベルが違う。離れすぎている。」

「……分かってるわよ、そんなこと。私が死ねばあの子達は死なずに済む。樹形図の設計者は一八五手で私が死ぬと予測した。それから最初の一手で私がやられれば……。」

「……ふっ、ざけんじゃねえ！！テメエ自分の命を捨てて、<sup>シスターズ</sup>妹達を救ったとしてもそれで本当にアイツらが救われると思うか？自分を犠牲にして他を助ける？それが偽善なんだよ！！本当に助けたいのなら、お前が取ろうとしているのは最低の手段だ！命を軽く見てんじゃねえぞ！！」

激昂、誰よりもその重みを知っているからこそその純粹な怒り。赦せない、何よりも先に、自らを投げ捨てようとする行いを。そしてそれを最善の手段だと思っている事を。

「……や……あ、じゃあどうしろって言うのよ！！他に方法が無いの。これしか無いのよ！！」

「じゃあ何で助けを求めない！何で一人で背負おうとする？当麻を

見る。そいつはお前を助けようとしてここまで来たんだぞ！言えよ。助けを求めろよ！！」

「お前は……」一区切り置いて、

「お前は俺と違って1人じゃない。」

「どう……して？どうしてここまでするの？あんたには関係ないじゃない。私の問題なのに……」

「関係は大ありだ。俺が被験者だった実験の残骸が今の絶対能力者進化実験になっっているんだからな。これは俺が決着をつけなければならぬ問題だ。」

それに、と続けて放った言葉は御坂を驚愕させる。

「俺の命はもう長くない。生きている内に終わらせないと、未練が残ってしょうがない。」

「……えっ……？、今……なんて」

「能力のせいだ。使う度に体に負担がかかるといったら？俺の内蔵はもうかなりのダメージを負っている。本来の機能が為されていない。もって後1年前後だろう。」

今度こそ御坂の全身から力が抜けた。信じられない、そんな体で今

まで動いていたというのか。

「何だよ。あんた今、命を軽く見るなっていったじゃない！自分を投げ捨てるなっていったじゃない。それじゃ本末転倒よ！」

「……なあ、御坂。俺は正直言ってお前が好きじゃなかった。勝負勝負とうるさい上に、わがままで気は短い。とんでもないお嬢様だ……だが、お前はいつも笑っていた。俺が得られなかった全てのものお前は最初から持っていた。もしかしたら俺は羨ましいのかも知れないな。嫌、羨ましいんだ。……そして気付いた。この笑顔を守りたいと思った自分がいることを。どうやら俺は……」

「そこで初めて彼は笑った。心の底から幸せそうに、マイナスな感情が何一つ含まれていない本物の笑み。」

「……俺はお前に笑っていて欲しいみたいだ。」

手が静かに動いて、御坂の頭に触れる。

「目が覚めたら全てが元通りになっている。約束する。お前は、“こちら側”に来てはいけない。染まってはいけない。待っているのはいつもの日常だ。普通に笑って普通に怒って普通に楽しむ。そこで生きる。」

ゆっくりと意識が沈んでいく。優しく柔らかかに眠るように、遠のいていく。

最後に聞こえたのは

「記憶を操作しておいた。次に目が覚めたらお前は俺の事を覚えてはいないだろう。だが、1つだけ言っておく。その世界を大切にしろ。毎日毎日を思い出に刻め。俺が結局叶える事が出来なかった願いをお前は叶えてくれ。忌まわしい記憶は消しておく。俺の事は忘れた方が、お前の幸せになるからな。」

「…ちよつ、……待つ、……」

意識が消えるその寸前、御坂は見た。

うつすらと言波の唇が動く。

「……後は任せる。」と。

その目は死を覚悟した目だった。事実、言波は死ぬ気だ。どうせ長くは生きられない。どうしようも無い程血に塗れた人生だったが、せめて最後までらしいはヒーローの真似事をしてもらいたい。

本当のヒーローにはなれないが、それに近い存在にはなれる。

失いたくないものが増えて過ぎてしまった。そしてそのどれもが命を棄てて守るに足るものだ。

ザツと言波は何かを断ち切るように前を見据えて歩を進める。今夜の実験場所は把握した。所詮怪物は闇で生まれて闇で散るのがお似合いだ。

踏み出した先は1つの“戦場”。戦う相手は最強の最凶。例え万全の状態でも生き延びられる確率はかなり低い。

ましてや今の状態なら尚更だ。しかし、彼に恐怖は無い。絶望的な状況であったとしても恐れる事は無い。“覚悟”は人を強くする。そのままバイクに跨り、フォン！とエンジンを入れて走り出した。もう後ろを振り返りはしない。

その姿は暗闇を突き抜け、吞まれてそして……溶けていった。

## とある論理の染血英雄（前書き）

かなりのハイピッチで進んでおります。次回で『シスターズ妹達』編は完結の予定です。

## とある論理の染血英雄

ドガア！夜の操車場に鈍い音が響き渡る。時折電光が瞬いているが、特に何も変化は見られていない。

「なんだなんだよ、そのザマはア！ちったア楽しませて見ろっつのオ！！！」

ガアン！一方通行は軽く地面を足で踏む。ただそれだけの動作でも、そこにあらゆるベクトルを集中するという能力を加えるだけで、クレーターが出来る程の衝撃波が発生した。

余波を受けて大きく吹き飛ぶ『妹達』<sup>シスターズ</sup>。嫌、ミサカ10032号。彼女の分類番号からも分かる通り既に10000人以上の『妹達』<sup>シスターズ</sup>が一方通行によって殺害されている。

吹き飛んだ体は鉄製のコンテナにぶつかって、止まった。もうその体からは力が抜けきっていた。

そのままズルズルと地面に倒れ込む。

「なア、お前さア自分の手を使わずに相手をぶちのめすやり方って知ってるかア？」

反応は無い。声すらも出せないようだが、無理も無い。恐らく骨が何本かは折れている。

だが、そこにおいても一方通行は一切の容赦がなかった。

もう後には戻れないのだ。踏みとどまるには遅過ぎた。とつくに10000以上の命を潰している彼にとっては実験を最後まで遂行させる事が、目標であり行動原理。

今更自身の方向性を変える事など出来はしない。瀕死の彼女を見下ろしながら、躊躇なくその足を振り下ろす。

肉を打つこもった音が、連続して聞こえる。

「相手を蹴り飛ばした瞬間にベクトルを反射させんだよ、まアその分威力も倍になるけどなア！」

蹴り飛ばし、踏み潰し、踏みにじる。

何度も何度も。

最早悲鳴をあげる体力すらも失っているのだろう。辛うじて息をしているだけだ。

だんだんと視界が暗くなっている。明確に“死”が近付いているのを実感出来る。ここで意識を失ったら二度と目が覚めることはない。と確信出来るし、断定出来る。

(死にたくない……)

それは生物が持つ最も強い感情。即ち生に執着する。死への拒絶反応。

彼女は唐突に湧き上がってきたその思いに戸惑った。

何故、そんなものが突き上がってくるのか？



自分は単価にして18万。スイッチ1つで幾らでも生産可能な消耗品。

一丁前に感情などが芽生える訳が無いのに、強く強く感じた。

(生きたい……!!)

刹那――

フォン!!。どこからともなく漆黒のバイクが爆音を轟かせながら、  
アクセラレータ一方通行に突っ込んで行った。

だが、アクセラレータ一方通行は振り向かない。警戒する必要がない。

どんなものであれ、彼の体に触れた瞬間“反射”によって跡形もなく粉碎される。

事実、突っ込んで来たバイクはアクセラレータ一方通行に触れたか、触れなかったかの所でグシャグシャに破壊された。

まるで見えない猛獣に噛み砕かれたかのように。

しかし、イレギュラーはそれだけでは無かった。

足音が聞こえる。一步一步一定のリズムで近付いて来ている。

やがて暗闇の中から現れたのは全てが黒の少年。上から下まで等しく闇色。

その姿は危機に現れた救世主というよりは、命を刈り取る死神のそれだ。近付いて来る侵入者はゆっくりと静かに且つ尋常ならざる威圧感を持って、言った。

「オイ三流、そいつから離れる。」

「へエ、言うじゃねエか。学園都市のレベル5。その中でも凶抜けた頂点の俺に向かって三流だと？」

「聞こえなかったのか？下らん御託はどうでもいい。そいつから離れる。」

「ああ？……っせエな、だったらほらしっかり受け取れよ。」

そう言つて足で引つ掛けて蹴り飛ばそうとする一方通行。アクセラレータ

だが、その足は空を切った。

「はア？」

そこで初めていつの間にか自分が後方へ移動していたことに気づく。否、移動させられていたことに気づいた。

「どうやら正しく理解出来なかったようだな。俺はお前に離れろと言っただが？」

「……ハッ！、いいなお前、最ッ高におもしれエぞ！！」  
そう言いながらも一方通行の脳裏には1つの疑問が生じていた。アクセラレータ

(コイツ……どやって俺を転移させた。)

彼が持つ“反射”は絶対の壁。物理的な攻撃はもとよりその効果は

次元上にまで及ぶ。

言波の能力は未知数だが、今は間違はなく空間移動の類だ。11  
次元上の能力さえも反射する彼に、どうやって能力を行使したのか  
？

考えられる事といえば

(俺の“反射”を上回る演算をしたって事が……?)

だが、有り得ない。その考えを一方通行はすつぱり切り捨てた。

自分は学園都市最強の能力者だ。つまりそれは学園都市最高、ひいては世界最高の頭脳を有する事になる。

核ミサイルを打ち込んでも破れない“反射”の壁を、無意識の内に常時展開出来る程の頭脳を持つ彼を越える演算能力など、存在する訳がない。

「さアと、まさかそのまま帰れるとか思ってたねエだろうなア？」

「当たり前だ。俺の目的はこの実験を止める事。元凶を潰すのは最優先だろう？」

「上等オ!!!グツチャグチャの挽き肉にしてやんぜ三下がアアアア  
ああああ!!!!!!」

言うや否や地面を大きく踏み込んで突進する一方通行<sup>アクセラレータ</sup>。脚力のベクトルを操作しているためそれはさながら弾丸のようだ。一直線に突き進んで、寸分違わずに目標を撃ち抜く。

並みの人間ならここで終わっていただろう。実際、アクセラレータ一方通行には触れられただけで死ぬ。

こちらからは触れられない。攻撃は当たらない。

ばかばかしい程のアドバンテージ。

戦いにすらならない。まさにふざけたワンサイドゲーム一方通行。

これほどまで『最強』が当てはまる存在もそういない。

しかしながらそれに対峙する言波とて、過去『闇』の頂点に君臨していた1人。

言うなればアクセラレータ一方通行の前任者。その程度でやられる筈がない。

言波は動かなかった。避ける素振りすら見せなかった。

直後 - - -

アクセラレータ一方通行は地面に叩きつけられた。

「がッ、ハッ……」

垂直にかかる強大な何かの力が彼を倒れ込ませたまま地へと縫いとめる。

「重力だよ。お前の“反射”を破る方法の1つだ。」

何ともなしに、それだけ言う。

「触れられないというのなら触れなければ良いだけの話だ。別の方

向からアプローチすれば良い。」

「例えばそう……重力。もし重力を反射すればお前は歩く事は出来るか立つことも出来ない。」

「……つまり、重力は反射の壁を抜ける力の1つだ。それを操作すれば、お前にも届く……?」

「ククク、ヒヤハハハハハハハハハハ!!!」

笑い声が迸り、炸裂した。地面に叩きつけられながらも、未だ楽しくて仕方がないというように。

「イイネイイネ、素晴らしい!最高にやるじゃねエか temeエ。あのガラクタ共の百倍はおもしれエ!!!」

ガクンと、倒れ込んでいた体が垂直に起き上がる。どうベクトルを操作すればそうなるのか不自然過ぎる動きで。

「ちッ、」

やはりこの程度では足留めどころか時間稼ぎにもならない。こんなザマでは、勝利することはおろか生き残る事自体も奇跡の域になっ

てしまう。

そう、例えどれだけ狂ってようがどれだけの悪党であろうがそれは『最強』を否定する理由には届かない。

腐っても一方通行は第1位。その能力はまさに頂点。  
アクセラレータ

重力のベクトルを操られたら、せつかくの戦略も水泡に帰す。勿論これで倒せる等は微塵も思っていなかったが、それでも早すぎる。

具体的な戦術を練る時間くらいは欲しかった。

「くッ、でたらめな演算速度だな。解析が終わるのが早すぎる……  
!!!」

「とりあえずテメエはこの場でひしゃげてろ三下ア!!」

手が延びる。指先が微かに触れただけで残酷な死を与える魔手が。

「チッ、……一撃。  
ファースト

パンツ、と

乾いた音がやたらはつきりと聞こえた。

「ア……？」

それは一方通行の手が払われた音だった。  
より正確に言えば手に触れられた（、、、、、）音だった。

一方通行の思考は一瞬だけ停止する。そして言波にとってはその一瞬間が出来るだけで充分だった。

「セカンド  
式撃」

バゴオツ！と今度こそその拳は一方通行の顔面に突き刺さる。

能力に依存していた為<sup>一方通行</sup>に一方通行の元々のポテンシャルはかなり低い。

はつきりいえば並みより以下。

それに比べれば言波の身体能力は常人よりもはるかに高い。仕込まれたのは本物の戦闘術。文字通りに戦う技術だ。伊達に戦場を生き抜いた訳ではない。

この年齢からは考えられない程の修羅場をくぐってきた。

破壊という一点に置いてなら最強の名は言波にこそ相応しい。

戦況は大きく傾いた……かに見えた。

「ゲホツ、ゴホツ、ぐっ……」  
突然言波は大きく咳き込んだ。<sup>一方通行</sup>の“反射”を解析する程の演算。膨大な能力の行使。彼の弱り切った内臓はその反動に耐えられなかったのだ。

発作が起きた。真つ赤な鮮血が口元から飛び散る。

「クソツ、何だつてこのタイミングで……!!」

目が霞み、視界が揺れる。飛びそうになる意識を必死で支えながらどうにか持ちこたえるが、やはり動きが一気に鈍くなる。

更にはいつの間にか起き上がっていた一方通行がまたこちらへ向かって来ていた。

流石に一撃で仕留めるのは無理があつたのだ。

「殺す!!」

手を、指先を広げる。内臓から血管から根こそぎ爆発させる為に真っ直ぐ突き出して。

間に合わない……!!

反応が遅れた。感覚では捉えているのに、肝心の肉体の方が追いついていない。

全てをひっくり返せるような奇跡は起きない。

死ぬ……

それを明確に理解できる。

恐怖は無い。代わりに心を満たすのは怒り。







強制的な“抹消”が

短絡的な“暴虐”が

虐殺する“凶器”が

- - - 完成する。

アクセラレータ  
一方通行は切り札を手に入れた。少なくとも言波よりはよっぽど有利なカードを切った。

もう彼は止められない。破壊と殺戮に荒れ狂う怪物と化した一方通行<sup>↑イタ</sup>を止められる者など存在するのだろうか？

頭上に展開された風の塊は圧縮され、『プラスマ高電離気体』となった。

- - - ……本物の絶望が牙を剥いた。

## とある論理の終焉虐殺（前書き）

テスト終わったぜ、ざまみろー！らあぁあー！！

そんな訳で、更新です。何か話がーちやーちやです。

## とある論理の終焉虐殺

ゴアッ！

渦を巻いた暴風の塊は、圧縮され巨大なプラズマと化した。

それが持つ高熱はある程度の距離があるにもかかわらず肌を灼かれる感覚を与える程だ。

「……………最悪だ。」

真正正銘最悪の絶望を目の当たりにして、流石の言波も戦意を喪失する。

こちらの持てる力は全て注いだ。切り札も一方通行アクセラレータというたった1人の存在を倒す為に使い果たした。

それでも……………倒れない。屈しない。やはり『最強』には勝てないと改めて認めざるを得ない。

一時的とはいえ、彼を追い込めた事。それが既に奇跡だったのだと思わざるを得ない。

ベクトル操作。真の恐怖はそこにあった。方向を掌握するだけでこつも簡単に世界を滅ぼしかねない兵器を生み出す事が出来る。

単純な演算能力だけなら言波が上回っていた。これは事実だ。全てを掴み取る能力。確かに『闇』の頂点に君臨するに相応しい力であ

ることに間違いはない。

ただ、それでも一方通行には勝てない。  
アクセラレータ

常時能力を使用出来る彼とは異なり、言波は瞬間でしか使えない。  
更に自らの体にもダメージが与えられる。

メリットよりもデメリットの方が多いのだ。

要は単発と連射の違い。

マグナムは一発の威力は強くても連射能力が高いマシンガンには適  
わない。

それと同じだ。

「オラア、どオしたどオしたア！カッコよく形成逆転でもしてみろ  
よオー！こっちはまだまだ付き合ってもらわねエと割りに合わねエ  
ンだっつのオー！！」

「ちツ！、くそったれ……。」

吐き捨てた所で、何も変わらない。ダメージが帳消しになる訳でも  
ないし、ましてや状況がひっくり返る筈もない。

……だが、あくまで何もしなければだ。

既に“覚悟”は出来ている。この命ここで散らせるつもりで来た。



雄叫び、絶叫。痛みに耐える為か、心の内をさらけ出しているのか。決死の行動。見る見るうちに命が削られているのが、分かる。だが、そこで

「止める言波！！」唐突にこの場には存在しない筈の第三者の音が響きわたる。とっさに目を向けるとそこにはいたのだ。

憎らしくなる程のベストなタイミングで、正真正銘のヒーローが。言波がどれ程追い掛けようと決して並ぶ事はできない主人公が。

上条当麻が

立っていた。

「当麻？何で来たんだ！あのままならまだ、引き返せた。普通に暮らせることが出来たんだ！お前はこんな所にいるべき人間じゃない。こんな『闇』に汚れるべき人間じゃない！」

無事に生きて帰す為にも、これ以上踏み込ませてはならない。逃げることは恥ずべきことではない。このような場合においては生き残れば勝ちなのだから。

「もう充分だ。こんな目に会うのは俺だけで良い。頼むから……早く逃げてくれ。」

「ふざけんな！……全部御坂から聞いた。お前の命が長くないことも、お前がここで死ぬ気だということも。……させねえぞ！絶



「対お前は死なせねえ!!」

（何で御坂が?……そうか、幻想殺し（イメージブレイカー）か。迂闊だった。まさかこんなに速く来るとは思わなかったからな。）

「……全部知ったのなら尚更分かるだろ?俺は生きてちやいけな  
いんだ!!潰した命の上で生き長らえることなんか出来る訳がない  
……。」

「まだそんな事いつてんのか!確かに俺はお前が抱えている闇なん  
ざ片鱗位しか理解してねえ。お前がやってきたことその全てを知っ  
ているわけじゃねえ。」

「だがな……、一言区切る。」

「だからこそお前は生きるべきなんじゃねえか!お前が奪った命に  
対してその分、1秒でも長く。それが償いつてもんだろ。」

何故だ。どうしてそんな事が言えるんだ。恐ろしくないのか?俺は  
殺人鬼なんだぞ。何人も何人もこの手で葬ってきた。

罪悪感など感じる暇もなく、次から次に叩いて、潰して、裂いて、  
抉って。

俺は救われる価値がない人間だ。死んだほうが良い人間だとそう思

ってきた。

なのに、それなのに。

何故涙が流れる？

何故、こつも心に響くのだらう。

「過去に縛られるな！顔を上げて前を見る！！お前が思っているよりも世界はお前を嫌ってねえ！！」

「……分けるよ。苦しみも、迷いも、痛みも、全てを一人で抱えるな。俺も一緒に背負ってやる。……だから帰ろつぜ、俺達の日常へ。」

過去に縛られるな、前を見る。こんな自分でも受け入れてくれる存在がいた。

「……俺はまだここにいて良いのか？生きていても良いのか？帰る場所が有るのか？」

自答はできない自問。

その眩きは虚空に流れ、そして

「あたりまえだろ。」

その一言で返された。

「そうか……、なら俺はまだ死ねないな。少なくともこれを終わら

せるまでは。」

最後まで足掻こうじゃないか。無様だろうが、卑怯だろうが関係ない。

奪ったものはもう元には戻せない。ならば、せめて今有るものだけは守り抜く。

それを自らの進む目的と定める。

「ハッ、くだらねエ。雑魚が2人に増えたからって何だっつてんだ。0には何をかけても0なんだよ!!」

「……ほざいてろクズ野郎。テメエには一生分かんねえよ。チカラしか求めずに他には何も見えてねえテメエなんぞにはな。」

「へエ、だったら証明してみろよ。テメエらに出来る事ってのをよオ!!」

しかし、ここで一方通行の脳裏には疑問が浮かんでいた。

（何でコイツはまだ立ち上がる？チカラの差は歴然。俺に勝てる可能性なンぎ万に1つもねエ。……訳分かんねエ。）

それは恐らく今の彼にはまだ到達出来ない地点。

力の大小で強弱を判断し、理論で物事を理解している彼にはまだ到底届かない領域。

理屈では計れない。

考えるだけでは……分からない。

とは言え、殆ど打つ手が無いのもまだ事実。

当麻が持つ幻想殺し（イマジンプレイカー）は有力だが、効果範囲はあくまで右手のみ。

残念ながらこのような大規模攻撃に有効打とは言い難い。

「ハツハア！さんざ吠えてっけどよオ、結局なんも変わらねエじゃねエか！！これが現実だ。変更できない確定事項だ！」

もう、頭上に浮かぶプラズマははっきりとその姿を現している。

そして如何に凄まじい被害をそのプラズマが与えるとしても、一方アクセ通行は躊躇せずラレタに解き放つだろう。

「テメエらはこの一方通行には勝てねエ！ここで消し飛ばしか道はねエンだ！」

選択肢は1つだけ。再び能力分解公式を構築する。

一方通行のベクトル反射のパターンは既に解析した。そこに生み出される、彼が反射を無意識の内に通してしまう“隙間”を徹底的に突く。

それが能力分解公式だ。

一方通行を上回る高速演算は、確かに甚大な負荷がかかる。

それは決して看過できるレベルではなく、今の体の状態なら更に命を縮める事になるだろう。

しかし、言波は躊躇わない。ただし今回は命を捨てる“覚悟”ではなく、生きる“覚悟”。

必ず帰る為に、1度だけ全てを賭ける。

そして演算を開始しようとした

その刹那。

視界の隅で何かが光った。一瞬だけ銀色が閃く。

直後

ゴツツツ!! - - -

轟音が響き、暴風が吹き荒れた。

その後には、何も残っていない。

消えていた、跡形もなく頭上に渦巻いていた『プラズマ高電離気体』が文字通り消滅していた。

「あ……………?」

余りにも唐突に起こった現象にアクセラレータ一方通行も呆けたような声を漏らす。

5秒だけ場が凍る。

そしてきっかり5秒後、世界は再び動き出した。

先手を討ったのは言波。どうしてプラズマが消失したのかは不明だ。

ただ、1つ確定している事は脅威が去ったという事。

再び、風のベクトルの計算を開始するアクセラレータ一方通行。

しかし、遅い。あれほどの巨大なプラズマを作り出すには一方通行アクセラレータの演算能力をもつてしてもタイムラグが発生する。

ここで、もう一度言わせてもらおう。

言波の演算能力は一方通行アクセラレータのそれを上回る。

劣る所は能力の連続性。

ならば、例えたようにマシンガンの弾が切れたなら…。

マグナムには後一発弾が入っているとすれば。

どちらが勝つかは自明の理。

「くッ、そがアアアアアアアアアアアアあああああああああああああああ  
ああ!!!!!!」

演算が間に合わない。

間近に見える“敗北”。

認められない。認めたくない。

力がある。『最強』ではまだ足りない。望むものは『無敵』。

誰も相対さえしないような、戦おうという気も起きないような圧倒  
的な力の象徴、『無敵（レベル6）』。

それを得れば、惨劇は起きない。暴力が暴力を生むような負の連鎖  
を断ち切る事が出来る。

故に、一方通行アクセラレータは力を求めた。

彼にとってはそれしか方法が無かった。幼いころから、目の当たりにしてきた破壊と悲劇の永久ループ、それを止めるにはレベル6を目指すしか無かったのだ。

だから、彼は止まらない。今彼に残っているのは殺戮衝動だけだ。

自分にとっての災いを、つまり、自分の全てを否定しかねない目の前の敵を叩き潰す。

地面を蹴ってロケットのように迫り来る一方通行。アクセラレータ

対して言波も一方通行アクセラレータに向かって走りだす。

「“最強”もここまでだ。歯ア食いしばれよ第1位。そして実感しろ。何もかも壊して行き着く先はこんなもんだ。」

能力分解公式を展開させた右手を思いつ切り振り抜いて

「力の意味を理解しろ。いつまでもこんな所にしがみついてんじゃねえよ馬鹿野郎が!!」

両者の交差は一瞬。

勝敗を決めるにはそれで充分。

バゴオ!!

鈍い音と共に一方通行アクセラレータの顔面に重い一撃が突き刺さる。



その体は衝撃で後方に吹っ飛び、地面に転がった。

1度体が大きく跳ねて、それっきり動かなくなる。

今度こそ学園都市最強はその狂乱を終わらせた。

それを見届けてから言波の意識も薄れ、その場に倒れる。

傷つき、血だらけになりながらもその表情はどこか晴れやかで。

闇に染まっていた人間とは言ってもそのボロボロの姿は本物のヒーローのように壮観に見えた。

\* \* \* \*

「……やれやれ、ずい分勝手な真似をしてくれたるわね神白。」

日本から遠く離れたイギリスの某所。

壮麗な建築物が建ち並ぶ中の1つの教会。

その中で、1人の人物が溜め息混じりに呟いた。

美しく流れる金髪を背中で折り返して留めているそれは少女。少なくとも見た目だけは18かそこらの整った容姿ではある。彼女の名

はローラ＝スチュアート。ここイギリスに拠点を構える世界三大魔術組織の1つ。イギリス清教の『アークヒショップ最大主教』だ。つまりはイギリス清教の事実上のトップ

同時に、イギリス清教の対魔術師部隊『ネセサリウス必要悪の教会』を束ねる者でもある。

そして今まさに彼女の愚痴のような物を受けている神白創。

「……その点については申し訳ありませんでした。均衡を崩しかねない浅はかな行動だったと理解しております。」

「はあ、まあこの話はもうよい。ところで神白、そなたの新しい任務の事なのだけねど。」

「……すいませんが、任務は暫く別の誰かに回して頂けないでしょうか？ 私はこれからもう一度学園都市に発ちたいと思います。」

「それは少し我が儘が過ぎたりけるのよ神白。そんなに言波なる者が気になりて？ ……全くブラコンも程々に……。」

ヒュンツ！唐突に空気を裂くような音が聞こえた直後、神白の右手には銀槍が握られていた。

彼にとって、今の台詞は聞き流せない。より具体的にいえば、最後のワードだけは。

「……今なんつったくら。」

「ヒイ！さつきまでの丁寧な言葉使いは一体どこに……！」

暴力的な口調に変わった。激昂するところなるところは言波に似ている。やはりは兄弟だからか。

「うっせえよ、馬鹿女。」

「ま、待ていなよ神白！。仮にも私はそなたの上司なりたるのよ？なのに馬鹿女とは失礼とは思わないのかしら？」

「はあ？そもそもテメエが、学園都市との訳のわからねえ契約書にホイホイとサインしやがるから始まったことだろうが！」

「俺が保護しなかったら『世界の治安を司る』連中に、イギリス清教を潰す格好の材料を与える事になったってのに。」

彼の背から負のオーラが迸っているように見えるのもあながち幻ではないのかも知れない。

「こっちが必死で飛び回って学園都市と交渉して、あの子の事も無事に終わらせてやっと帰ってきたってのにテメエは………」

「……1人呑気にアフタヌーンティーと来たもんだ。何があら、お帰りたるのよ。だボケエ!!!」

「ま、……まあまあ落ちつきたりて神白。我慢強いのが日本人の特徴なのであるう？ほら、そなたも紅茶でも飲んで。」

「黙れ馬鹿女。テメエが一番日本人バカにしてんじゃねえか。……ふざけた日本語しゃべりやがって。」

「んなツ！それこそ聞き捨てならぬ。いーい神白、私のは……」

ピタリと神白は携えている槍の刃先を無言でローラの喉元につける。

「このまま永久にしゃべれなくしてやるうか？」

「ままま待ちたるのよ待ちたるのよ神白。そなたの霊装は神をも殺せるのよ？無闇に人に向けてはいけないのではなくて？」

「そんなもん百も承知だ。だからテメエに向けてんだろ。ま、安心しろよ今の『ロンギヌス』にはもう力は1割程度しか残ってねえ。……そうだな。ここから半径10キロ圏内が吹っ飛ぶ程度か。」

「死!!!?、というか1割だけでその威力!」

「ああ、そこは大丈夫だ。周りは巻き込まねえよ。全部テメエに使うからな、凝縮させれば物体1つ塵にするだけで済む。」

「ちちち違いたりけるのよ神白!心配する点はそこではなしにつきなのよ!」

手に持つ槍の状態を確かめながら、真顔で言い放つその様子を見るからに本気でやりかねない。

余りにも具体的な結果を告げられ、ローラは冷や汗を流す。

「ああ?大丈夫だ、骨は拾ってやるよ。……あ、骨も残らないか。」

「うぎゃあ!?!さ、最後あたりにはそりと不穏なワードが聞こえたのだけれど?」

「気のせいだ。さあ…吹っ飛べごらァアあああああ!!!」

ドン!!

振るわれた槍から、閃光が放たれる。周りの空気を切り裂きながら、それは命中し

ポカンッ！と文字通りローラを吹っ飛ばした。

「……あいたたたあ」

叩きつけられた背中をさすりながら、もぞもぞと起き上がるローラ。

「ちっ、生きてたか。」

「ええ！？今のは実は本気じゃなくて、ちょっと驚かせてやるうかな的なドツキリでは無かったの？」

「……ちよつと手元が狂ったな。」

「肯定しない上に、照準の調整は止めてほしいのよ神白！？」

「ちっ、……次の任務は？」

神白は一度舌打ちをしてから、そう問い掛ける。ある程度の苛立ちは今ので解消出来たらしい。

「あら？、急に素直になりたるわね？…全く最初からそうなら良いのに。ブラコンの上にツンデレまでカバーしたるのかしら？」

ビュン！

言い終わるか終わらないかの所で、ローラの髪の毛が数本程断ち切れた。

「……次は首を飛ばすぞ？」

全く懲りていない彼女も、流石に冗談では済まされないと判断したのだろう。冷や汗が先程よりもひどくなっている。

何しろ神白の目はマジだ。

「じ、冗談よ？冗談なりたるのよ神白。」

彼が放つ禍々しい程の殺気は、その辺りのチンプラ程度なら一睨みで気絶させてしまえるだろう。

「……いいから早く言え。」

その言葉に、ならばと一言おいてローラは任務の内容を説明している。

その姿は先程のふざけた様子とはまるで異なっていた。

彼女とて世界三大魔術組織の長。何だかんだ云ってそれ相応の実力はしっかり持ち合わせているのだ。

\* \* \*

『目的地に到着以降は、随時報告を願います。』

耳元の携帯電話から機械のように、無機質で淡々とした声が流れてくる。

任務の内容はローラから説明を受けた。簡単にいえば、ある魔術結社を潰す事。

『闇招く剣』という名のその組織は構成人員五百名の大所帯。その行動が、イギリス清教の不利益に繋がったため敵性組織の迅速な殲滅を主に担っている“滅殺連隊”が出張る事になった。

彼らが出てきた以上、対象となったものには交渉もなければ、拘束もない。

有るのは『抹殺』。

いってしまえば、“滅殺連隊”とは暗殺専門の特殊部隊だ。

だからこそイギリス清教のどの部門よりも深い闇を知っている、正



に最暗部。

『闇招く剣』が、術式の構築に人間の命、つまり一般人を生け贄にしているという情報入手した為、大義名分はある。

堂々と大手を振ってぶっ潰せるというものだ。という事で、『闇招く剣』の本拠地があるイタリアの空港に神白は降り立った。しかし、イタリアは『世界の治安を司る』ローマ正教の領域である。幾ら正当な理由があるとは言え、彼らが良い顔はしないだろう。

早急に済ませる必要性がある。

そこで若干神白は苦い表情を浮かべた。腐っても相手はプロの魔術師達。戦力は五百対一と、かけ離れすぎている。

正面からぶつかるのは極力避けたいが、時間がない。勿論容易く攻略が出来るような相手達ではない。

こちらが討たれる可能性も考慮に入れて、行動すべきだろう。

具体的に作戦を立て始めた彼の思考を任務補助の連絡中継係である電話の声が遮った。

『尚、本任務は増援を予定しています。今より2時間後に、追加で3名がそちらに到着する予定ですので、合流してから行動を始めて下さい。』

「増援？」

予想外の言葉に、思わず聞き返す神白。そんな事は聞いていない。

単独だと思っていたから相応の準備もしていたのだが。

「ええ、あなたの部下が向かいました。」

「……それはまた珍しい。」

彼ら“滅殺連隊”が集団で動く事は滅多にない。メンバーは皆、それぞれの任務で世界中に散らばっている為だ。

それが3人も来るとなると……

「予想以上に厳しくなりそうだな……。」

今回の仕事はどうも一筋縄では行かないようだ。

神白は懐から取り出した純銀製のカードを手のひらで弄びながら、  
少しだけ眉を歪ませた。

この話から魔術サイドに突入します。とは言え、あまり神話とか詳しくないので不安だらけですが頑張っていきたいです。

後、更に文が粗くなってしまいました。申し訳ありません。

「来たか…。」

電話で指示された合流地点である古びた石造りの建物で、待っていた神白は前方の空間を見た。

先程までは、何もなかったのに今は3つの人影がある。何時の間に来たのだろう、気配を全く感じなかった。

「時間通りだな。説明は？」

「必要ありません。既に聞きました。」

金色の髪に赤いメッシュをいれ、ダメージジーンズに髑髏がプリントされたTシャツ、指にはシルバーリングを身に付けている10代後半位の若者が見た目とは反して丁寧な言葉を返す。

因みにこの奇抜な格好、どこかの聖人のように術式の構成に必要という訳ではなく単に彼の個人的な趣味である。

しかしながらその実力は折り紙付き。一週間程前に、別の組織に単身乗り込み壊滅させたと報告を受けている。

彼の名は『クリード・ジエイド』。ギリシア神話をベースとした魔術のスペシャリストだ。

その両隣にいる2人の男女も、それぞれが一騎当千の力を保有している。

内の1人、30代前半と見られる男性の名は『芦屋景久（あしやかげひさ）』。陰陽術を使用し、特に広範囲迎撃に特化した術式の使い手である。

最後の20代半ば位の女性は『シエンナ「グローウィン」』。此方は近距離戦闘を得意とし、主に東洋系の魔術を使用する。

「最初に言っておくが、今回の任務はかなり厳しい。場合によってはこちらが全滅するだろう。」それでも、誰も眉一つ動さない。その程度で揺れ動く精神力なら、もうとつくに死んでいる。一々恐れていてはこんな仕事は務まらないのだ。

「……説明は受けているだろうが、要約すると魔術結社『闇招く剣』の殲滅及び一般人の保護だ。容赦も加減も必要ない。交渉の余地も与えない、1人も逃すな。」

それは彼らの存在理由にそのまま直結する。滅殺、つまり殺して滅ぼす。

情けは不要、やるべき事を取り違えてはならない。

「最後の1人まで、叩き潰す。敵ならば女子供も関係ない。……忘れるな、一瞬の躊躇いで何もかも崩れる。毒をもって毒を制する、それが全てだ。」彼らはそんなもの始めから十二分に理解している。だからからといって別段好き好んで、殺しを行っている訳ではない。寧ろ出来るものなら誰も傷つけずに済ませたい。それはこの場にいる全員の本音である。

しかし、現実はそのも行かないのだ。世界の影で災いを与える者達がいる。日常の裏側から害をばらまく者達がいる。

ならば、それを防ぐのは同じ『闇』の人間しかない。

彼ら魔術師は信念も方向性も千差万別。中には本当に殺人狂も存在する。

残念な事に、彼らは自らの目的を達成するためならどんな犠牲も厭わない。例えばどれだけの命が失われようが、どれだけの悲劇が起きようが関係ない。

そしてそれらは言ってしまうに仕方ない事なのだ。そもそも魔術とは、才能がない者が才能がある者に並ぶ為の技術であり、それをどう使おうが個人の自由。

法も規定もない。踏みとどまるかどうかは各々の道德心の裁量のみ。

魔術はあくまでもただの力。それが、剣となるか楯となるかは使用者次第である。

それは理解している。だが、流石に奴らがやった事は看過出来るものではない。

不可視だが、不可侵の境界線。

越えてはいけないラインは絶対に守らなければならなかった。

「行くぞ。」

一言あれば充分だった。それぞれの姿が夜に溶ける。道を踏み外し

た者達に裁きを下す為、彼らは行動を開始した。

此方は4人。敵は500人。これだけ見れば、この任務は明らかに無謀だと思っただろう。それが一般常識だ。

戦いとはやはり物量が物をいう。どれだけ強大な力を持っていようとその差は単純計算でも100倍以上。

ここまで来ると無謀も通りこして最早不可能。

――しかし、それはあくまでも通常に考えたら、だ。

ならば、前提が間違っている。彼ら4人は1人1人が魔術サイドの超戦力。

魔術側の最強「聖人」を核弾頭に例えたとしたら、彼らは戦略兵器と言ったところか。

それは科学サイドでいう「超電磁砲<sup>レールガン</sup>」レベルに匹敵する。何にせよとんでもない力である事に間違いはない。

一度戦争に投入されれば、それだけで勝敗を左右するであろう超兵器。それと同等の能力を持つ彼ら。

最早人間という枠組みに入れて良いのかどうかも怪しい。文字通りの化け物達だ。

\*\*\*

「これから班を2つに分ける。私と芦屋が先陣を切る。その隙にシエンナとクリードが内部へ潜行しろ。最優先は一般人の保護だ。後に私達も合流する。」

『闇招く剣』の本拠地である、巨大建造物を前に神白は指示を出す。それに皆は無言で了承の意を示した。それぞれが戦闘の準備を始める。

「本任務はスピードが重要だ、素早く的確に行動しろ。長引けば長引く程こちらが不利になる。反撃する時間を与えるな、全力で叩け。」  
「時間はないが成すべき事は多い。圧倒的に不利な状況下で困難な任務を遂行しなければならない。これが彼ら“滅殺連隊”の日常だ。

手っ取り早く殲滅する為の組織。血に塗れた最暗部。評価は様々だが、実はその存在は世界中の魔術結社の内では余り知られていない。対峙して初めてその名を知り、その力に怯え、散っていくのだ。最強で、最凶で、最狂の特殊組織。

彼らは『闇』に生き『闇』を喰らって、均衡を保つ。

「……………始めるぞ。行け！」

言葉と同時に、取り出した純銀製のカードを手に詠唱を開始する。

『我が右手には断罪の剣、鋭き音と共に鋭き裁きを為せ！！』

そのまま右手を振るう。一閃、雷撃にも似た光の束が合わさり、爆



ぜた。

巨大な熱の塊が荒れ狂いながら、爆風を撒き散らす。

「最初の段階はクリアしたか……、来たぞ！」

大地を揺るがす程の衝撃に、『闇招く剣』側からも魔術師が投入される。

シエンナとクリードは既にいない。此処から先は一分の隙も見せる事は出来ない、完全なる魔術戦。

目測で先行部隊は凡そ二十人。後方に控えているのを合わせれば合計で五十人。これでも全体を考えると10分の1程度なのだが。

一斉に攻撃が放たれた。電光が槍のように飛来し、炎の球が大気を焼きながら迫り、氷の刃が蛇のように地を這う。

ポツツツ！と音を全て固めたような衝撃波が炸裂した。

地表は砕けて抉れ、凄惨さを極めている。芦屋と神白がいた部分も地面ごと、丸々消し飛んでいた。

あれほどの掃射を食らったのだから無理もない。それはまるで空爆のようであったから。

粉塵が散った後には2人の姿は見えなかった。

やった！『闇招く剣』側の魔術師は確信する。だが、歓喜は沸かない。

そんなもの至極当然の事である。たかだか2人の魔術師如き、塵にするなど造作もない。彼らにも大規模な組織を支える分の力量はあるのだ。

……だが、それは慢心。彼らは見誤っていた。芦屋と神白は彼らの知り得るレベルの魔術師ではなかった。

正しく次元が違う。そもそもたった2人で正面から衝突してきたのだ。

無謀なその行動。やるのは身の程知らずの愚か者か、それを成すのに相応の実力の持ち主かのどちらかだろう。

この場合に置いては間違いなく後者だ。

……上空から一筋の稲妻が落ち、『闇招く剣』の前方の空間を裂く。

荒ぶる雷神の如き猛攻。独特のイオン臭が立ち込める。

雷撃が落ちた後の空間には、二つ分の人影があった。

傷一つないその姿。それを見た瞬間『闇招く剣』は漸く気付く。両者の間には大きな隔たりがある事に。

それは余りにも巨大な壁。遠すぎる、高すぎる。力の差をこうも明確に意識させられるのが恐ろしい。

数の利は有って無いようなものだ。最早意味すらも無い。有ったとしても機能するかは危うい。『……跡ヲ区切り場ヲ作り、我が手ヲ添エテ杭ヲ打ツ。』

『闇招く剣』の下方、正確に言えば接触している地面が生き物のように波打った。たわみ、緩んで延びる。

明らかに尋常ではない現象、だが、彼ら魔術師の住む世界はそれら全てを肯定する。

異常は正常。異質は常識。

何が起きるかは分からないが、何かが起きる。『闇招く剣』は逃げない、否、逃げられない。

見えない壁があるように、彼らはそこに縫い付けられている。

……結界。古来より魔を寄せ付けない限定された空間を総称してそう言う。

現代で言うならば、神社の鳥居なども一種の結界である。例えば、注連縄。例えば、木の杭。これらを用いる事で結界は生成が可能。また結界の空間を限定するという部分だけ抽出すれば、対象を閉じ込める檻を作るのも可能。

『四方ニ四獣ヲ配置、制定サレシ場ニ置イテ我が命ヲ伝エル。北ノ玄武、南ノ朱雀、東ノ青龍、西ノ白虎、中心ニ麒麟。』

陰陽道には五行説というものがある。世界を形作る五つの法則。

木は火を生み、火は土を生み、土は金を生み、金は水を生む。

これに対応する五体の獣、それを操る事によりその対応する力も操る。

それが、芦屋景久が得意とする術式だ。効果領域は古代の京の都と同等。東西に4・5キロ、南北に5・2キロ。その範囲内であれば一気に打ち碎ける。

『五獣二五行ヲ満タシ五方ヲ封ズ。我が左手八縄ヲ掴ミ、我が右手八力ヲ振ルウ。』

詠唱終了。同時に敵側を捕らえた空間の中で、巨大な衝撃波が炸裂した。

大気が軋む程の爆発が『闇招く剣』の魔術師達を飲み込んで行く。

これが芦屋の『広範囲迎撃術式』。

彼のフィールドにいる以上逃れる術はない。ましてや抵抗など出来る筈も無く、血も骨も肉も全て消し飛んで塵となる。

“滅殺連隊”の行動指針は抹殺。それは文字通り死体さえも残さない完全な消滅。

屑には相応の終焉を。真つ当には葬らない、天国に逃がしはしない。死んで尚、永久に苦しみ。

これがイギリス清教最強の特務部隊の姿だ。

**B l a c k · A r t (前書き)**

久し振りでず。

「シッ！」

鋭く息を吐き、携えた剣を振るう。単純な造りだが、巨大な刀身を持つその剣はクレイモア。重火器が普及した近現代においてもイギリスの戦争で実際に使用されていた大剣だ。白兵戦に特化しているシエンナに取っては最も使いやすい武器である。

一振りで数人の魔術師を単純に剣技のみで斬り伏せたその実力は最  
早鬼神のごとし。魔術を加えて剣を振るえば『聖人』とも互角に戦  
えるらしい。

核弾頭と同等だと云われるのと同じ事だが、洗練された戦闘技術か  
らはそれも頷ける。

「……、俺いました？」

余りの圧倒的な力にクリードが呟いた。

必要最小限の動きで、最大の戦果を残す。世が世なら戦場でその名  
を残したかも知れない。

「まあ、そう言わない。あなたはあなたで役に立つ時が来る。……  
今は邪魔だけど。」

「最後の一言なかなか刺さりますよ。」

ザヒュッと空気を裂く音と共に石で造られた壁がバラバラに斬り刻  
まれた。

「この先みたい。一般人が幽閉されている所。」

暗く深い空間が地下に向かってぱっくりと口を開いている。

周りの敵はあらかた殺した。後は一般人を救出すれば、任務は終了なのだがどうも腑に落ちない。

腐っても『闇招く剣』は人員、実力ともにトップクラスの魔術結社だ。

こんなにもスムーズに進む事それ自体が奇妙。常に最悪の状態を想定し、最善の方法を考慮するのが彼ら“滅殺連隊”。

決して油断はしない。

「取り敢えずサーチかけてみます。」

クリードがポケットから取り出したのはキーホルダーのように小さな梟の模型。それを手に取り、手首のスナップで中に投げ入れる。

すると落下していた模型が空中を飛び始めた。ギリシア神話に置ける知恵と戦争の女神アテナは、梟を使って下界を観察していたと言われている。

そのエピソードを元にした単純なサーチ魔術だ。

「……特に何も見当たりませんね。」

更に探索を進めるクリード。所々に魔術を使用した痕跡らしいものは見当たるが、どれも警戒するようなものではなかった。



……最後の1つを除いては

「……、ッ！」

余りにもおぞましい光景に思わずクリードは息を飲んだ。

「…どうしたの？」

「…見ない方がいいです。」

とてもじゃないが正視出来るものではない。あんな事、人間として終わっている。

彼が見たのは夥しい人間の“破片”。恐らく魔術的な実験の成れの果てだろう。まともなメンタルを持っていれば、一分と経たずに壊れてしまうような正に惨劇。

「…戻ります。残念ながら、ここには生存者はいません。他を探しましょう。」

悲痛そうなのその口調に全てを悟ったのかシェーナは了解の意を示した。

「…そう。分かった。早く行きましょう。時間がない。」

目に見えてふさぎ込んでいる様子のクリードにそう言葉をかけて彼女は歩き出した。

本当なら慰めの言葉もかけてやりたいのだが、生憎その時間も惜しい。長引けば物量からして不利になるのは此方なのだから。

それに“滅殺連隊”にいる以上、人の死などは日常茶飯事だ。非情な事を言うようだが、“慣れてもらわないと困る”。  
足早にその場を去るシェーナ。その後ろに続くクリードはポケットの中で血が滲む程に手を握り締めていた。

\* \* \*

「あらかた終わったな。芦屋！そろそろ合流するぞ！」

「了解した。」

50人もの魔術師を一撃で葬り去った彼らも建物内に入り込もうとした。

「奴ら”が出てくる前にある程度は終わらせなければ……」

“奴ら”神白はそう言った。それは魔術結社『闇招く剣』を束ねる4人の長。そして今回の作戦を困難なものとしている元凶達だ。

単純に戦力だけで見るのなら、この作戦はそれ程難しくはない。500人の魔術師として“滅殺連隊”にとっては所詮烏合の集も同然。

真に警戒すべきは“奴ら”だ。その力は未知数。使用魔術も不明。いずれは当たるとしてもなるべくなら殆ど終わらせてから集中した

い。  
未知の脅威程恐ろしい物はない。何しろ対策の立てようがないのだ。どうすればどうなるのか、どこを攻めれば有効なのかまるつきり分からない。マニユアルがある筈もなく、自分で分析して、解析して解を導くしかない。

完全なるX、そこに何かあるのかを探り、仮定し、求める。間違えた時点で終わり。やり直しが効かない高度な計算問題を延々と解き続ける。魔術戦を例えるならばこうだ。

ただ単純に呪文を唱えて発動などそんな気楽なものではないのだ。ちゃんとした原理に基づいた“技術”である以上どこかに穴がある。そこをつけば勝てるし、逆につかれれば負ける。そしてこのような戦闘で負けた後に待っているのは死のみだ。それは勝負ではなく殺し合いなのだから。

見逃す訳もなく、迅速に完全に排除し尽くす。それを躊躇いなく行えるのが暗部であり、行わなければならないのもまた暗部である。

「おいおい、派手にやってくれちゃってんじゃねえかよ！こりゃあ俺も見過ごす訳にはいかねえよなあ？」

「下らん。ただ単にお前は暴れただけだろうが戦闘狂が。」  
前方から突如2人の人間が現れた。まるで空間から滲み出してきたように、本当に一瞬で。

紛れもない殺気。形容し難いその雰囲気。今までの奴らとは質が違う。明らかに何度も死を潜り抜けて来ている。

「このタイミングで来るか…少々マズいな。」

「……………」

その現れた2人に苦い表情の神白と無言で戦闘態勢を整える芦屋。

『闇招く剣』を束ねる4人の長。

事前に与えられた情報により名前と顔だけは知っている。それすらも苦心して手に入れた程に、彼らに関する情報は少ないのだが。

「『封殺将兵（flicctum）』『ルイズ・バルドース及び、ライド』SIIクレヴァント。」

色濃い死の匂いを纏う2人は、立ったまま動かない。が、彼ら魔術師には理解出来る。

お互いに向かい合った時、いや、最初に顔を見た時。その時から既に戦闘は始まっているという事を。

イギリス清教『必要悪の教会』ネセサリウスが擁する最強の部隊と魔術結社『闇招く剣』の頂点に君臨する最凶の集団。

- - 正面衝突。

喰うか喰われるかの二者択一。集中して対応しなければ屍を晒すのはこちらの方だ。

頭脳を使った体力勝負。魔術を用いる戦いとは見破られたら死ぬ。欺き、穴を固めて、敵を貫く。

それが最も重要な事。思考はシンプルにただ敵を殺すとそれだけだ。

## S h o t ・ d o w n

「…さて、ここからは俺も本気でやらせて貰います。すいませんが手出し無用で。」

クリードの押し殺した殺気にシエンナは背中に何か冷たい物を感じた。これほどの怒りを見せる彼も珍しい。一番年齢が若い分、直情的なものも仕方ないのだろうが。

「了承した。」

クレイモアを背中に収め、彼女は一步その場を下がる。流石の彼女も連戦に次ぐ連戦で体力を消耗していたようだ。

微かにだが、額に汗が浮かんでいた。そろそろ休息をとってもいいだろう。

彼も言ったように手出しはしない。と言うより必要ない。彼も魔術師であり、実績に裏付けられた実力も備えている。

それはシエンナが出来れば本気で戦いたくないと思うレベルだ。『聖人』と同等の彼女が戦闘を拒否する。クリードの実力を示すにはそれだけで充分だろう。

2人の目の前には『闇招く剣』の魔術師達が20人。その全てが戦闘態勢に入っている。

対峙するのはクリード＝ジエイド。こちらはポケットに手を突っ込んだ状態で微動だにしない。

「1つ聞く。お前たちの目的はなんだ？一般人の命を犠牲にしてでも成し遂げなければならぬ物なのか？」

口調は穏やかに。だが、言葉の端々に隠しきれない敵意が現れていた。

「貴様に言っただとしても到底理解出来んよ。人は死して新たな存在となる。この貴重な実験を有害だと判断する貴様達のような愚か者にはな。」

吐き捨てるように1人が言い放った。筋が通っていない宙ぶらりんな論理。

冷静沈着を絵に描いたようなシエンナでさえも、怒りを覚えたのかその端正な顔を強張らせている。

クリードならば尚更だろう。

「そうか…もういい。これ以上聞く価値もない。テメエらの薄汚ねえ思考なんざ理解するだけ時間の無駄だった。」

ポツリと呟く。怒りも通り越して感情が誤作動を起こしたような虚無感。

「そんな下らねえ理由で、あんな事を…」

次いで

「……ふッ、ざけんじゃねえぞクス共がアアアあああああ！」  
内臓が震えるような激昂。同時に炸裂する爆音。

バヂィッ！！

雷撃が空間を大きく裂いた。  
地面を真っ二つに割る程の電光が迸り、独特のオゾン臭が立ち込める。

しかし

クリードにとってはこれでもまだ威嚇のレベル。イギリス清教が擁する『戦略兵器』その力はこんなものではない。

そして、こんなもので終わらせるつもりもない。言うなれば今のはお遊び。ただの前戯。

……本番はこれからだ。

\* \* \* \* \*

建物正面で対峙し合う神白創、芦屋景久とルイズ＝バルドース及び  
ライズ＝S＝クレヴァント。

双方とも並みの魔術師達ではない。本物の実力者だ。向かい合っているだけでとんでもない威圧感を感じる。



「滅殺連隊」の神白創と、芦屋景久だな？」

燕尾服に片眼鏡モノクルを身に付け、オールバックにした黒髪に黒目。有能な執事を思わせる雰囲気モウキの若い男はルイズルイズ「バルドース」。

長身、通った鼻筋に薄い唇。姿だけを見ればどこかで俳優でもやっ  
ていそうな端正な容貌だ。

しかしやはりと言うべきか。人を殺し慣れているような危険な光が  
目の奥にあった。

「ほう、私達を知っているのか？あまり目立つ事はない日陰者なの  
だがな。」

軽く返す神白。

「そうだな…イギリス清教の最暗部だ。目立たない日陰者とは、暗  
殺部隊である君達には最高の誉め言葉だろう？」

言葉もまた武器。派手にぶつかるだけが戦いではない。

「んな事アどうでもいい。俺が知りてえのは単にテメエらが強いか  
どうかっただけだ。とっとと始めようぜ！こっちはうずうずしてん  
だよ！！」

好戦的な叫び声が彼らの心理戦を遮る。それにルイズは不愉快な表  
情を示した。

声の主は見た所10代前半くらいだった。若いを通り越して寧ろ幼  
い。彼の名はライドライド「S」クレヴァント。金髪に碧眼。腰からチエ

ーンを下げたブラックジーンズにレザージャケット。首には十字架のネックレス。

一見すれば、ストリートギャングのような出で立ちだ。

「…短絡的思考回路は少し黙ってる。」

「ああ！？何だとコラ！！テメエから先にやっちまうぞ！！」  
ゴバン！

突然爆音と共に地面が炸裂し、岩や土がミサイルのように上空に舞い上がる。

地面の爆発は言い争っていた2人をまともに飲み込んだ。

先手必勝

彼らの話を待つてやる義理もない。生まれていた際は最大限に利用させてもらう。

『五獣の麒麟』芦屋が使用する術式の1つだ。その真髄は土の制圧。元々は防御に特化した魔術だが応用によっては攻撃にも転換出来る。岩や土、単純に質量だけでもかなりある。それを上空に跳ね上げるなど彼の術式を用いれば造作もない。

亜音速で打ち上げられた岩の弾丸が彼らを飲み込んだのだ。とんでもない威力である事は間違いない。

しかし。

これでもまだ決定打にはならないだろう。そもそも不意打ちとはいえ初撃で倒せる程度なら、わざわざ“滅殺連隊”が出張する必要がない。

“滅殺連隊”には、最も困難な仕事が回される。要はそれに足る戦力であるという事だ。

そんな彼らに与えられた今回の殲滅任務。容易に終わる筈がない。芦屋にしても最初から決定打など望んでいない。少しは体力を削られれば。ただそれ位の考えによるものだ。

「不意打ちか？目的達成の為なら手段を選ばないってのは本当みただいな。」

芦屋の後方にいつの間にか、ルイズが立っていた。術式をまともに受けていたのに、何故か傷一つないままで。

次に

「ヒヤツハアアア！！」

と雄叫びを上げながらライドがいつの間にか握っていた槍を垂直に構えて神白の真上から降ってくる。

「ッー」

とつさに回避した一瞬後に神白がいた場所に槍が突き刺さった。円形に衝撃波が広がり、地面が割り砕ける。

人肉など一発で弾け飛んでいた事だろう。

「ちツ、外したか。」

全く迷いが無いその一突きはまさに一撃必殺。何のことはない。躊躇いなく殺しにきているのだ。

一瞬でも油断したらその瞬間に死ぬ。それ位の覚悟がなければ、この世界ではまともに立つ事すら出来ない。

更に言うならば

「2秒のロスだ。覚えておけ。それが生死を分ける境界線になりうる事を。」

有利、不利は幾らでも逆転できる。

神白はこちらにも手にした槍をライドの喉元目掛けて真横に薙いだ。

ザギイイイン！

金属同士のかち合う音が響き、火花が散る。ライドが自分の槍で神白の一撃を受け止めたのだ。

「へえ、それが『ロンギヌス（神殺しの槍）』か。なるほどなかなか強力そうじゃねえか。」

『神殺しの槍』ロンギヌス . . . . .それは神白が持つ超一級の霊装の名だ。

所持者に世界を制覇する力を与えるとされている神の子の処刑に使われた槍。

余りにも有名すぎるエピソード故に強大な力を持つ霊装である。

「なか（・・・）なか（・・・）強力そう（・・・）で済むかどうか試してみるか？」

ギヤリツ！ガギギイ、ザギイイン！

一閃、二閃、三閃

銀色の光が閃く度に火花がシャワーのように飛び散る。明らかに刃こぼれしてもおかしくない程の衝撃だが、全く変化しないのはライドが持つ槍もただの槍ではないのだろう。

それでもなければ、先程の大地を砕いた一撃を放てる訳もない。

そして・・・

神白はライドが持つ槍の正体を知っている。

五つに分かれた刃先、その全てが時折発光するその姿。

神々しくもあり、どこことなく不気味なものも感じるその雰囲気。

名は・・・

「『貫通の槍』ブリューナクだな？」ケルト神話に置ける光の神ルーが所持する武器。振るえば、五つに分かれた先端から光を放って敵を打ち倒し、投げれば万物を貫くと云われる。

故に貫通の槍。

「御名答オ！よくご存知で。じゃ、まあ試してみようじゃねえか。貫通の槍と神殺しの槍、どちらが強えかをよお！！」

どちらの槍にも共通している事がある。それは所持者に勝利を与え  
るといふ物。

だが、殺し合いで勝利者はただ1人。命運を分けるのは霊装の性質  
ではなく、個々の実力の差である。

勝つ事は生きる事で負ける事は死ぬことだ。

喰うか喰われるか

奪うか奪われるか

2つに1つ。究極的な二者択一。

彼らは同時に叫ぶ。

魔術という異能の技術を修得する時に魂に刻んだ名前を。

それは魔術師同士の覚悟を示し、本気でぶつかる際の殺し名にも等  
しい。

「judicare025（我が手は大罪を打ち砕く）！！」

「virtus215（我が力は我が正義の為に）！！」

「「こちらも始めようか？」

「……さっさと終わらせる。」

芦屋とルイズ。彼らの戦も今から始まる。終わるとすればどちらかが屍を晒すまで。

「名乗って置こうか。私の魔法名はf a i s s u s 1 3 2（偽りなき世界を作る者）だ。」

ルイズは力を込めてそれだけ言う。何かに耐えるような表情が一瞬だけ見えた。

「ならば此方も名乗ろう。∴ d u c t u m 3 0 1（正しき道を照らす者）」

刹那の間を置いて。

ズオンッ！

・ ・ ・ ドゴオオオオオンッ！！

爆炎と轟音が交差した。

\* \* \*

「身をもって償えクソ共。」

クリードの眼前には炭化した『闇招く剣』の魔術師達が転がっていた。

屍々類々。惨憺たる有り様である。

容赦なく、加減もなく、全力で叩き潰した。実質5分程しか経過していないだろう。

これが魔術師クリード＝ジエイドの実力である。ギリシア神話におけるゼウスの雷撃をベースとした魔術。

それは最大電圧にして10億ボルトの雷を自在に操る術式。雷神の猛攻と言つべきその威力はいかなるものをも等しく灰燼に帰す。

迅速にして絶大。

圧倒的な一撃必殺。

この若さで“滅殺連隊”のメンバーになるのに足る戦闘能力。言うまでもなく天才魔術師である。

「ご苦労様。」

「いえ、まだまだ未熟です。つつい感情に押し流されてしまいました。」



「気にしない。追々慣らしていけばいい。」

淡々と単語と単語を繋げるような独特な喋り方をするシェンナの言葉に軽く苦笑して歩を進めるクリード。

他の生存者を探す必要がある。こんな所で時間を無駄にする訳には行かないのだ。

一歩足を出す。

その瞬間

「避けて！」

シェンナが突然大声を出した。その声に反射的に一歩退くと今までクリードの足があった部分の床が真っ二つに裂ける。

あのまま足を置いていたら真っ二つになっていたのはクリードの足だろう。

背中を伝う嫌な汗の感触を感じながら前を見据える。

そこにはいた。2人分の人影が。

「その女に感謝するんだな小僧。」

「やれやれ、面倒くさい。」

口々にそう言う影。

「お前らは…封殺将兵（f l i c t u m）ゲイル＝スピーウィッジ、レイチエル＝ライアード…！」

姿を現した1組の男女、彼らこそ『闇招く剣』の4人のトップの残りの2人。

これで1人1人が一国をも陥落させうる実力を持つ魔術師が8人揃った。

この戦いを始めるのは彼ら。終わらせる事が出来るのも彼ら自身でしか終わらせられない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0337p/>

---

とある論理の掌握演算 grasp - formula

2011年12月21日00時51分発行